
年上の君に

荒来 燈

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

年上の君に

【Nコード】

N3486L

【作者名】

荒来 燈

【あらすじ】

『薄桜鬼』初心者でしたが2次小説を書いちゃいました。ネタばれと作者の趣味が全開です。特にクローズアップされているのは沖田さんで、他キャラは皆同じ位の登場頻度です。異世界トリップしたヒロインと、沖田さんは噛み合わないながらも頑張ってます。主に作者を元気にし、読者も一緒に楽しんでもらうための『お楽しみ企画!』でしたが、途中で挫折。2次の難しさを痛感したのでした。もしかしたら勢いがついて壮大な話になるかもしれない!と期待してもいたけれど、なるようになったお話です。まあ荒来だから、と

笑って許してあげてください。

(H23年9月15日、改)

1. 『薄桜鬼』にトリップ

きつと心の底で願っていたのだと思う。あなたを救えたら、どんなにいいかと。

「さあ、と強い風が私達二人に吹き付ける（「二人」、と一括りにするのは、おぞましい気もするが）。その日は本当に良い天気。純度の高い水色の空がまぶしい。銀色地に淡い桜の柄の着物を纏って、ホテルの庭で満開直前の桜を見上げた私を見合い相手の男は「素敵なお絵のようです」と言って褒めた。その言葉に私は曖昧に微笑む。心の中では、早く時間が経たないかと憂鬱に考えていた。気まぐれな両親が勝手に設定した、このお見合いにうんざりだった。初対面の男は変な人で、私の心を全く動かさない。両親には「一度会って気に入らなかつたら、断って良い」と言われていたから、今日一日は我慢。私は他人に自分が傷つけられるのが好きではないから、自分も他人を大した理由もなく傷つけない。そのため私は、この男性からのアプローチをことごとく受け流していた。

「今日は朝から風が酷いですね」

せつかくの花見日和なのに、と相手は言った。

「ええ」

と、これには私も同意する。顔の両横にわざと垂らした髪が風で目にかかり、視界を邪魔する。私の髪についてだが、私は早朝から母に美容室へ引つ張っていかれ、無造作に伸びていた私の髪は美容師によって緩くウェーブをかけられ、成人式の女の子のように結い上

げられている。……下手したら、この髪も風に崩れる運命かもしれない。ただ一瞬後には、それも良いかもしれないと、ぼんやり考えていた。普段なら一女性として見苦しい姿を嫌う私も、無残な私を見て幻滅する相手を想像すると気持ちよくなる。

「残念ですけど、中のカフェにでも入りましょうか」

男性がしてきた提案に、私の思考はノーサインを出した。この人に向き合って数時間を耐えるのは、何の苦行か。そこで、「もう少し外にいきましょう」と私が返そうとしたそのとき。

「あつ、また！」

一段と凄まじい風に、男性が叫ぶ。

「きゃあつ」

一瞬、私は目も開けられないほど、強風に吹き付けられた。でも、それは、ほんの数秒のこと。何も問題などないはずだった。私が目を開けるまでは。

「え？」

すぐに風は収まって、今度は妖しいほど静まり返った庭に、私は果然と立ち尽くす。私の周りが三百六十度、何もかも違う景色になっていたのだ。

「どこ……、ここ」

白いコンクリートが敷き詰められていたはずの地面は、むき出しの土。色とりどりの花が植えられていたホテルの庭は、刈り込まれた松などが立つ昔ながらの日本の庭に一変していた。あのホテルはラウンチなどで何回行ったところがあるところで、日本庭園なんてあるはずがないことは、私が一番よく知っていた。共通点は桜だけ。でも、ホテルに立っていた桜とは、どこか樹の形が違う気がした。

「ゆ、夢？」

朝からののは全て妙によく出来た夢だったのだろうか、と私が思い始めたとき。

「誰、君。ここで何してるの」

後ろから、初めて聞く男の人の声がかかった。

「あつ」

その声に、私はすぐ振り返る。私も頭では、これが夢ではないと分かっていたのだ。誰かの家の庭に無断で立ち入ったら怒られるのも当たり前。時が来たら謝る覚悟を無意識に決めながら、私は簡単な事情を話そうと、その人の顔を見た。

「……………」

びつくりするほど、カッコいい男の人だった。『薄桜鬼』の沖田が現実世界にいたら、こんな感じかなと思う。ここにいる彼も庭師なのか、沖田と似た格好をしている。ん？でも、腰に長い刀……。

「早く質問に答えてよ」

いらいらしたように、エセ沖田が言う。

「あ、えつと、ごめんなさい、迷いこんでしまつて。ここは、どなたの家ですか」

私は辺りを見回す。家の周りに目印が無いかと、ふっと考え付いたのだ。見慣れたビルが見えれば、それを基点にして家に帰ることが出来る。でも、おかしなことに、あんなに沢山あったはずの高い建物が一つも見えないなあ、と焦り始めたそのとき。

「門に掲げた表札を見なかったとでも？ここは新選組の屯所だって子どもでも分かる。そんな見え透いた嘘、よく吐く気になったね。ていうか、門で誰かに会わなかったの。よく通過できたなあ」

冷たい敵意の目が私を脅かす。

「何の冗談ですか」

私は震えそうになる声を抑えながら尋ねた。こともあろうに『新選

組』だなんて。性質が悪すぎる。

「冗談？」

彼は口端だけで笑った。そして、また一步私に近づく。

「女のくせに、まさか長州の間者？……だとしたら、容赦しないよ」

彼の手が刀にかかる。何故だか、私は本気で怖くなった。この人が頭のおかしい人だったら、私は事件の被害者になってしまいかもしれない、と思った。

「落ち着いて下さい。私は何が何だか……」

私は後ずさり、その分だけ彼は私に近づく。彼との距離は広がることはない。

「待て、総司」

そのとき、力強い声が発せられた。私は声がした方を向いた。頭の後ろで高めに、一つに結び上げている長い黒髪の男が立っている。

「やれやれ、せっかくお楽しみの時間にありつけそうだったのに」
ため息について、エセ沖田は手を下ろす。でも、鋭い視線は依然私に向けられたまま。……総司って。呼び名まで、まんまかい。私は心の中だけでツツ込んだ。

「で、何もんだ、そいつ。状況を説明しろ」

私を救ったかのように見えるのは、エセ土方。

「ぶらぶら歩いていたなら、ここでこの女に会ったんですよ。そしたら、『ここはどこ』なんて言うから、怪しいと思って」

「なるほどな」

と、エセ土方はエセ沖田の話に納得したかのように、私を見た。彼もまた、冷たい目になっていた。

「取り合えず、中に入って事情を聞かせてもらおうか。あんたに**やま**かしいことが無ければ、平気だよな？」

ここでは目立つ、とエセ土方は言い出した。

「……気は進みませんね。中で何かされても、世間には分からないじゃないですか」

私は必死でエセ土方を見返して、呟く。男二人に、逃げたくても女一人では敵わない。ここは相手の良識に訴えようと思った。

「また一般人を装っちゃって。見苦しいなあ、観念しなよ」

と、軽蔑したようにエセ沖田が言う。

「総司、これで本当に一般人だったら、大目玉だぞ。隊士の誰かの家族とか、な」

そう言いながらもエセ土方がちらりと総司なる男を見たのは一瞬だけ。そして、エセ土方は私の手首を掴んだ。

「そろそろ、中に入ってもらおうか。――抵抗したら、どうなるか分かんねえぞ」

1・『薄桜鬼』にトリップ（後書き）

話があわなくなったら、改稿する気まんまんです。大幅には変えな
いつもりです。

2・『名告らさね』

数分のの中には、エセ新選組の幹部衆らしき男達に囲まれて、私は大きな部屋の中心に座っていた。皆の視線が突き刺さる。私は気がおかしくなりそうだった。もう皆、『薄桜鬼』の登場人物にそっくりで、もはや私はトリップしたのだろうか、信じたくなくなるくらいだった。

事情を説明しろと大勢の前でエセ土方に詰問されて、結局私は正直に話した。下手に嘘をついてバレたときの、彼らの制裁を私は恐れた。ホテルにいたこと、強風、気付いたらここの庭にいたこと。私の話に静かに耳を傾ける彼ら。その表情は真剣そのもので。私はこの状況が何かの冗談なら大概にして、と思った。男達の演技は徹底しすぎていた。彼らの一人が『ホテルとは何か』、そう私に聞いてきて私は説明する。

わずかな沈黙の後、

「最初から何もかもが嘘臭いんだよね」

気に入らない、とばかりにエセ沖田が口火を切った。

「確かになあ」

エセ沖田の言葉に、大半が頷く。

「……それで、」

私は自棄になって聞いてみた。

「いったい今の年号は何なんです？」

何を言い出すんだ、コイツは。そんな目で、皆が私を見た。

「文久、ですよ」

何か思うところがあったのか、律儀っぽく答えてくれたのは、眼鏡をかけ落ち着いた声の知的そうなエセ山南。

「おいおい、山南さん―」

と、エセ永倉が一番にツツ込みを入れた。私の馬鹿な質問に付き合うな、とでもいうところだろうか。

「それが何だっというんだ。あんた、頭おかしいのか。時間稼ぎなら、無駄だぜ」

エセ原田が言う。

「私は本気です。どうやら、皆さんの様子から察するところ、私は……三百年後くらいの未来から来た人間みたいです」

私はゲームの世界に入ってしまったとは言わなかった。話が余計混乱しそうだったからである。……私は『自分はトリップしたと考えよう』と腹を括くつていた。こうなったら、彼らの調子にとことん付き合ってやろうと思った。

「この場でそう言える貴女は面白いと思うけど、やっぱり発想がお粗末じゃん。未来から、だなんて」

平助君が呆れたように言う。彼の発言は至極真つ当だった。

「それは、簡単には信じられないのも分かりますけど……。私も正直、信じられないし」

私が彼らに『これだ!』と突きつけられる確たる証拠は何も無い。

「……こりゃあい。じゃあ、未来から来た御方、とやら。この後、新撰組が遭遇するのは何だか教えてくれるか?」

悪い冗談に乗ったみたいに、土方さんが薄く笑って言う。その挑発を、私は受けた。

「日本の歴史は私の専門外ですけど。……枳屋で一騒動の後、池田屋で会合する長州勢を検挙ってもう終わってますか」
ファンの方々には悪いが、まだ私は『薄桜鬼』を高速で軽く一回やった程度だ。詳しいことはよく分からない。

土方さん、そして他の何名かが目を見開く。

「枳屋、池田屋、だと？何で、その言葉が出てくる」

土方さんが思わずというように呟いた。その様子から、どうやら今まさに新撰組は枳屋に目をつけたところなのかもしれない、と思う。

「長州の者という可能性も高くなったようだ。わざと信憑性のある情報を口にし、我々に信じさせようとしているかもしれない」

土方さんの反応を見て、斉藤さんが言う。

「何か言えって言うから言ったのに……」

私はがつくりした。

「そういえばさ」

沖田さんが口を開く。行き詰ったこの場で何を言い出すのか、と皆の視線が沖田さんに向いた。

「まだ聞いてなかったことがあった。君、名前は？僕は沖田総司と言います」

皆、この発言には呆然とする。だけど一瞬後、私は吹き出していた。この人には敵わない。

「大野あゆみ、と申します」

2・『名告らさね』（後書き）

題名の『名^{なの}告らさね』は、『万葉集 卷一』の巻頭歌である、雄略天皇の御製歌から拝借いたしました。

3・新選組預かり

「トシ、大野君と雪村君を同室にして、一緒にいてもらおうというのはどうだね」

ずっと黙っていた近藤さんが口を開いた。

「近藤さん、あんたはこの女の話をも早くも信じたってのか」
じろりと土方さんが近藤さんを見る。

「いや、完璧に信じたわけではないが」。だが、もうこの場で彼女の真偽を確かめることは不可能じゃないか。もし真実、長州に無関係だったなら、傷つけて口を割らせるわけにはいかない。これから我々が見張る人物が一人から二人になっても、さして問題は無いだろう?」

人のいい近藤さんが土方さんたちを説得してくれる。彼の言葉で、私の推測が当たっていたことも分かった。今は、雪村千鶴が医者之父を探して江戸から京に一人旅をして、隊の秘密に触れた為に新選組によって軟禁されて間もない時点。池田屋事件の直前だ。千鶴は男装しているものの、本当は女の子。彼女と私を同じ部屋に入れるのは確かに問題ない。

「仕方ねえな」

土方さんは、いまいましそくに頭をかく。

「――大野、お前の身柄は当面、新選組が預かる」

「男装……」

と、千鶴ちゃんと自分の部屋に座った私は向かい合う斉藤さんに咳く。

「そうだ。雪村は表向き男、その同室のあんたが女では体裁が悪い。そもそも、男ばかりの屯所に公然と女を置けないしな。あんたには雪村同様、男装をしてもらう」

斉藤さんの説明に私は納得した。男装なんて、面白そうな展開だと思う。

「分かりました」

という私の答えに、斉藤さんは浅く頷く。うわあ、この仕草カッコいいなあ、なんて不謹慎に思ってしまう。ゲームでは、私は沖田さんの次くらいに斉藤さんが好きだった。そんな気がする。

「斉藤さん、お願いがあるのですが」

と、私は斉藤さんに切り出してみる。

「なんだ」

斉藤さんは職務に一本気な人だが、心の底は誠実だ。彼に頼めば、きっと伝わる。

「近藤さんに、ありがとうございますと、お伝え下さい。命を助けてくれて、ここにも置いてくれて感謝しております、と。……本当は自分で言いたいのですが、部屋から出ないほうが良さそうなので」と、私は言った。

斉藤さんは少し驚いたようだったが、

「受けあった」

と言って、出て行った。

私が新選組へ来て三度目の夕食時。千鶴ちゃんに同伴して、私も幹部の皆と一緒に食べる。

「それでさあ、あゆみさんって、いくつ位なわけ？」

女の私に少しは氣を使つてはいるものの、やはり氣になるのか年齢を尋ねてきたのは平助君だった。その途端、場が静まり返る。え、何。皆そんなに私の年齢が氣になるの。……そりゃ、そうか。一歳でも年長者は年長者。上下関係の厳しい昔の日本だもんね、ここは私は素直に答えることに決める。

「××歳くらいかな」

「何、『くらい』って」

と、戸惑うように平助君が当然聞いてくる。

「多分、私の来た時代と年齢の数え方が違つかもしれないから。皆は『数え年』っていう数え方だっけ？よく分からないけど、大きくて一年くらい誤差があるかも」

「じゃあ、俺や総司よりは、いくつか年上だね。左之さんや新八つあんとは同じくらいかな」

と言う平助君の言葉に、

「……さりげなく自分と総司を同列に置いたな。幹部で一番年少のくせに」

と、新八つあんがツツ込みを入れた。

「何だよ、いちいちうるさいなあ、新八つあんな」

ああ、この二人の漫才っぽい会話最高。これからは、いっぱい生で見られるんだ。期限はあるだろうけど。……話の発端は私だったのに、部外者のごとく暖かい目で二人を見守る私だった。

3・新選組預かり（後書き）

『薄桜鬼』を全く知らない人に対する配慮が……難しい。

4・危険なおしゃべり

ある日の昼間。

「あつ、やっぱりいらつしやったんですね」

と、私は努めて元気良く言う。自分達の部屋の襖を中から開けてみて、気配なく沖田さんが、少し離れた縁側に腰掛けているのを発見したのだ。私と千鶴ちゃんとは幹部メンバーによって交代で見張られている。

「今日は沖田さんですか。そんなところにいないで、中に入りませんか？一緒に話しましょうよ」

私がそう誘っても、沖田さんは座って足を軽くぶらつかせたままだ。

「どうして貴女と話さなくちゃいけないんです？それから軟禁されている立場なのを分かってます？」

沖田さんはこちらを見やると、少しあざ笑うように言った。ぐさつきつつ……。この人は酷いことを言うときでも笑う。というより、私が傷つこうが構いはしないのだろう。ええい、このまま引き下がってなるものか。絶対に中に入れちやる。と、妙な決心をした。

「あら、お話はお互いに有意義なんですよ。私は退屈しのぎに。沖田さんの方とは言えば、ふと漏らされる私の情報を得られるかもしれないじゃないですか」

私も笑って言うて見せた。

「そして、貴女は僕から漏らされる新選組の情報を手に入れる」

沖田さんの笑みが深くなった。

「漏らす気なんですか？」

と、私は誘惑に負けてついつい言ってしまう。まずい。あんまり調子に乗ると斬られるかな、と少し不安になるも、我慢して微笑み続けて見せるが。あー、怖くてもうこれ以上頑張れない。あきらめてそろそろ中に入ろうか。沖田さんの盗聴なんて放っておいて、千鶴ちゃんと語って語って語りまくろうか。それも面白そうだ。ずっと部屋を出られない私たちには、時間がたつぷりある。

「漏らしちゃうかもね。僕は考えなしですから」

と、沖田さんが明るく答えた。それは冗談だって信じてます。貴方、幹部なのに自由すぎるんですよ。と、いつか言ってやりたい。というこそ、冗談だが。

「……でも、そうだな……。話してみるのも、たまには悪くないかもしれない。お邪魔します」

よいしょ、とゆったり立ち上がりながら、彼は言った。はれ？入ってくれるの？嘘っぱい。

「どうぞ、どうぞ」

私は彼を部屋に招き入れる。中では千鶴ちゃんが先程までの少しあせた表情を隠せず笑う。きっと今まで、私達のすさまじい会話を、目を白黒させながら聞いていたのだろう。ごめんね、心配かけて。自重するよう気をつけます。こんなに羽目をはずすのは、私も久しぶりだから、楽しくなっちゃったんだよ。

私達が斜めに向かい合って気ままに座った直後。

「他の人達とも、こうして話し込んでるみたいですね？」

部屋に來た彼の第一声がそれ。彼の、鋭く見やる瞳と、いつもの微笑みを私は見る。

「ご存知なんじゃないですか。やっぱり情報はきちんと行き来して

るんですね」

私は今度こそ心から笑う。自然に楽しくなってきた。というか、麻痺してきた。どうでもよくなってきた。でも命は惜しいから、ほどほどに。

「平助君や左之さん、新八さんは分かるよ。でも、一君も見事に引っ張り込んだんですってね」

沖田さんが詳しく聞きたそうな様子を見せた。私は内心意気込んで、説明をうけ合う。

「そうですよ。皆さん、とても友好的で、素敵な仲間であらやましいです。斉藤さんも、沖田さんと同じで、縁側で話すうちに面倒になったのか付き合ってくれました。悪いことをしました」

「一君は、ただ貴女と『話した』としか言っていなかったけどね。まあ、だいたいそんなところでしょうね」

まったく一君ときたら余計なことは教えてくれないから、と沖田さんはまた笑った。何て無邪気に笑うのだろうと、私はまぶしく彼を見つめて、気付かれないうちに視線を逸らした。

4・危険なおしゃべり（後書き）

女の子はしたたかなんです。主人公が沖田さん並に自由になってきた……。もっとお淑やかだったはずが。

5・殺！！幹部

今日も幹部の皆さんと、千鶴ちゃんと私は朝ごはんをいただいて……そして我らが自室へ、そのまま戻る。

「何というか、まあ本日も何もすることないね……」

という、私の言葉に、千鶴ちゃんも「ええ」と少し憂鬱そうな表情で相槌を打つ。私は退屈していた。そして千鶴ちゃんの方は私の比ではない。自分の父親だと思い込んでいる綱道さんを探しに行きたくても行けない状況なのだから、気が気ではないだろう。

いつもなら、そろそろ顔を見せる見張り役である幹部の誰かも、何故か今日はなかなか姿を見せない。

「ねえ、千鶴ちゃん」

私は微笑みを浮かべつつ彼女に話しかける。千鶴ちゃんは私の表情から何事かを察知し、怪訝そうに私を見返した。

「じゃあ、行つくよー！」

私は庭に落ちていた太く堅く長い裸の枝を千鶴ちゃんに向かって構えた。

「ちょっと待って下さい。やっぱり勝手にこんなことをして、見つかったら……」

と、千鶴ちゃんは自分の小太刀を鞘に入れたまま私に構えつつも、まだ納得していないようだ。

そんな彼女を安心させるために、

「なんとかなるよー」

と、私は言い返す。

「庭だし、大丈夫！だって繰り返すけど、千鶴ちゃんは護身術があるから外出も幹部の人達に検討されてるじゃない？だから私も護身術身につけて、一緒に外出したいの。お願い！」

それでも千鶴ちゃんはまだ納得してない様子だ。彼女は正しい。でも優しいから必死の私の頼みを完全に断りきれない。そんな彼女の優しさにつけこんで、私は我が侬を言っている。庭に出ることを始め、勝手な行動をしたことで私だけでなく千鶴ちゃんにも新選組幹部から罰があるかもしれないのに。でも、私の我慢は限界だった。こんなに外に出られないことが辛いとは思わなかった。何としてでも外に出る許可が欲しい。そんな焦りが醜いほど私を冒し始めていた。

結局、私の焦燥とした目をじっと見た千鶴ちゃんは、

「分かりました……。かかってきてみて下さい。上手く教えられる自信はありませんが」

と、渋々言ってくれる。

「ありがとうございます。ー行きます！」

私は千鶴ちゃんに向かって、勢いだけで打ちかかった。めちゃくちゃに次々と枝を振り回す。千鶴ちゃんは全て難なくかわしたり鞘で受け止めたりする。やっぱ我流じゃあ相手にならないなあ、と思い始めたとき。

どつ。

自分の背後から大爆笑が聞こえた。私は後ろを振り返る。植え込みの近くに、平助君・新八つあん・沖田さんが立っていて、皆で息も出来なそうなほど、ひいひい笑いまくっていた。

「ぶはつ。だつ、駄目だあゝ。止まらねえ」
と、平助君。

「最っ高。あゆみちゃんの、めちゃくちゃな打ち込み」
と、新八つあん。

「血相かえた新八さんに呼ばれて、来て本当に良かった。ま、まさか、ここまで面白いものが見られるなんて」
と、沖田さん。

恥ずかしさで顔に、一気に血が上った。しかし。その後も腹を抱えて笑い転げている三人を見ると、だんだん羞恥は怒りに変わっていった。

「くおらああー！いつまで笑つとるんじゃー！！」
その日、私は逃げる三人を枝でもって追い回した。千鶴ちゃんは呆れて立っていた。

5・殺！！幹部（後書き）

このお話はギャグだけではないです、念のため。

6・鬼と海と

「……………それで？今朝、あんたは嫌がる雪村をむりやり庭に引つ張り出して、指南を受けたわけだ」

と言うのは、今日はいつもに増して大きく見える、鬼の土方さん。私は彼の言葉に頷く。今、私は彼の前で、小さくなって座っていた私の隣には千鶴ちゃん。少し離れて、平助君・新八つあん・沖田さんが座る。

幹部の三人と追いかけてこをしていたところを、ちょうど通りかかった土方さんに見つかり、近くの部屋に全員まとめて入るよう命じられ、今に至っていた。土方さんの厳しい視線に、私は恐々としている。

すると、

「私つ……………」

と、千鶴ちゃんが言いかけた。それを、私は横から、ものすごい形相で睨みつけて押さえつける。そして、よほど驚いたのか千鶴ちゃんは黙ってくれた。彼女が土方さんに何を言おうとしていたか、私には大体検討が付いていた。きつと、私だけが悪いのではないとでも、言ってくれようとしたのだろう。でも、そんなことをされたら、こちらが居たたまれない。悪いのは全部私なのだから。

「—なあ、あんたにや分かってんだろ。あんたは長州の間者かもしれないって、俺たちや疑ってんだよ。あんたに護身が出来ようが出来まいが関係ねえ。外出なんぞ簡単にさせられるかよ」

土方さんも、千鶴ちゃんに向けた私の眼力に驚いたのか、ちょっと間を置いた後で言った。

「すみませんでした」

と、私は素直に謝る。本当は、『ただ部屋に籠もって待っていてもずうつと何も変わらないでしょう?』と言いたい。―でも、今日は本当に楽しかった。庭とはいえ、外で千鶴ちゃんと稽古をして。三人と走り回って。私は皆に感謝している。だから、自分以外の誰にも今日の咎とがを受けて欲しくないと思った。

黙したまま思案する土方さんの視線は、ずっと私の上だ。すごく怖い。思い出すのは、初めてこの人と会った、あの日。あのときも私は、自分の命を心配していた。新選組の手によれば、簡単に奪われてしまう、私の小さな命を。

私は土方さんの言いつけを破った。私は勝手に庭に出た、いたく反抗的な捕虜。もう殺されても、文句も言えない。私は黙って、土方さんを見つめていた。―ふと、彼の瞳を見ていたせいもあるのか何故だか、美しい大きな海を連想する。辺りがやけに静かだ。よく耳を澄ませば、寄せては浜辺の砂をたやすく攪さらう波の音が聞こえてくる気がする。『死』というものを目の前にして、心は絶望を覚悟しながら、海の側に立っていた。別に港町で生まれ育ったわけではないのにも関わらず、だった。海への憧憬、海に回帰したいという願望。意味も無いと思われることを考えていると、今度は残してきた家族の顔や友達の顔、千鶴ちゃんや新選組幹部との思い出までが走馬灯のように頭の中を駆け巡り…………。

「庭で雪村から護身術を習うただけだぞ。いいか、これは最大限の讓歩だ。屯所の外にあんたが出られるなんて、大きく望むんじゃねえ。」

それから、これに乗じて逃げようなんて思うなよ」

土方さんが言葉を押し出すようにして、口を閉じる。

「嬉しいです。ありがとうございます。土方さん」

私は舞い上がってしまいそうな自分を辛うじて抑えながら、礼を言った。良かったな、と新八つあんがすぐ声をかけてくれた。

「別に感謝されるようなことはしてねえだろうが」

ちつ、と土方さんは舌打ちをした。一拍置いて、彼は私から視線を逸らし……。

「次はお前らだ。何で大野が庭に出て勝手したとき、すぐに止めなかった？」

平助君たち幹部に鬼の矛先が向かう。

「お前ら三人だけで今日から一週間、飯の当番を回せ」

ええ、という不満の声を、土方さんは一喝で鎮める。そのまま土方さんは部屋を出て行った。千鶴ちゃんにお咎めはなくて、私はまた土方さんに心の中で感謝した。きっと、今回だけは私という一個人を尊重してくれて、千鶴ちゃんには何もなかったのだろう。そんなふうに調子よく思い込んでみてもいいかな、と思った。

さっき土方さんに怖い思いをさせただけで、私にも罰は無い。一方、沖田さん達三人にはあつて、少し申し訳ないけど、毎度こうして不手際をした者にはきちんとお仕置きをしなければ、隊はまとまらないのかもしれないと、ふと私は考えてみたり、などした。

7・事は必然に

それは、私がこの世界に来て約三ヶ月後の夕方のことだった。平凡と非凡が混ざる日常をいつも過ごしながら、私の心は今か今かと、このときを怯えながらも待っていた気がする。

事の始まりは、

「貴女が以前に言っていた情報をもとに、新撰組は今日の昼、枡屋を捕らえた。これから池田屋に討ち入る」

と、千鶴ちゃんと私の部屋に忙しいにも関わらず寄ってくれた平助君が教えてくれたことだった。

「まあ、でも。まだ、貴女は全員に完全に信用されてるわけじゃないから池田屋だけでなく四国屋にも人手を割くみたいけど」

と、さらに平助君は気まずそうに付け加える。ううん、それはどうしても仕方が無いのかもしれない、と私は思う。ゲームの世界とはいえ、話の内容を変えて池田屋に全員を投入してしまったら。展開が変わって私の知る結末から、もっと遠ざかってしまう恐れがある。そうになったら、私を待ち受けるものはひどく恐ろしいものとなる。気もした。

「気をつけて、平助君。きっと強い奴に会うから」

私が言うと、

「何それ、また予言？」

と、平助君がおかしそうに言う。それから彼は、誰に向かって言っているの、と不敵に笑った。

「じゃあ、そろそろ行くから」

背を向ける平助君に、耐え切れずに私は声をかける。

「沖田さんにも、気をつけて、と」

平助君が振り向く。彼は私の取り繕うのを忘れた表情に驚いた。

「分かった、伝えとく」

真剣な面持ちになると、彼は頷いてくれた。

「ありがとう」

私は笑って礼を言った。私は平助君の背中を見送りながら、『でも本当は、自分で沖田さんに伝えられたら良かったのに』と、残念に思う。例え、『甘く見るな』と、沖田さんの機嫌を損ねようとも。私は、自由に彼の部屋に赴けない、軟禁の身が無性に悲しかった。

討ち入りの興奮にざわついた屯所が、隊士達の出立によって静まりかえると、山南さんが私達の部屋を訪れた。

「大野君、雪村君。二人共、広間に来て下さい。この人手が薄くなつた屯所は危険が大きい。いつ、誰が攻めてくるか分からないのです。私と共にいれば、私が君達の盾となれるかもしれない。さあ、急いで」

いつになく山南さんが早口で話す。

夜更け。新選組の忍^{しのび}ごと、監察方の山崎さんが私達の前に現われた。

「本命は池田屋でした」

と、彼は山南総長に報告する。やっぱり池田屋か、と私は心の中で事実を受け止めた。――山南さんはどうするのだろうか。私は山南さんを見た。

「山崎君。大野君・雪村君と共に四国屋の土方君のところへ伝令に走ってくださいか。『本命は池田屋だ』、と。途中、何に阻まれるか分からない。伝令は一人でも多いほうがいい。だが、ここには他に行かせられる隊士はいないので。君たちに頼むしかない。私はここに残って屯所を……守ります」

山南さんは決断を下した。

私も行つていいんだ。山南さんに背中を押された感じがした。正直、行くのは怖い。でも、何故か行かなければならない気がした。理由はあえて挙げるならば大から小まで色々あるのだろうが……。新選組への愛着とか、皆の身が心配とか。とにかく簡単な言葉では、直ぐにまとめられない。

「はい！」

と、千鶴ちゃんと私は同時に了承の返事をして、私は一旦思考を遮断した。

「大野君」

走り出そうとした私達三人を、山南さんの私を呼び止める声が押さえた。私は山南さんを振り返った。

「これを持って行きなさい」

山南さんがその腰に二つ身に付けていた小さい方の脇差しを片手で私に押し付けた。私は戸惑う。確かに千鶴ちゃんは自分の小太刀を腰に帯びており、私は丸腰だが……。

「でも私がこれを持っていつてしまったら、山南さんが困るのでは」

「大丈夫。まだ刀は他の場所にもありますから。ここをどこだと考えているのです？天下の新選組ですよ。刀の蓄えだってあるのです」

そう言つて山南さんが私を見る目が真摯だったので、素直に私は彼の刀を受け取る。

「ありがとうございます。後で、きちんとお返しします」

山南さんは「ええ」と微笑んで頷いた。正直にいうなら、自分の身を守るものを借りられるのは有り難かった。これから、何が起くるのか分からないのだから。

私達三人は走る。他の二人の早いこと。私は慣れない草履に辟易しながら、二人の後ろを追う。よくこんな履物で千鶴ちゃんは走れるなあ、と驚いた。ましてや千鶴ちゃんと私は今までほとんど屋敷の外から出なかったのだ。足腰は相当弱っているに違いない。

「四国屋はこのまま、真っ直ぐだ」

山崎さんは私達を一瞬だけ振り返つて言う。

そのとき、やつらは現われた。やはり長州の者だろうか。私達は行く手を阻まれる。

「行け！雪村君、大野君」

山崎さんの叫びに、私達二人は唇をかみしめて、再び走り出す。

ようやくの思いで、四国屋に到着した。

「何だ、おめえら……」

土方さんが、表情を険しくして私達を見つけた。

「ほ、本命は……」

と、息もぜいぜいの千鶴ちゃんが口を開ける。

「池田……屋……」

私も遅れて付け足した。血のような味が口いっぱいに広がって呼吸も苦しく、心臓はフル活動で、足も身体も思い通りにならない。

「お前らを伝令に出したのは山南さん、だろうな。――よし、これから全員、池田屋に向かう！ 急げ！」

土方さんの決断に、隊士の皆が走り出す。千鶴ちゃんと私も一緒に付いて行った。

私達は池田屋に到着する。斉藤さんは土方さんの命で池田屋に突入し……、私はどさくさに紛れて彼の部隊に続いて中に入る。皆が心配で――、いや特に気にかかるのは皆には悪いが沖田さんのことだった。

8・池田屋にて

私は沖田さんの姿を求めて二階へ急ぐ。一階は乱闘がいたる所で繰り広げられており、その中を死に物狂いで私はすり抜ける。敵に目を付けられたら、終わりだと思った。いくら毎日、千鶴ちゃんに稽古をつけてもらったとはいえ、実戦を経験している猛者達に私ごときが敵うはずもない。

なんとか階段を上りきり、剣のぶつかる音に耳をすませながら私は進み、襖の陰に立ち止まる。部屋奥に、ぼんやりとした月明かりの下、沖田さんが見えた。彼に対するのは、襟ぐらいまでの短く横ハネした金髪をもつ風間千景。この二人の戦いは運命的なもので、避けられるものではないのだと、私は一瞬で飲み込む。さて、どうしたものか。私にこの戦いを終わらせることは出来ないだろうか。私に出来ることを見過ごすまいと、私は二人の動きを注視した。

ぜいぜいと荒い息をする沖田さんに対し、余裕たつぷりの風間さん。このままでは沖田さんが殺されてしまうかもしれない。私は自分の足下に落ちていたお茶碗を拾い上げる。でも、上手く投げられるかどうか、自分が沖田さんの力になれるのか自信がいまいち持てない。かといって、のこの二人の前に出ていつて風間さんに引いてもらうよう説得しようものなら、沖田さんの不信を買う気がする。いくら風間さんは長州の者ではないと、沖田さんに言ったところで、どうして沖田さんが納得してくれるだろうか。

そのとき、迷う私の前で、沖田さんが風間さんに胸を思い切り蹴られた。沖田さんがその衝撃で、口から大量の血を吐く。私は頭の中が真っ白になる。何で、すぐに自分は出ていかなかったのだろうか。

自分の臆病さが、沖田さんを窮地へと追いやる。

風間さんの正体は、鬼なのだ。鬼と言っても姿は人間と一緒になので沖田さんには分からない。だが、鬼の力は人間の比ではない。こうして躊躇う間にも沖田さんがあぶない。早く行かなければ――私は震えながら、ありったけの勇気を引っつかんだ。

「刀を合わせているところを邪魔して申し訳ございません」

と、私は二人の前に姿を現す。彼らは剣を構えたまま、目だけをこちらに向けた。

「どうしても、お聞きしたいのです。貴方は誰ですか？どうして、長州藩の方はこうまでして悪事をたくらむのですか」

私は風間さんの方を向いて、質問を重ねる。風間さんが私の思惑通りに、自分は長州の者ではないと、口にしてくれれば良いと願う。そうしても沖田さんは、簡単には納得しないだろうが。

「人間の女まで、しゃしゃり出てくるとは、な。どうにも奇妙な晩だ」

風間さんは一瞬、じっと私を見て、持ち前の低音で呟く。うわあ、もうバレた。さすがだなあ。これで次にどう転ぶか。吉に出れば良いのだが。

「女ですと、質問には答えただけじゃないものでしょうか。いいえ、お名前を尋ねる前に名乗るのが先ですね。ちょうど私の性もお分かりのようですから、本名をお伝え出来ます。私は大野あゆみ、と申す者でございます」

私は足が震えるのを抑えながら、言葉だけははつきり届くよう苦心しながら言っ。

「あゆみさん、邪魔しないでくれませんか？こいつらの細かい事情なんて、今はどうでもいいんだ。それとも、貴女はこの男の仲間で、こいつが逃げるのに荷担しようとしてもしているのかな」

風間さんが私の言葉に反応する前に、ギラギラした目の沖田さんが口を挟む。……あっちゃー。そりゃあ、そう疑うよね。こうなることを、私は恐れていたのに。

「なるほど。人間とは、やはり狭量な。相手を不信し、追い詰める……だが、見世物としては滑稽だ。反吐が出る」

くくつと喉を鳴らすように笑ったかと思うと、急に吐き捨てるように風間さんが言った。そして彼は続ける、

「女、やはり邪魔するな。まずは、こいつの望みどおり、この男を斬り捨てるのが良さそうだ。お前の処分はその後で決めてやる」

「私は『女』という者ではございません。大野です、と先程申しましたはず」

私は沖田さんの前に出た。この際、沖田さんに背から斬られようと構いはしない。彼を守るなら、私の命なんてどうでもいい。私は風間さんの赤い瞳から、目を逸らさない。

「……気の強い女だ。自分の名乗りを再三繰り返して、どうやってもこの俺に名を言わせたいらしい。俺は風間千景、だ」
あきらめたように、風間さんが名乗る。

「どこの藩に属しているのですか」

これだけは、沖田さんの前で答えてもらわないと、私が困る。

「さあな。教えてやる義理は無かるう？」

興が冷めたような表情で風間さんは刀を鞘におさめた。

「いったい何のつもりだ」

私の肩をぐいと押しのけて、沖田さんが一步前に出て風間さんに言う。

「それも答える義理が無いな」

風間さんは私達に背を向けた。

「――風間さん！」

内心怖い私は責めるように、彼の後ろから小さく抗議の声をかける。すると、眉根を寄せ面倒そうな表情で風間さんは私を振り返った。

「俺はどこにも属さない。人間は皆、貴様らと同じ、うるさいだけの存在。関わる価値も無い」

最後に風間さんが窓に足をかけながら答えてくれる。答えてくれて有難うございます、と言いたいのが沖田さんの手前、言えないのが残念だ。

去ろうとする風間さんを逃すまいと、沖田さんが飛び出そうとする。風間さんは妖しく笑った。風間さんはひらりと窓の外に飛び降りながら、ふと思いついたように、

「大野、お前には二度と会いたくない」

と、言葉を残す。そして一瞬で風間さんの姿は掻き消えた。

「……………私もそう思います」

私は消えてしまった風間さんに同意した。風間さんはかつこいいけれど、実際に直で接するとなると刺激が強すぎる。こちらの心臓が持たない。さすが鬼、と私は無駄に風間さんを心の中で褒め称えた。

「どういう、つもり？」

そのとき、横から刺々しい声がする。はっ。風間さんのことを悠長に考えている場合ではなかった。今、私に対応すべき方は、残念ながら他にいらっしやるのだ――

「別に他意は無いですけども」

私に対して殺気びんびんの沖田さんに冷静に受け答えるのは、風間さんと話すのと同じほど恐ろしい。沖田さんはまだ抜き身のままの刀を携^{たずさ}えていた。

「まず、どうしてここにいますか？」

沖田さんは私の言葉なんて聞いていなかった。

「山南さんに頼まれて、山崎さんと千鶴ちゃんと一緒に四国屋まで伝令に走った後、ここまで皆さんと来ました」

静かに私は答える。こちらに疚^{やま}しいことなんて一つも無いのだから、彼が納得するまで答え続けようと私は決めた。

「僕と風間の間に立った理由は？風間を逃がすためですか」

沖田さんの冷たい色をした目を、悲しく私は見た。

「それは――」

言えやしない。貴方を守りたかったなんて。貴方が好きと伝えてしまったら、きっと沖田さんは私を軽蔑して遠ざけるだろう。

「それは、無益な戦いを止めるためです。驚いたことに、風間さんは『どこにも属さない』と言っていたじゃないですか。この言葉を信じるならば、彼は長州藩の人ではないということです。だから風間さんを傷つけるのは正しいことではないと思います」

私は尤もらしく必死に話す。我ながら、なんて愚かしいのだろうと

思った。

「今夜、あいつがこの場にいたこと自体、怪しいんですよ。ここに集まった長州のやつらが、他の目のあるところで安心して会合するわけがない。当然、人払いがされていたはずだ。ゆえに風間は人払いされなかった者。長州の人間、ということだと、沖田さんが憎々しげに吐き捨てる。

「そう判断してしまうのは早いのではないだろうか。彼の身のこなしを見たでしょう？彼と戦った貴方の方がよく分かっているはずです。彼は音も無く身軽にここへ忍び込んだのかもしれない。会合者たちは気付きもしなかった。有り得ないことではない気がしませんか？」

と言葉を並べ、私は一生懸命沖田さんを納得させようとしていた。だが、何かがいつもと違う。そのとき私はようやく沖田さんの身の異変に気がついた。沖田さんの息が荒くなってきた。……いけない！！戦いで彼の身体は傷つき、疲弊しているのだった。言い争っている場合ではない！

——沖田さんは咄嗟に駆け寄り私の目の前で意識を失い、床に倒れこんだ。

9・夢うつつ

―山南さん。

―山南さん。

私は山南さんに視線を投げ、何度も心の中で呼びかける。すぐに山南さんは私に問うような視線を返した。だが私は周囲の目があるために、口を開くことが出来ない。そんな私の意図を察してくれたのか分からないが、山南さんは何事も無かったかのごとく無表情になった。一方の私は皆に気付かれないように幾度も山南さんから視線を逸らし、また視線を戻すということを何回と繰り返す。

―お願い山南さん、気付いて。内密で貴方にお話があるんです。

山南さんは人の心が読めるのだろうか。広間に集まった新選組の幹部が腰を上げ、気の早い二・三人が部屋を出たところで、

「御用をお聞きしましょうか」

と、山南さんは自ら私に近づいてきてくれた。その場にまだ残っている、『なんなんだ?』という幹部の目が気になるものの、致し方ない。このまま話そう。

「初対面で失礼かとは思いますが、それを承知で申します。近々、もし戦いに出会ったら。ご自分の身を守ることを最優先になさったほうがいいかもしれません」

「―それは、私に対する侮辱と受け取っても宜しいですか。武勇よ

りも己の命を守れ、と言つのですか」
山南さんの声が冷たくなる。

「そうではありません。ただ、聡明な貴方は、人の忠告の大事さというものをご存知でしょう。聞くも聞かないも貴方の自由です。でも、その時が訪れたときに私の言葉を思い出していただければ。そう僭越ながら願っているだけです。——こうして怪しい私の話に耳を傾けていただいて、ありがとうございました。もうこのお話をして、御心をわずらわせることはございません。ご無礼、お許し下さい」

山南さんは、私ごときの言葉に激昂するようなことはしなかった。うさんくさそうに、黙って私を見ただけ。

——そして私は新選組に軟禁され、山南さんと土方さんたちは大坂に出張する。そこで山南さんは隊務中、左腕に重傷を負った。……もう、彼は十分に刀を振るうことが出来ない。

動かない左腕は、山南さんを追い詰めていった。山南さんは新選組における自分の価値を信じる事が出来なくなる。周りがどれほど山南さんの必要性を説いても信じようとしない。山南さんの口調は辛辣になり、周囲との距離が開いていく。

それでも、まだ山南さんは本来の彼の信念や心根を失ってはいない。屯所で千鶴ちゃんや私を守ると言ってくれた山南さん。屯所の留守を英雄しく預かった山南さん。私に一晩、脇差しを貸してくれた山南さん。あのとき私は、山南さんの姿を見て安堵し嬉しく、これからに希望を抱いた――

雀の鳴き声に、私は驚いて目を覚ます。……ああ、畳に座ったままで少し眠ってしまったんだ。私はすぐ近くに敷かれた布団に眠る沖田さんを見下ろす。どうやら私は、初めて新選組と出会った日のことを夢に見ていたようだ。

自分は疲れてたんだな、と思う。肉体的にも、精神的にも。急激な運動と、一連の池田屋事件の緊張。沖田さんを診てくれたお医者様に「命に別状はない」と言われたことで、無意識に気が抜けていたのだろう。沖田さんが倒れてから、皆に何を言われようが彼の側に張り付いていて自分は布団で眠らなかつたから、身体は睡眠を欲して聞こえない悲鳴を上げていたようだ。

それにしても何故、山南さんの夢を見たのか。それは多分、私が運び込まれる沖田さんと共に帰ってきたときに、山南さんに会って刀を返した記憶が残っていたからかな……

「よお。今、医者が帰っていった。あゆみちゃん、手際が良いって話してたぜ」

わずかに開いていた襖が完全に開けられて、新八つあんが部屋の中

に入ってくる。

「……医者、に關係する仕事をしていましたから。医者ではないですけれども」

私が答えると、「なるほど」と新八つぁんは納得し、

「さつき平助の部屋も覗いたんだが。平助の看病を買って出てくれた千鶴もうとうとしてたぜ。あゆみちゃんも疲れてっだろ」

新八つぁんからの労わりの言葉が嬉しい。

「数刻前に平助君の部屋に私も行っただです。そのとき千鶴ちゃんから平助君も命に別状がないと、聞きました。本当に良かった」
私が言くと、新八つぁんは「そうだな」と言って目を細めて笑い、

「そんじゃあ、怪我人の俺も大人しく部屋で寝てるわ」

と、早々と退散した。私に氣を使ってくれたのかもしれない。穏やかな、沖田さんと二人きりの時間。これは、なかなかあるものではない。開け放たれたままの襖から、外の清しい風が吹き込む。私は庭の方に目をやってみた。どこにも、人の姿が見えない。私に一人で沖田さんの看病をさせることを許すなんて、ありえるのだろうか。それとも私に見えないように、どこかで誰かがやはり見張っているだろうか。私はぼんやり考えていた。

「――僕を殺すのをためらっているんですか。それとも看病で恩でも売るつもり？」

と、急に沖田さんの声がする。彼は目を開けており、私から視線を逸らさず尋ねてくる。

私は何も言わないで少し微笑む。沖田さんはそんな私を見返すだけだった。やがて、彼は口を開く。

「貴女はやはり長州の間者で、僕達の信頼を得る目的でわざと池田屋の情報を流した。……それから、風間と初対面のふりをして、あいつが逃げるのを手助けした」

黙っていては決め付けられそうなので、私は否定しようと口を開きかけたとき。

「ーって、言い続けるのも疲れた。どっちにしたって、手厚い看護をしてもらっちゃったんだ。貴女がしてくれたことは、何となく覚えてる。取り合えず、ありがとうございました」

「……なんて反則技だろう。この状況で礼を言ってくるとは。分かっているのだろうか。」

「『ごさいました』ではなくて、『ごさいます』にしてください。良かったら、これからも私に手当てをさせてくれませんか」
どうか断らないで。必死に彼の瞳を見た。

「物好きな人ですね……」

呆れたように言って、沖田さんは、ふうと息を吐いた。

「好きなようにして下さい。途中で放り出すのも、どうぞ御自由に。それとっておきますが、殺気を感じたらすぐに起きるので」

そう言いつつ、沖田さんは重そうに瞼を閉じ、すぐに眠ってしまった。私は枕元に置かれた彼の刀に目をやった。いつでも手を伸ばせば掴めるように、彼のために置かれたそれ。

「討ち入り、お疲れ様」

私は子どものような顔で眠る彼に、小さく声をかけた。

9・夢うつつ（後書き）

山南さんを出そうと、思い立ち。

活動報告で今日更新と言ったために責任を取りました。出来ないかと……。ふつう。

10・許可

池田屋事件から一週間経った昼間。私は広間に座っていた。周りを囲むように座るのは幹部衆。新八つぁんと斉藤さんだけは巡察でいない。

「雪村君、大野君。突然呼び出してすまない。早速、用件に入ろう。まずは雪村君。私達は君に、隊の巡察に同行するという形での外出を認めようと思う」

と、正面の近藤さんが千鶴ちゃんに言う。一緒に彼に呼ばれた私は、千鶴ちゃんの横に座っていた。良かったね、千鶴ちゃん。これで町の人に綱道さんの情報を聞けるね。

「……ありがとうございます！」

千鶴ちゃん嬉しそうに言う。だが、そこで彼女は私の存在に気がついたようで、慌てて喜びの表情を抑えた。私は千鶴ちゃんに微笑む。千鶴ちゃん、気にしないでいいよ。私はまだ外出許可が出なくても仕方ないもの。

「次に、大野君だ。君は男装の状態で護身術も身につけようと励んでいるようだ。――それは単に外を歩きたいだけなのかを、尋ねてもいいかね」

と、近藤さんが今度は私に向き合って言う。

近藤さんは何を知らたいのだろう。これは、下手なことはいえない。相手の出方を見極めて、慎重に発言しなければ。と、いつても。

「そう、ですが」

としか、答えようがない。……何て情けない。これでは、『外に出たい』という自分の願望をわめくだけの子どもではないか。実際はそうなのが悲しいけれども。しかし、他に怪しまれるようなことを言つて、幹部の方々に今よりもつと警戒されたくもないのが本音である。

「……そうか。そうだろうな」

私の言葉を深く飲み下すように、近藤さんは言う。私の気持ちは、^{もっと}尤もだというように、頷いている。

でも、実際に何なのだろう。それだけを聞く為に私はここに呼ばれたわけではあるまい。次に、何が降つて来るのか。私は姿勢を正したまま、近藤さんを見つめて待った。

「大野君。君に帯刀を許す」

近藤さんが横の土方さんに頷いて見せた。すると土方さんは、自分の脇に置いてある風呂敷の包みを開く。鞘が黒光りする刀が現われた。まさか、これを私に持たせてくれるとも言つのだろうか。

私の目の前に、土方さんがその刀を置く。

「受け取るかどうかは、君次第だ」

と、近藤さんが言った。私は刀から目が逸らせない。これはいったい、どういう風の吹き回しなのだろう。彼らは何故、私に刀の所持を認める気になったのか。その真意を探らなければならない。

「どうして、このようなものを預けてくれるのですか」

私は近藤さんに尋ねた。

「預けるのではない。これは君のものだ。——とにかく、君にも巡察の同行を認めようと思うのだ。そこで君が『外出する』となれば侍の腰に刀が無いのは、周りの目を引くだろう?」

近藤さんは説明してくれる。

「そうですね……」

私は目の前に置かれた刀を触れずに眺めるだけ。沈黙が部屋を支配した。

「——俺達は、大野と雪村の池田屋での働きを評価してんだよ。これからもう下手な真似をする気がねえなら、素直に受け取っとけ」

土方さんが近藤さんの横から、じれったそうに言う。『評価?——私は沖田さんの方をちらと見た。沖田さんは思い切り、私から顔を逸らす。ぐさつ。……認められてる、んだよね?」

ああ、皆の無言の視線を感じる。話を戻さなきゃ。

「でも、これ高いのでは——?」

私は恐る恐る尋ねた。無知な私でも日本刀の高価さは、何となく知っている。

「新選組の懷を馬鹿にしてんのか」

と、土方さん。と同時に、

「大丈夫、所詮は侍の真似事ですよ。実戦で使う機会も無いだろうから、そこまで良い刀じゃない」

と、軽口の沖田さん。土方さんが「総司、おめえは……」と言って、
沖田さんを睨む中で――。

「喜んで、いただきます」

という私の声に、皆の目が一斉に私に向かう。

「そうしてくれると良い。確かに総司の言うとおり、女性の君が実戦で使うことは我々としても望んでいないのだが」

近藤さんは言った。

「ついでに、後で竹刀も後で二本、部屋に届けさせるからな。千鶴もあゆみちゃんも、鞘で稽古したんじゃあ、鞘が痛む」
左之さんが言ってくれる。

「ありがとうございます」

私と千鶴ちゃんは礼を言って、左之さんに頭を下げる。最後に私は幹部の人達に向かって、もう一度「ありがとうございます」を言った。

11・邪魔者

沖田さんの傷も少しずつ癒えてきた。沖田さんから「もう看護は結構」と邪険に門前払いをされたこともあり、他にやることがあるので、私は起床すると既に何日目かの日課と化している事をする為に、ある部屋へ向かう。

大事なのは一言目。

「お早うございます！山南さん。今日は天気も、そう良くないですねー」

あくまでも元気良く。だが、彼の部屋の襖は閉じられ、何の返答も無い。

「開けても宜しいでしょうか」

私は尋ねた。

「駄目に決まっているでしょう。この場から早く立ち去りなさい」
ぴしやりと部屋の中から言われるが、くじけない。

「開けていただけるまで、待ちます」

そう言つて、私はずっとその場に座っていた。やがて襖が開けられて、眉根を寄せ、険しい眼で私を見る山南さんが現われる。外の曇り空に、山南さんの顔に落ちる濃い陰。今日は特に激しい戦いになるかもしれない。

「私には昨日、もうここには来るなと言つた覚えがあるのですが、君には無いのでしょうか」

腹の底で轟くような怒りを思わせる、絞った低い声。でも負けられない。

「そうでしたか？」

本当は勿論覚えていたけれど、笑顔で乗り切ろうと試みる。

「ごまかそうとしても駄目です、いい加減になさい。はつきり言つて『邪魔』、です」

次々と繰り出される言葉の銃弾。だが、この人にこう言われるであらうことは、こっちも覚悟の上だ。

私が動かないので、

「君の行動は意味不明だ。何故、ここにしようとすることを止めないのですか？ 君には良いことは何も無いはずなのに」

と、更に言う山南さんの疑惑を含んだ直視を受けて、私は焦りつつも平静を装う。間違つても『貴方に変若水おちみずの研究を進めさせないため』とは言えない。――『変若水』は新選組が幕府の命令で秘密裏に改良を行っている、西洋渡来の秘薬だ。飲めば、人の運動能力と回復能力を飛躍的に高める魅惑的な薬。しかし、その代償に、手酷い副作用がいくつも身に返ってくる。太陽の光に弱くなり、夜に活動するようになることや、能力を使うほど命を縮めることなどは、まだまだ軽い。最大の副作用は、他人の血を強く欲するようになり、次第に気が狂つて残虐的に人を傷つけて血を得ようとする生き物と成り果てることだ。――変若水は、いうならば飲んだ者の身体の仕組みを著しく変える劇薬。これを飲み下せば、人とは別の生き物と化すという言い方をしても、あながち間違いではない。それでも山南さんは、自分の動かない左腕を回復させ治すためにも、変若水の改良が順調に行けば、この薬を試しに飲むに違いなかった。だが変若水は、そんなにやわな代物ではない。簡単に副作用を消せるなんて、そんな美味しい話は転がってはいないのだ。

「―理由の一つは、実は私、山南さんに憧れているんです。だから色々、お話を聞きたいですし」

私は今更ながらに、苦しくも純真な少女を装ってみる。

「人を敬っているなら、それ相応の態度をなさい。人の迷惑を考えずに付きまとうのは、どう考えてもおかしいでしょう」

と言う山南さんの言葉は、何だかストーカーに対する理論のようなもので。うわっ、私はストーカーか？……うん、他人から見たら変態に映るのかも。そう思うと、げんなりする。でも、ここは譲れない。

私がとまどう少女の仮面で山南さんを見返すと、彼はため息を吐いた。

「君が今のまま、私の邪魔をしようと言うのなら、こちらにも考えがあります。局長に掛け合って、君の自由を制限しますよ？―君がしていることは、新選組総長を愚弄する行為です」

山南さんは侮れない。私は、ぐっと黙り込むしかない。自由の制限。そんなことをされようものなら、沢山やりたいことがあるのに何一つ出来なくなってしまう。当然、山南さんを止めることも不可能になってしまう。

青くなった私に、山南さんは少し笑って追い討ちをかける。

「また以前のように軟禁されるのが嫌なら、必要以上に私に関わるのはお止めなさい。……私よりも沖田君の側にいなさい。彼の傷はもう良いのですか」

最後の一言は私を優しく労わるように言う。

「沖田さんのことは確かに心配ですけど……。山南さんへの敬意はまた別物です」

「『敬意』……？！。どこまで君は私を馬鹿にすれば気が済むのですか。左腕のせいで刀を振るえない私に、新選組のお荷物となった私に、どうして敬意を感じるなどと言えるのですか」
見る見るうちに表情を変えて、山南さんは激怒した。

「では、貴方は刀を使えない人には敬意を感じたことが無いのですか。どんなに立派な人でも？」

私は努めて静かに問いかける。

山南さんは何か言おうとしたが、止めて口を閉じた。長い沈黙が訪れた。やがて山南さんもまた静かな口調で語り出す。

「……私は大きな志を持って江戸から上京してきました。それが叶わぬならば死ぬ覚悟で。だが、ただこの、たかだか左腕ごとときで！私は……死んでも死にきれない！……しかし、刀を振るえぬ私はもはや武士ではない。もう、信じた道が霞んでいる」

——分かっている、これは私が彼に言うべき言葉じゃない。でも、私しか言う人がいないのだ。危険な賭けに、私は一步を踏み出して

言う。

「そう、貴方はもはや武士ではない。だから新しく生まれ変わりますしょう？それは、ずっと武士だった貴方には酷なことでしょう。でも、貴方なら耐えられる。今まで様々なことに耐えてきた貴方なら絶対に耐えられます」

「君は私に、武士ではない、……他の人生を歩めと言うのですか」

山南さんが震えていた。私の言葉に傷付き、怒りを押さえかねているのだろう。

「そうです。ここを出て、他の生き方をして下さい。一人の人の歩む道は一通りじゃないのです。何通りだってあるんです。……私は身勝手だけど、山南さんに生き抜いて欲しい。ここで武士を止めるのは全然、恥ずかしいことじゃない。貴方には楽しい人生を^{まっとう}して欲しい」

「―それは出来ません。言ったでしょう、私は武士としてしか生きられないと。私はまだ、諦めない」

私は山南さんの瞳の奥に、ちらりと狂った炎が小さく燃えるのを見た気がした。

「どうしてですか。もう武士としては生きられないと、ご自分で仰っているのに。どうして、まだ固執なさっているのですか」

私は危険を半分承知で、あえて核心に迫っていく。

「それは言いません。言わないことが、私の君への情けです」。さあ、今日はもう良いでしょう。私は気分が悪いので横になりたい。

お願いですから、もう帰って下さい」

気が付けば山南さんの顔色は、度を越えて蒼白だった。私は驚き、諦めて立ち上がる。

「気が付かずにすいませんでした。大事を取って、安静にしています。下さいね」

私は苦々しく頷く山南さんを置いて、心残りだが自分の部屋に戻っていく。廊下を歩みながら、気持ちが悪くなり込んでいくのを止めることが出来ない。今日、私は山南さんに何が出来た？私がしたのは、彼を後先の無いところへ追い詰めたことだけだとしたら……。

「あゆみさーん！」

庭の角から千鶴ちゃんが顔を出し、笑顔で私に手を振る。彼女の手には木刀が二つ。ああ、約束の稽古か。待たせちゃったかな。

「ごめん、今行く！」

私は叫んで、彼女の方に走った。まだ遠く離れているのに、途中で千鶴ちゃんは、ふっと怪訝そうな顔をする。私の歪んだ表情を気付かれてしまったようだ。しっかりしろ、私。千鶴ちゃんに感づかれてはならない。たとえ、彼女が変若水にわずかに関わった為に新選組に囚われたのだとしても、彼女はまだ変若水の存在すら知らないのだ。そう、変若水は危険で、かつ微妙な問題だ。

「お待たせしました、今日もお願いします。師匠」
言々と私は無理に笑った。

12・陽だまり（前書き）

第11話をかなり書き直しているので、宜しかったらお読みください。

12・陽だまり

「あーあ、療養つて退屈だよなあ。巡察にすら出してもらえないんだぜ？こんなんじゃ、新選組が突発的に出勤しなきゃいけないんたとき、俺はどうなるんだよ」

と、私達の部屋にやって来た平助君がぼやく。平助君も沖田さん同様、土方さんによって厳しく安静を命じられているのだ。平助君もまた、池田屋で『天霧』という鬼の拳で、額を割られて大怪我をした為である。

不満を口にする平助君を暖かい目で見ながら、私は別のことを考えていた。

「いい子だなあ、平助君。左之さん、新八つあんも良い人なんだけど。三人は自分からも私に近付いて来てくれるもんね。他の人は、私のテンションに付いていけないみたい……」

「でも今、休んでおかないと、本当に必要なときに力が出ないよ？休めるときに、しっかり休んでおきなよ」

私は何様という感じだが、ふざけて偉ぶった調子で言い聞かせる。

「…………俺が巡察に行かない時に、皆が行ってるって思うと申し訳なくて、じつとなんかしてられないんだよ」
悔しそうに呟く平助君。

「そうだね。……だけど、皆は完治した平助君の姿を待つて思うし、万全な平助君の武力を求めているんじゃないかな」
私は平助君に言ってみる。これは、彼に色々な意味で伝えたいと思っていたことだ。

「やれやれ、あゆみさんには敵わねえ。しばらくは大人しくしてるわ」

遂に平助君はすっきりした顔で納得してくれる。あの人とあの人も平助君くらい単純、……じゃなかった、素直に人の気持ちを受け取ってくればいいのに。親切の押し売りと言われたら、それまでだけど。

「さすが、平助君。話が分かりますねー」

と私にやりとして言つと、

「まーた、何言ってるんだよ」

と、平助君は笑って返してくれる。縁側から注ぐ日差しがぽかぽか暖かい、ほのぼのとした束の間の安らぎ。私達は不安を底に隠して、時折りはしゃいで見せながら、楽しい時間を過ごした。

13・禁門の変にまつって

池田屋事件から一ヶ月後の真夏。新選組は直属上司の会津藩から正式な要請を受けて、京に集まり御所に乗り込もうと目論む長州勢力と戦うこととなった。沖田さんと平助君は怪我のため屯所に留まることとなり、山南さんもまた出陣しない。私も勿論、沖田さんたちの側にいたかったので出掛ける誘いを断った。だが、千鶴ちゃんには皆に「行く」と宣言した。私は慌てた。千鶴ちゃんが出掛けるとなれば彼女が風間さんの目に留まる時期が早まることになるだろうと考えて、彼女にも自分の近くにいて欲しいと思ったのだ。私は部屋に戻ると、千鶴ちゃんを思いとどませようと画策する。だが、

「行きます」

と、彼女はきつぱり言い切った。それでも、

「今回は止めた方が良いと思うけど」

私は穏やかに彼女を止めようとする。

「どうしても行きたいんです」

と、千鶴ちゃんは頑として言う。

「もしかして、好きな人がいちゃったりとか？」

私が聞くと、千鶴ちゃんは顔を赤くして、しばしの後に頷く。

「それなら仕方ない、のかも」

がつくりして、そう言うしかない私に、

「――ふふ、あゆみさんと同じです」

と、千鶴ちゃんがいきなり爆弾を落としてくる。

「……ああ、そおだね」

……やっぱバレバレなのか。思い当たること多多。でもまあ、当

の思い人は分かってないみたいだから良いか。……分かってないよね？

「―それなら千鶴ちゃん、自分だけ知っておいて、私には内緒なんてズルイよね？相手は誰じゃあ！お姉さんに教えなさい！」
その後、私は千鶴ちゃんと恋バナで盛り上がった。

皆が戦いに出かけた日の静かな屯所。沖田さんは一人、庭に涼みに行くと言って広間を出て行った。最近の庭は夏だというのに肌寒い。彼の体調が気になるものの、なんと声をかけたらいいのか分からないので、私はすぐには後を追わなかった。沖田さんは一人になりたそうな雰囲気を出していた。あんまりしつこくしてもね、と思った私は山南さんと平助君と共に大広間に残る。二人の為に茶と千鶴ちゃんに教わって作った串団子を持ち出して、和やかな雰囲気を持ち込みたいと試みる。平助君も山南さんも、相当皆と一緒にしてきたかったけど我慢して、悔しくて情けない思いでいっぱいだろうから、私は出来ることなら二人を慰めたい。

―何か明るい話題はないか……！

「お二人とも、お団子とお茶良かったらどうぞ。このお団子、私が作ったんですよ」

「え。あゆみさんが？……何かが間違ってる気がする」

平助君はお団子に手を出さずに、まじまじと皿を見下ろしている。

「平助君、死にたいの？」

私は怒りを込めて言う。

「わー！！ごめん、すげー美味そうだから怪しいなって。いや違って、……いただきます！」

平助君は慌てて、お団子を一口。緊張の一瞬。

「……美味い」

平助君の一言に、私はほっとする。

「良かった。山南さんもどうぞ」

「いいえ、結構」

山南さんはやりわり断ってくる。

「うめえよ、山南さん。食べてみなって」

と、平助君のフォロ！。ナイス！、平助君っ。

「いえ。特に運動もしていないのに、食べてばかりでは仕方ないですから」

山南さんの防御は堅い。

「一本食べたくらいで太りやしないって。せつかく、あゆみさんが作ってくれたんだから、食べるのが礼儀でしょ」

なおも言ってくれる平助君。それでも、山南さんは首を振る。平助君の眉間がぴくりと動くのを見て、むしろ私の方が慌ててしまう。

「いいの、平助君。実は昨日、山南さんに偶然会って。それで、お

団子の試作いっぱい食べて貰ったの。もう、お団子なんて見たくもないはずだよ」

私の表情に違和感を覚えたみたいだけど、やっと平助君は「そっか……。ごめん、山南さん」と小さく言って黙ってくれた。でも、黙られたままでは困る。

「平助君、良かったら全部食べて。私も昨日沢山食べたから、飽きちゃった」

と私が勧めると、

「でも総司の分はいいの？」

と、平助君は聞いてくる。

「うん。ちゃんと取ってある」

と、私は動揺を隠して答えた。しかし、敵は思わぬところに隠れていた。

「ほう。君は沖田君のこととなると、しっかりしてますね」

と、微笑みながら山南さんは何故か水を得た魚の如く、私をいびり始める。

「沖田君も美味しいと言ってくれと良いですねえ」

続ける山南さん。勘弁して下さい。助けて、平助君！

ところが、

「そりゃあ、総司も喜ぶだろうよ。なんたって、あゆみさんのお手製だぜ？」

と、あるうことが平助君まで喜々として山南さんに便乗し出す。

「……………平助君。それ以上言つと、もう食べさせないよ」

私はまず、平助君の口を塞いだ。

「山南さんも色々私に仰りたいことがおありのようですから、また明日にでもお部屋まで伺わせていただきますね」
私はにやりとして山南さんを見る。

「それで、沖田君の話でも一緒に致しましょうか」
と、山南さんの反撃。……もう、何なんだ！この展開は。山南さんと私は同時に笑い出し、平助君も笑う。取り合えず、平助君の元氣付けに成功したかな。山南さんとも一時休戦。

皆が帰ってくると、私は全員から詳しい話を聞く。特に千鶴ちゃんからは氣のおけない者同士ということで、多く話を聞いた。千鶴ちゃんは言う、

「私は土方さんについて、天王山へ今回の騒動の中心人物たちを追いました」

「へえ。土方さんに付いて、ねえ」

私がにやにやしながら揚げ足を取ると、千鶴ちゃんは頬を染める。

「あゆみさん！ーそのうち、仕返ししますよ？」

言うとき千鶴ちゃんは私を睨むようにした。

「ー申し訳ございませんでした。それで、続きが聞きたいな」
と、慌てて私は彼女に先を促す。

「市中で風間さんが待ち受けていて、土方さんが一人で応戦しました。私達は風間さんを土方さんに任せて、天王山に向かったんです。勿論、土方さんも後で無事に天王山で合流しました。でも、風間さんを薩摩藩の横槍で逃がしてしまったと、土方さんは相当残念そうでした。風間さんは薩摩藩に関係しているようです」

遂に会ってしまったんだね、千鶴ちゃん。ううん、多分ここで貴女が風間さんに会わなくても、彼は貴女を見つけたと思うけど。これから更に忙しくなるかもしれないと、私は心の中で気を引き締めた。

14・対・伊東！

皆が御所に行った所謂「禁門の変」から約半年後の如月のこと。

―出来れば関わり合いたくない気もするんだけど。というか、これから『あの人』に会うとなると、いつも気が付けば足が後ずさっているのだけれど―

私は、『あの人』が新選組に来てから、時々『あの人』と話すように自分に強いている。『あの人』。その名は伊東甲子太郎。名前から分かるように、れっきとした男だ。伊東さんは、平助君が江戸で隊士の募集を行った際に入隊した。また伊東さんは近藤さんの心を掌握し、幹部となっている。しかし、―しかしなのだ。会って分かった。この人は―、読めない。

私は新選組の力になりたいと思っている。だから伊東さんには変な行動をしないようにしてほしいし、腐っても隊士の一人である伊東さんの身のことが気にかかる。なので私は朝、今日の分の屯所掃除を済ませると、剣の稽古の前のちよつとした時間を使って伊東さんの部屋の方に向かってしていると。稽古後に行こうものなら、汗臭いと思われそうだったから、先に行くことにして。

「すみません、またお茶を淹れたのですが。いかがですか、伊東さん」

私は伊東さんの部屋外から声をかける。

「あら、ありがと。どうぞ入って」

独特な口調で柔らかい返事が返ってくるが、気を引き締めて襖を開ける。

「失礼します。ーどうぞ」

部屋に入ると、私はお茶を差し出す。受け取った伊東さんは私の手前、すぐに一口含んでくれる。

「美味しい。人に入れてもらったお茶は良いわねえ。貴方が時々淹れてくれるから、毎日『今日も、もうすぐ来てくれるんじゃないか』って、結構待つちゃうのよね」

「え……？」

意外な発言に、私は思わず声を出してしまった。

「そんなに困った顔しないで。毎日来てって、ねだっているわけじゃないのよ。貴方も忙しいでしょうし、気が向いたときで構わないのよ」

笑って伊東さんは言う。

「はい。また持って来させていただきますね」

と、控えめに私は返す。

「嬉しいわ。元々ここにいる他の人達はちつとも構ってくれないから」

鋭い言葉だった。伊東さんは、自分が歓迎されていないことに気付いている。

「次に貴方が来たら一緒に食べようと思って、老舗の御菓子も用意しておいたのよ。ちよつと待ってね。―はい。召し上げれ。それから貴方のお茶は私が淹れてあげる」

伊東さんは手早く、彼が引き連れてきた弟子たちによって部屋に常備されているお茶の一そろいで私の飲み物を用意してくれた。

「ありがとうございます。いただきます」

この時代では物珍しい、職人の手による高級菓子。サクツとした食感と味に、思わず顔が綻^{ほころ}ぶ。

「その表情。頑張った甲斐があつたわ」

伊東さんは柔らかに微笑む。―こうしていると、悪い人じゃないんだよね。

「まったく。沖田君と山南さんがうらやましいわ、こんなに可愛いお小姓がいて」

と、伊東さんは憤慨してみせてくる。

「あはは……」

私は作り笑いの声を出した。そう、私は伊東さんに沖田さんと山南さんのお小姓とされている。私がしょっちゅう彼らに構っているので、幹部の皆が『表向き、大野は二人のお小姓ということにしよう』と言いつ出したのだ。ろくに剣も使えない、隊務にも参加しない私は、どうやっても隊士には見えない。だから、誰かの小姓にでも見せかけるしかなかった。だけど、強制的に決められたので、二人はかなり不機嫌そうだった。私のいたたまれなさといったら。ちなみに、私は沖田さんより若いという設定だ。確かに、年上の小姓なんて、あまりいそうにないので、この点は私も納得している。

さてと。場も和やかになっているし、目的を果たさなければ。私は気合を入れて、言葉を紡ぎ出す。

「こんな機会ですから宜しければ、伊東さんのお志について詳しくお聞きしたいです」

「可愛い顔して、そんなことに興味があるの？お小姓とはいえ、さすがは新選組の一人、といったところかしら」

伊東さんは、ふっと笑って言う。

「そうね、急には上手く言えないけれども。新選組は力のある組織だから、ここなら私も十二分に自分の力を発揮できると思うし、それによつて新選組をもっと大きく出来ると考えているわ」

そう話す伊東さんは心の内を読ませない微笑のお面を被り、私の問いに形だけ答えている。そんな気がした。

「新選組にいらして下さったのですから、勿論こちらに好意をもつて下さっているのですね。安心しました。これから、どうぞ新選組を良しなにと、若輩者の私からもお願いします。ところで、幹部の中でも強力な御三方について、どう思われます？」

更に私は突っ込んでいく。

「ふふ、貴方つて意外に新選組のとんだ懐刀なのかしら。――強力な御三方つて、近藤さんと土方君と山南さんのことでしょ？そうねえ、

近藤さんはさすが隊の長という方で、とても器が大きい人よね。土方君は軍才もあつて、よく隊をまとめていると思うわ。それから、山南さんは素晴らしい方だけど。如何せん、あの左腕がねえ。かなりもつたいたいと思うわ」

伊東さんの一言目が気になるが、もうここまで来たら引き下がれない。

「近藤さんは憚りながら伊東さんの一番の同志と拝見しております。そして土方さんも山南さんも、近藤さんと同じ志を持った方です。仲間です。だから山南さんについてですが、伊東さんにも山南さんを見守っていただきたいのです。私が申すことではないのは重々承知なのですが、山南さんは周りのほうから、物を言われるのがそれほど好きではないんです。だから、あの方が求めるまで伊東さんの貴重な助言は取っておいて頂くほうが宜しいかと思います」

「へえ……」

と、伊東さんは私の言葉をゆつくりと飲み下すように言つて、私をじっと眺めていた。それから伊東さんは、

「貴方、私から近藤さんたちを守ろうとしているのかしら。どうして、そんなに私を危険視しているの？」

と言つて、にいと笑んで詰め寄ってくる。まずい。やっぱり伊東さんに私の言葉を不審に思われた。どうやって切り抜けようか。

そのとき、

「失礼。僕の小姓を探しているのですが―」

いきなり、沖田さんの声が廊下の方からした。

「時間ね。残念なこと」

穏やかな口調に戻って伊東さんが言うと、沖田さんが襖を開ける。

一瞬で沖田さんの目が私達の茶碗を捉えた。

「自分の身の回りの世話も出来ない僕に、お茶を恵んでくれる小姓が近くにいないので、ははは。困りましたよ」

沖田さんは私の方を見て笑うが、その表情も言葉も私には全く温度を感じさせない。その氷点下のような冷たさを伊東さんは知らない。

「あ……。わざわざ足を運ばせてしまったみたいで、申し訳ございません」

私は慌てて謝罪を口にしながら立ち上がる。

「―まあ、いいよ。すみませんが伊東さん、この子が必要なので失礼しますよ」

沖田さんは私と伊東さんにそれぞれ言うと、私を目線で促し背を向ける。

「では」

と、私は伊東さんに挨拶をして、急いで沖田さんの後を追った。廊下を静かに進む、沖田さんの背中が恐ろしい。すると、

「伊東さんと、男の話で大分、盛り上がってましたね」

歩は止めないまま、横顔だけ振り向いて、沖田さんは言った。相変わらず凍った瞳で私を見ながら。

「……………沖田さん。お願いですから、気配を殺して潜まれるの止めてもらえませんか」

沖田さんがタイミングよく現われた時から、途中から話を聞かれてたかなと思っではいたけれど。

沖田さんは私の言葉には返答してくれずに、

「あんまり無防備に男の部屋に入らないほうがいいですよ。今回は気まぐれで助けに行きましたけど、次は無いと思って下さい。僕は貴女の面倒を見るなんて悪いけれど御免ですから」

と、言う。そのとき鋭い胸の痛みと同時に、私の頭の中で何かがぶち切れる音がした。

「分かってます！分かってるので、そんなことはわざわざ仰って頂かなくて結構です。今日はありがとうございました。用事があるので、失礼します！」

叩きつけるように言うと、私は沖田さんの横をすり抜け、ずんずん彼から遠ざかる。いつもと変わらない沖田さんの言葉だったが、今日はやけに酷く感じたので、思わず感情的になってしまっ。

いきなり私が逆上したので、沖田さんは多分驚いたのだと思う。何も言わずに、その場で立ち止まって私を見る気配を背に感じつつ、私は足早に立ち去った。沖田さんの言葉にも、自分の可愛くない態度にも腹が立って、涙が勝手に溢れてきた。

15・心の赴くまま

いつものように千鶴ちゃんとは朝食を食べに行かない。彼女には先に行ってもらった。一方の私は一人、遅めに部屋をしぶしぶ出ていたのだ。

「お早うございます！」

部屋に入る際、何事も無いかのように皆に向かって明るく挨拶をする。個別に沖田さんに挨拶したくないので、いっぺんに皆に言っ済ませた一言。そして今朝も昨夜のように、沖田さんの隣には座らない。

―あの人があそこに座るなら、あっちへ……。

「今日も千鶴ちゃんの横で食べようっと。千鶴ちゃん!!!」

沖田さんからも自分からもお互いが視界に入らないように、千鶴ちゃんの陰に隠れて席につく。こうやって他の人に不審に思われないように、今回も気まぐれで座る場所を変えるふりをした。でも千鶴ちゃんとすら話す気にもなれず、ばくばく口に物を入れるのみ。早く片付けて、この空間から立ち去りたい。

―だいたい、沖田さんは池田屋事件の夜から私に対して、これっぽっちも笑ってくれないし。皮肉な笑みでもいいから、少しは笑顔を見せてくれたって。

―それから、千鶴ちゃんに対しては自分から構うくせに、私が寄っ

ていくと面倒そうな様子だし。昨日なんて、いつも通りだけど、人が傷付くようなことばかり言つて。そりゃあ伊東さんから助けてくれたけど。何にも囚われない自由奔放な人だから、私の気持ちなんてちつぽけなもののことなんて、考えもしないのだろうけど。

―とにかく何もかも、酷いったらありやしない！！

……とは思っただけけど、やっぱり好きなわけで。なのに、自分から離れていつてどうするー！と、一晩置いたら、段々冷静になつてくる。これじゃあ向こうの思ふ壺じゃないか。悔しいけど、ここは素直にこっちから謝るしかないか、やっぱり。所詮は惚れた弱味というやつだ。……………出来るだけ長く傍にいさせて、沖田さん……。

「沖田さん、昨日はごめんなさい」

昼の巡察に出掛けようとして、彼の部屋から出ようとした沖田さんに、私は勢いよく頭を下げて言った。

「だから、明日から、また仲良くして下さいね。これからは、あんまり鬱陶うつとしくなり過ぎないように気を付けますから。―巡察、行つてらっしゃい！気を付けて。では」

私は一気にまくしたてると、沖田さんに背を向けて、急いで彼の前から自分の姿を消そうと思う。今日は、この人を煩わ^{わづら}せまい。私の存在で不快にさせたくない。嫌われたくない。

―ところが。

「昨日もだけど、言い逃げは酷いんじゃない」

沖田さんの一言が私を立ち止まらせた。恐る恐る、ゆっくり振り向く。意外にも沖田さんは微笑を浮かべていた。

「まったく……。先手を取られて貴女から謝られたら、どうにかして謝ろうと思ってた僕の苦悩はどうなるんです」

嘘でしょう。貴方が私に謝ろうと？でも、夢にまで見た貴方の微笑。幸せ過ぎて、言葉が出てこない。

「昨日は要らぬことを言いました。僕が悪かった。さてと、巡察に行かなくちゃ。―僕が行くんだから、今日も貴女は付いて来るんでしょう。早く行こう、一番組が待っている」

沖田さんは口早に言うと、空の色と同じ浅黄色の羽織を翻して歩き出す。

「……………はい、『組長』っ」

私は彼に言われた言葉を反芻した為に一拍遅れて返事をして、後を

追う。沖田さんは目を見開いてこちらを見、
「やられたな」と笑った。

16・夜の広間で

沖田さんと仲直りをした次の日。新選組幹部は広間に集まっていた。勿論伊東さんも交っている。そこで御茶を飲みながら土方さんは屯所移転の話を持ち出した。候補地を問われて、薄く微笑む土方さんは西本願寺の名を上げる。だが山南さんは、俗界とは縁遠い僧侶を巻き込むのは気が進まないと言言するのだった。そんな山南さんの言葉を聞くと、感極まったように伊東さんが口を開く。

「さすがは山南さんですわ。――左腕は使い物にならないみたいですけど、気にしない方がよろしくてよ。貴方にはそれを補って余りある知性がありますもの。新選組や私を導くことの出来る立場は変わりませんわ」

山南さんが息を飲むのを私は見た。そして伊東さんが放ったこの一言は、沈黙しているものの皆の心をも一気に逆撫でたのを肌で感じる。ただでさえ近藤さんと平助君を除く皆は、伊東さんと肌が合わないから、もともと仲が良くない状態なのだ。そして私も憚りながら皆と一緒に、伊東さんに対して腹を立てる。

――ああ、もう何を言うのかと思ったら。わざとやったな、この野郎。二日前に、あれだけ言っておいたのに。これで私の努力は全て塵に……。

その場の沈黙がやけに重たい。最初にこれを突き破るのは、どこ
の英雄だろう。

「伊東さん、そりやどいう意味だ。確かに山南さんは、」
真つ先に土方さんが反応した。でも、この展開はいけない。私は意
を決する。

「伊東さん！道場に行きましょう、道場！それで良かったら、私に
も少しご指南お願いしますよ！沖田さんも山南さんも、良いですよ
ね？善は急げです。さあ、行きましょうっ」

私は激情のあまりに山南さんに対して失言しそうな土方さんを遮る
と、急いで立ち上がって伊東さんに近づき、その腕を引っ張った。
皆が呆気にとられて私を見ている。私は、『主人』の沖田さんと山
南さんから形ばかりの了承すら待たず、

「道場。たまにはいいわね」

と暢気に言う伊東さんを連れて、その場をすぐ後にした。

しばらくして夕飯後に、こっそり私は近藤さんに呼び止められて、
伊東さんを部屋から連れ出したことに対し、お礼を言われた。私が
「近藤さんが次にそう望むような気がしたので、動いてみただけで
す」と言うと、近藤さんは豪快に笑った。

その夜。皆が寝静まった頃、山南さんが暗い広間に入ってくる。

「……何故、君がここに？」

部屋の隅にいた私を見つけて、山南さんが目を見開き言った。

「しばらく前から、夜にはここに居りました。貴方が来なければ良
いと願って」

私は静かに答える。山南さんは無表情になり、話し出す。

「君は……、不思議な人だ。時々、何もかも見透かされているよ
うな心地のすることがあります。ふふ、本当に君は未来から来たの
かもしれませんね。でも、未来に私ごときのことが詳しく伝わって
いるはずもないでしょうから、君がこうして先を読むように現われ
ると驚かされます」

と、言う彼の口調は静かなのに、瞳の奥はきらりとして興奮を抑え
ている様子に見えた。私はその声を遠くに感じた。彼の手に視線を
落とせば、濃い色の液体が入った小瓶が握られている。

「もしかして、これもご存知なのですか」

山南さんは私に低く問う。私はふるふると首を横に振り、

「知りません。別に知りたくもありません。必要がなさそうですもの。貴方にも、そうなのではありませんか。―それは、貴方にとつて必要な物なのですか」

と、私は落ち着こうと試みながら尋ねた。私が慌ててはいけなから。私が山南さんを冷静にさせなければいけないのだから。

「勿論、……… 必要ですよ。必要、どころではない。無くてはならないものです。―やっと完成したのです。やがて、いつか君もこの存在を知るでしょう。この薬の偉大さ、素晴らしさを理解することでしょう。それを今、私の口からは伝えられないのが残念です。…
…さあ、部屋にお戻りなさい。私も戻ると致しますから」

そう話して、山南さんは部屋から出て行くとする。これは危ないと私は判断した。彼は私と別れた後に自室で、この変若水を飲むつもりだ。どうしよう!!

一人焦っていると、山南さんが振り向いた。表情が変わり、^{なき}風のごとく静かな調子に戻っている。

「今日、君に会えて良かった。人として、最後に誰かに、―君に会えて―。私は生まれ変わろうと思います。以前に君が言っていた通りにはないけれど。―私は何を言っているのでしょうか。明日、また君にも会えるというのにね」

言うと、彼は少し苦しげな顔で微笑む。これは、どこかで迷っている表情だ。まだ山南さんの心には、変若水を飲むことに抵抗が残っている。まだ、希望は残っている!

「何だか今日でお別れみたいに仰るんですもの、驚きました」
と、私は咄嗟に言う。

「どうか忘れて下さい。さあ、行きましょう」
また私を促す山南さん。だが、私は動けない。まだ留まろうとする私を見て、山南さんの目に戸惑いが映る。

もう、自棄になるしか無かった。

「その瓶の中身、今、私に飲ませてくれませんか」

私の言葉を聞いた山南さんは目を見開き、

「いきなり何を言い出すのですか。――駄目です。これは……、そう、材料が高価な為に大変貴重なのですよ。残念ですが、上げたくても上げられないのです。今日は諦めなさい。――そうですね。いつか、君も飲む日が来るかもしれない。君が強く望むならば」

と、私をなだめようとする。

「でも、もしかして貴方は今夜、それを飲むのではありませんか？
――正直、私には貴方が不安そうに見えるのです。それは、もしや危

険かもしれないものではないですか。でしたら、そのようなものを山南さんに飲ませるわけには参りません。どうしても飲むと仰るなら、貴方のお小姓たる私が少し毒見して差し上げましょう。私が飲んで安全だったら、山南さんも飲めば良いじゃないですか」

私は明るく言った。本当は飲む気なんて、さらさら無い。取り合えず山南さんの手から変若水を取り上げたいのだ。そして出来るなら、彼に変若水をもう作らせたくない。

「冗談は止めて下さい。小姓なぞ、形ばかりのものです。それに仮に君の言うとおりだとすれば、女性の君に無理をさせるわけにはいかないでしょう」

山南さんは真面目に言い始めたかと思うと、途中から笑みを交える。冗談に済ませたいのは、彼の方のようだった。

「さあ、本当にお喋りはここまでです。戻りましょう」

言うつと、再び山南さんは動き出す。私は他になす術無く、彼の袖を掴んだ。

「何です？」

怪訝そうに、山南さんが私を見る。

「山南さんの志を教えてください」

何も言いようが無く、私は咄嗟に言葉を紡いだ。

「志……。こんな時間に、そんな難しい話を聞きたくて私を引き留めたのですか。そういえば、伊東さんにも、それを聞いたようですね。伊東さんが楽しそうに話してくれましたよ」

皮肉げに山南さんは言う。私は何も言えずに黙っていた。

「私の志は、今の不安定な世の中を変えること。その為に、新選組を今以上に磐石な組織にすること、ですよ」

山南さんは、意外にも私の問いに答えてくれた。こんな柔らかい表情の彼を見るのは初めてだった。―それなのに私は、この穏やかさを壊してしまうのかもしれない。

「その大きな志を叶える為に、どうか貴方の身を犠牲にはなさらないで下さいね」

と、私は思い切って言うてみる。

「―また君は。己が身を犠牲にする覚悟も無くて……、どうやって道を切り開くのです」

「でも、命を代償にした方法なんて、間違っていますもの」

私は勇気を出して答えた。山南さんは私をじっと見たかと思うと、

「―もし、君の命か沖田君の命を消さなければならなくなったら、

君はどちらを選びますか？」

と、言う。私は何も言えなかった。そんな私を見て、山南さんは微笑み言う、

「分かってくれたようですね」

「分かっていません！……そう、命を秤^{はかり}にけるなんて、そもそも間違いです。未来では、一番尊ばれているのは命なんです。そんな素晴らしい姿に、やがてこの国はなっていくんです。だから山南さんも命を大事にして下さい」

「今、分かりました。君と私は根本から考えが相容れないのです。だから、君の願いを受け入れることは出来ない。君は命を最も大切に思い、私は志を貫きたいと願っている」

山南さんは笑っていた。ああ、今。今、私と山南さんをつなぐ糸は絶たれてしまったのだ。足下の地面を崩されたような絶望が、私を強く襲う。だけど。だけど私は、山南さんの袖を握り締めたまま、離せない。

「飲まないで！自分の為に、山南さんを思う新選組の皆の為に」

叫んだ私は山南さんの手から変若水を取り上げ、床に放り投げて瓶を割った。床に瓶中の真っ赤な液体が飛散する。

「何を！」

山南さんは歯を食いしばる。その形相は、今にも私を殺しかねない。今度は彼が逃がさぬように強く私の腕を掴んだ。

「やはり君は、この薬のことを知っているんですね。どこで情報を得たんです？」

山南さんの尋問が始まる。

「貴方が部屋で何をしているのか気になって覗いたりして、少しずつ……」

私は嘘を吐いた。

「―それは嘘だ。君に見られていたり部屋に忍び込まれていたら、私は気付きます。正直に言わないと、痛い目を見ますよ？」

山南さんは握った手に力を込め、私の腕を圧迫する。

「本当です！本当なんです……」

私は痛さに叫ぶ。すると、山南さんは手を離れた。

「私としたことが、夢中になって研究に没頭していたのでしょうか。感覚も鈍り始めたみたいですね―。君に探られていることに気付かないでいたなんて。君に露見したのは私の責任ということですか。君のせいではない」

山南さんは笑う。良かった、納得してくれたんだ。そう安心したのも束の間。

「果たして、新選組の秘密を知ってしまった君を、生かしておくべきでしょうかね」

山南さんの冷たい言葉が、私を恐怖に陥れる。震える私を、山南さんは無表情で眺めていたが……。

「殺しはしないですよ。君に付き合っていたら全て馬鹿らしくなってきたので、みんな終わりにすることにしました。――許されるなら、私は新選組から出て行くことにします。そして、違う夢を見ます」

と、次に放たれた山南さんの言葉に、私は耳を疑う。

そこに、

「こんな時間に、二人で何をやっているんです？」

と、沖田さんが広間に入ってくる。きつと沖田さんも山南さんが心配で、屯所内を歩いていたのだろう。騒ぎを聞きつけて、この場に駆けつけたに違いない。

「何でもないですよ。ただ、偶然会って、少し話し過ぎただけです。…… ああ、私の『滋養剤』が散らばったままだ。片さなければ」

山南さんは何食わぬ顔で、かがんで変若水の瓶の欠片を拾う。私も雑巾を持ってきて、床を拭いた。そんな私達を交互に、沖田さんは疑わしげに見ていた。

17・惜しみて、また新たなる

次の日。山南さんが近藤さんと土方さんに許されて新選組から脱退することを、私は斉藤さんから教えてもらった。新選組にいても左腕が動かないのでは日々の実戦で役に立たないという理由が通つたらしい。私はいてもたってもいられず、山南さんの部屋に向かう。今日は晴天の空。襖を開け放したまま、山南さんは既に早々と部屋の整理を進めていた。

「やっぱり、お邪魔でしたか」

私が現われると山南さんは作業の手を止めてしまったので、私は申し訳なくなつて尋ねた。

「いいえ、大丈夫ですよ。どうぞ、そこに座つて下さい」

今までに無かつた、優しい応対。驚いていると、山南さんはかすかに微笑む。ああ、晴れ晴れとした顔だ。私はゆっくり座つた。

「君には礼を言わなければ。君に『新選組を出ろ』と言われた日から、反発しながらも心のどこかで、その道を考え始めていました。きつかけを作ってくれたのも、私を救ってくれたのも君です。ありがとうございます」

山南さんは私を真つ直ぐ見ながら言う。私は「はい」と返事をする。山南さんはまた笑みを浮かべて、黙つて再び手を動かす。

「いつ、御立ちになるのですか」

私が聞けば、

「明朝に」

と、彼は簡潔に答えた。

「え！ずいぶん早いじゃないですか」

私が驚くと、

「まとめる荷物も大した量はありませんし、ここを去る人間に長居は無用です」

と、山南さんは平然として答える。その態度には、一片の迷いもない。正直、すごい人だなあと思う。一度こうと決めたら、どんなに困難でも、とことん貫ける人。山南さんは元々、そういう人なのだ。今までは私も頭に血が上っていて、彼を頑^{かたく}なだと思うことが多かった。でも、それは裏返せば一つのことをやり通せる力を山南さんは持っているということなのだ、改めて思う。

「どちらに行かれるのですか」

聞くと、

「取り合えず大坂に。知人に呼ばれているので、そこで商いの手伝いでもいたします」

と、山南さんは沢山答えてくれた。

夜更かしが続いていたからか、今宵も自然に目が冴えてしまう。

明日のことを思うと、じっとしていられなくて、部屋を抜け出した。夜に何となく男性の部屋の方に向かうのも問題大有りだけでも……。明日から――あの部屋の主はいなくなってしまうのだもの。明日か

らあの部屋にいつても、あの人の物は何も見えなくなっているのだ。思えば、あそこに私は何度足を運んだことだろう。――かなり離れた廊下の角で足を止め、灯りのまだともる部屋を眺めた。すると、山南さんの部屋からにぎやかな声が届いてくる。幹部の皆の声だ。

「よし、山南さん、今日は飲もうぜ！」

新八つあんの声が一段と響く。

「私は明日、歩き通しなんですがね……」

皮肉げだが、まんざらでもなさそうな山南さんの声。

……いいなあ皆。山南さんとの最後の晩を過ごせて。私も一緒にお酒を飲みたい。でも、呼ばれて無いのに行くのも駄目か。山南さんには嫌われてるし、邪魔するのも悪い。それに、この最後のひとときは幹部水入らずの大事な時間なんだ。――皆、楽しんでね。

そう思えば納得出来て、笑うことが出来た。そして馬鹿騒ぎを背にして自分の部屋に戻ろうと身体向きを変えると、

「あゆみちゃんも寝てなかったのか。自然と皆、集まるんだな」

と、左之さんがお酒をいっぱい抱えて向こうから来ていた。

「いいえ、目が覚めてしまっただけなんです。お休みなさい」

私は会釈をして、その横を通り過ぎようとする。

「お前も来いよ。そういえば一緒に飲んだことなかったな」

嬉しい申し出。でも、そんな図々しいことは出来ない。

「せつかくですけれども」

私は断った。私の心は泣いた。

「なんだ、もしかして飲めねえのか？飲まなくてもいいからさ」

ここまで優しく言われると甘えたくなくなってしまふ。しかし！皆の招かれざる客になることは出来ない。

「や、いいです」

私はなおも去ろうとする。だが、

「いいから、いいから」

と、なおも左之さんに促されて、私は誘惑に負けて部屋に入った。

「お邪魔します……」

皆の視線が刺さる。

「お！あゆみさんじゃん！」

既に出来上がっている平助君が目に入った。

「お前も飲めー！！」

投げつけるように、私に杯を渡してきたのは赤くなった土方さん。
よ、酔ってる！

「いただきまーす」

私は喜んで小さく声を出した。

明朝早くに、山南さんは額を軽く押さえながら立ち上がった。

「まったく、昔から滅茶苦茶ですよ。この人達は……」

足下には酔いつぶれた近藤さんと土方さんと平助君と新八つあん。斉藤さんと左之さんも、山南さん同様、二日酔いで頭が痛そうだ。それを見ていると、自分が男でなくて良かったと思う。男だったら強引に飲まされたに違いない。

「行くんですか」

と、ひとり涼しそうな顔で沖田さんが山南さんに言う。

「ええ」

と答えて、山南さんは微笑んで荷物を背負う。

「山南さん。良かったら、これ。荷が重くなってしまうかもしれないですけど……」

私は部屋を抜け出して先程作った握り飯の包みを差し出した。今度山南さんは受け取ってくれた。

「ありがとうございます。そういえば、この前のお団子はいただけませんでしたね。実は大変心残りですから、そちらは今度お会いするときに持って来てもらうことは出来ますか」

山南さんの言葉に、私は何度も頷いてしまう。

「では」と言つて部屋を出て行こうとする山南さんを追おうとする
と、

「見送りでしたら、こちらで結構ですよ。それより暇なら、沖田君
をみておあげなさい」

と、微笑んで一蹴される。振り向くと、まだ沖田さんは壁に寄りか
かつて座っていた。私の視線を受けると沖田さんは私から顔を逸ら
し、

「ここまで飲んだのは初めてですよ。気持ち悪……」

と、一人呟いた。改めてふと見渡せば、部屋には横たわる幹部達。

めつたに無い、すごい光景だった。私は悪いと思いつながらも、皆の
様子を見て口まで笑いが上るのを止められない。すると、

「何笑っているんですか」

と、沖田さんが苦々しく私を見上げて聞いてくる。

「山南さん、楽しそうだったなあと思つてたんです」

と、私はごまかして、外の雲一つ無い空に目をやる。ここまでの快
晴は、ここ数日なかった。山南さんの旅立ちの日だから、晴れて本
当に良かった。山南さんは、今頃はあの辺りを歩いているのかしら。

さようならは言いませんよ、山南さん。また会いに行きますから覚
悟していて下さいね。

18・銀色の衣

隊士が増えた為に手狭になった屯所は悩みが多く、その後も移転の話は着々と進んでいった。そして時は皐月になる。屯所が西本願寺に移されて、三ヶ月が経っていた。

今日も皆で夕餉を食べていると、

……こほこほ。

沖田さんが私の横で、小さな咳をする。にぎやかに話しをしている他の皆には聞こえなかったようだ。それほど、静かな音だった。だけど、この咳は――。

「喉に物が詰まった」

と、私の視線を感じたのだろう、有無を言わさぬように言って沖田さんは笑う。だから私も、沖田さんの言葉を信じるふりをして見せた。

一夜明けて、巡察当番の一番組に同行。

「あつ！沖田さん、向こうには行かないんですか」

涼しげな川が見えて、私は騒ぎ始めた心を隠しながら聞く。

「これから行くところですよ。……貴女も千鶴ちゃんと一緒に、ふらふらして。こっちの身にもなってほしいな」

沖田さんはため息をついた。

「ごめんなさい……」

呆れられたかと不安になって、私は謝った。そんな私を沖田さんは一瞥だけすると、

「あつちを見てきて」

と、隊の人達に手近な辺りを指差し、命じる。周りにいた隊士が離れていく。

沖田さんは巡察中なので、周囲に油断無く目を配っている。私は川辺の桜の樹にゆっくり寄っていった。時期ではないので、既に花は咲いていない。――桜は私をこの世界に呼び寄せた媒介かもしれないのだ。いかんせん、桜は気になる存在だった。どこの川辺にも桜の木は多い。私は川を見つけると、一緒に桜を探してしまうようになっ

「また相も変わらず桜ですか」

沖田さんが苦笑して、私に尋ねてきた。知られてたんだなあ。素直に「はい」と、答えておく。

「それに今日はあのときの、桜柄の服を着ているんですね。珍しい」
沖田さんの瞳が私の襟元に向かう。私はこの世界に来たときの着物を下に着ていた。大切にしまっていたあった銀色の衣。派手なので目立たぬよう、色目だけ見せている。

「この着物の模様なんて、覚えてらしたんですね」と、私は意外に思ったことを口にした。

「勿論。衝撃的な出会いでしたからね」

沖田さんは答える。一秒で私は納得することが出来た。……侵入者が堂々と庭に立っていたら、それは驚くだろうなあ。

少し離れて立つ私達の間を、川の方から寄せる風がうすら寒く吹き抜けていく。

「どうして今、その服を着る気になったんですか」

沖田さんは私の衣の話題から離れない。一体どうしたのだろう。沖田さんが真っ直ぐこちらを向いているので、私は彼に倣^{なら}って向き合った。でも、正直に答える気にはなれず、すぐには口を開かなかった。

すると、

「前いた場所に帰ろうとしている、なんて言うんじゃないでしょうね」

と、沖田さんは続ける。思わず、ぎくりとした。

私のわずかな反応を見逃さず、沖田さんは目を細め言う、

「懐かしいですか。元いた所が」

「いえ、そういうわけではなくて……」

私は取り合えず、ごによごによ呟いた。この鋭い人には、下手な説明は出来ない。私はいまだ風が冷たく肌に触れるのを感じながら、沖田さんの足下の方にぼんやり目を落とす。

「懐かしいでしょうね。ずっと僕達に軟禁されているようなものなんだから」

今日の沖田さんは、よく話す。本当にどうしたのだろう。

「そんな。私、楽しいです。沖田さん達の側にいられて。叶うなら、ずっとここにいたいくらい……」

私はきちんと顔を上げ、慌てて否定した。

「そんなわけにはいかないでしょう。良い人も待っているんじゃないですか。だから時々、遠い目をするんだ」

と、沖田さんははつきりしない私の態度にいら立ったのか、少し強い口調で言う。私は固まった。

「良い人って……！ いませんよ！」

恥ずかしさに赤くなつて答えながら、そんなふうに思われていたんだと今更のように初めて気が付いていた。

「でも貴女は僕より二つ三つ年上なんでしょう。女性で、その年でない方が不自然だ。貴女は馬鹿じゃないから、相当な教育を受けてきた良家のお嬢さんみたいだし」

沖田さんの考えは、この時代のものとしては当たり前のことに思えた。でも違う。これは今、きっちり説明しておかないと。こんな誤

解はごめんだ。沖田さんに、私に良い人がいるなんて思われたまま
でいるのは悲しすぎる。

私が説明を急いで口を開きかけると、突如として強風が起こる。こ
の風は、まさか……。既視感に、胸が騒ぎ出す。そして風の強さに、
すぐに目も開けられなくなった。

コワイー

あるときよりも酷い風に、私は怯えた。

「あゆみさん……！」
遠くで沖田さんの声が聞こえたような気がしたのは、私の願望だっ
ただろうか。

19・友達（前書き）

警告！このお話は流血表現を含むので、苦手な方はお止めください。

19・友達

痛い痛い痛い……！！身体の肉が千切れるような、潰されるような、骨が折れるような、きしむような縮むような感覚が続く。風は私を巻き込んで、どこかへ連れ去っていく。

沖田さんはどこ？声が聞こえない。私だけ、風の中にいるのかな。私はどうなってしまうの……。このまま――

しばらくして、やっと風が止んだ。私はどこかに放り出される。もしかっ、とした手触りがした。目を開ければ、青く短い草の上に顔から倒れ込んでいる。立ち上がるうとすると、身体のおちこちがぴりりと痛んだ。骨の節々も痛みが立つのには支障は無い。特に痛むのは頬と右手と左足の数箇所、衣をめくれば軽く切れて血が出ていたり痣あざが出来ていたりした。これ位で済んで良かったあ……。ほっと一息ついて、改めて周りに目をやる。あ、ここは……、私のアパートの近くの公園じゃない。助かった……。家に帰ろう。公園の満開の桜を横目に、私は走り出した。

「すいません、大家さん。一階の大野です。鍵無くしてしまって……、うちのドア開けてもらえませんか」

私はまだ自分の表札がかかっているのを確認すると、移動して同じ一階に住む大家さんの玄関を叩いた。大家さんがインターホンで返事をして出てくる。

「何かあったの？大丈夫？」

大家のおばさんは私を直接見ると言った。私の出で立ちときたらボロボロの袴に、傷だらけの肌。やっぱり声をかけられた。

「うっかり土手から派手に転げ落ちてしまつて。でも、大丈夫です。擦り傷ですから」

私は答えて、なおも心配そうな大家さんを私のドアまで急かした。

久しぶりに自分の部屋に入る。日付が表示される置き時計を見れば、あのお見合いの日のままだった。やった、と思わずガッツポーズ。こちらでは全然時間が経っていないんだ。私は手早く傷に絆創膏を貼り、上に薄手のコートを羽織ると、家を飛び出した。

「久しぶり。ここに来てくれたんだ。……どおしたの、顔の傷」
小さな個人経営の病院で開業医をしている友人の朝子が、私を見るなり驚いて言う。診察室には私と、この朝子しかいない。良かった、今日も看護師の加藤さんだっけ、遅刻なんだ。私は加藤さんがいないことに感謝した。これで頼みやすくなる。

「今日は診察じゃなくて、お願いがあつて来たの」
勧められて真向かいに座った私は、朝子の目を見る。朝子は戸惑っ

たように私を見た。何だか不穏な雰囲気を感じたらしい。

「私を結核だと診断してほしいの。こんなこと言っても簡単には信じてもらえないだろうけど、実は私―」

私は今まで自分がどこにいたのかと、沖田さんが結核であることを朝子に説明する。

「―だから、沖田さんに飲ませる結核の薬が大量に欲しいの。出来れば一年分くらい。もう、ここには戻って来られないかもしれないから。……………こんなことを頼めるのは親友の朝子しかないの、信じて。私、その為にこの世界に戻って来たの。私、沖田さんが好きなの。彼の命を救いたい。この世界では、これは犯罪だって分かってる。でも、人の命がかかってるのよ……………」

朝子が黙っているの、不安な私はしゃべり続けた後に口を閉じて友人の返答を待った。

「分かった……………」

意を決したように、朝子は言い出した。は？……………あまりの物分りの良さに、私の方が目を点にした。

「いいの？」

聞くと、朝子は私のまぬけな表情を見て笑い、

「嘘言っていないみたいだから、あゆみの犯罪に加担してあげる。待ってて、すぐに処方箋いっぱい印刷してくるから。万全を期して、患者名と日付はそれぞれ全部架空のものに変えなきゃね。警察に探られたら困るし。……………その前に今、受付の子に怪しまれそうだなあ、どうやってごまかそう」

と、言つて朝子は受付の方へと姿を消す。私は口を開けて、彼女の後ろ姿を見送るばかり。なんて豪胆な人なの。ありがとう、ごめん朝子。

戻ってきた朝子は言葉通り、沢山の処方箋を持って来てくれた。これを持って薬局に回れば、結核の薬が手に入る。

「長く海外に行くとか、色々理由を作って、薬局の人に言うんだよ。全部、多めにもらえるように書いたから」

朝子の助言に、私は頷く。そして、

「これ、お金。朝子、何人も診察したことになるんだもんね。保険証も使えないから、相当高いでしょ。――後で会計簿とかも何とかごまかしてもらえる？」

私は朝子の手に、銀行やコンビニのＡＴＭで下ろしてきた万札の束を置いた。

「本当にありがとう、朝子。こんな話、信用してくれて」
最後に心を込めて礼を言えば、朝子は私を抱きしめてくる。同時に私の方からも朝子に向かっていた。

「離れても、ずっと親友だよ」
と、朝子が言う。そうだね、昔から。こうやって、いっぱい私を助けてくれたね。

去り際、私は朝子に永遠の別れを告げた。

20・もう一度

私は薬局を何軒も大急ぎで回る。さすが都会で薬局が周辺に密集しているのは助かるけれど。だが、どこへ行っても待たされて、正直気がでない。早く、向こうの世界に戻りたい。時間を空けすぎると、もう戻れなくなっちゃうかもしれないし。―もう、戻れる確証も無いけれど。それが無性に怖くて、私を焦らせた。

空も大分暗くなって、ようやく薬をかき集め終わった。私は今日の途中で偶然見つけた道端の桜のところへと向かう。そこが今、ここから一番近い桜だった。道を走り続ければ夜の闇に、散り始めた桜が目に入ってくる。

「桜の神様、もう一度だけ……」

私は祈りながら、桜に近づく。だが、何も起こらない。もっともつと祈る。それでも何の変化も無い。どうして？何が足りないの。

私は時空を越えるきっかけを、桜と、この銀色の衣が揃うことだと推測していた。でも、他にも何かが必要だというのだろうか。考えても考えても、頭には何も浮かばない。

ああ、祈るしかない、―そう情けない考えに至る。私には何も無いんだから。そうして、また祈っていると……、風が吹き始めた。嬉しさに、私は自ら風の中に入ってしまった。

21・ただいま！（前書き）

このお話は流血表現を含みます。苦手な方は読まないで下さい。

21・ただいま！

纏まとった衣類なんて何の障害にもならず、自分の皮膚が次々に裂ける。骨はおかしな方向へと捻じ曲げられ、脱臼しそうになる。三度目の風中は、また強さを増していた。回数を重ねるにつれ、私という存在がどんどん受け入れがられなくなっていくみたいだ。そうして風は、私を少しずつ死へと追いやっていく。

沖田さん――

私は会いたかった人の名を心の中で呼ぶ。でも、もう駄目なんだ……。私は絶望し――。

ぐい、と強い力に腕をつかまれて引つ張られる。鼓膜を潰すような風の凄まじい音が遠ざかり、途端に辺りが静かになった。

「風の中で突然消えたかと思ったら、また風の中から現われる。一体、貴女はどんなカラクリを使っているんです？」

地面にへたり込んだ私は、目を開ける。目の前に、しゃがんで笑う沖田さんの顔があった。一瞬、私は口が聞けない。もう一度この人に会えた……。神様、ありがとうございます。

「沖田さんが私を風の中から引っ張り出してくれたんですね。ありがとうございます」

笑顔で礼を言う。

「銀色が見えたような気がしたから、まさかと思って―」

そう返す沖田さんは、私とは逆に真面目な顔になった。

「傷だらけじゃないですか」

沖田さんは言うと、私の身体をざっと改めた。

「左足に大きな傷がある。それだけじゃない。どこも出血が酷い」

沖田さんは私の服の破れ目から傷を見つけていく。あ、本当だ。左足は二度目の風で元々傷が出来ていたのが、先程の風で再度切り付けられたから、悪化してしまっている。やっぱり私、出血多量で死ぬのかも。顔から血の気が引いていく。すると、

「つかまって下さい、中に入りますよ」

と、沖田さんが私を抱きかかえようとする。こここれは、まさかお決まりのお姫様抱っこ?!

「持ち上げるなんて無理です。重いですもの」

慌てて言うが、沖田さんは私の身体を腕の中に収め、立ち上がった。

「絶対に運べないですよ。大丈夫ですから降りして下さい!」

遠慮して私が喚き立てると、

「本当に地面に取り落とされなくなかったら、暴れないで下さい」

冷たい目で睨まれて、私の身体は反射的に大人しくなる。でも、心の中では叫びが続いていた。

しかし観念して、体勢を安定させる為に沖田さんの上腕をおずお

ずと掴む。彼の肩の向こうに目を向ければ、西本願寺の景色が広がっていた。ここに帰ってきたんだ。この寺の桜に導かれて……。私は遠ざかる桜の樹に対して、こうしてまたこの世界に私を戻してくれたことを感謝した。ありがとう、と。

お医者さんの松本先生によって診察を受けた私は、懐かしい自室の布団に横たわっていた。そして沖田さんはずっと側にいてくれている。私は沖田さんの優しさが嬉しい。しかし、沖田さんはどこまでも私にとって『気のおける人』だった。

「この約一年半、どこにいたんです？まさか、ずっと風の中にいたなんて言いませんよね」

と、沖田さんの質問が始まる。

「うわ……。やっぱり、そんなに時間が経っていましたか……」
私は随分と長い時間をこの世界で過ごしていたのに、元の世界に帰ればそんなに時間は動いていなかった。ということは単純計算でも、向こうの世界での数時間は、こちらでは相当な年月になるということだ。

「時間感覚が無いふりをされても困ります。それより、僕の質問は無視ですか」

「ごめんなさい。ええと……未来に行っていました」

真面目に答えたのに、沖田さんはため息を吐く。だから、ためらったのに……。

「正直に言いたくないんですね。……病人だから今は見逃してあげますよ。そのかわり、治ったら全部話してもらおうかな」

薄く笑って言う沖田さんの瞳が残虐に光ったように見えたのは、私の目の錯覚なら良いと思う。

「で、それは何なんですか。随分くしゃくしゃだけど……」

沖田さんは私の枕元にある、相当大的な紙袋に視線を向ける。それは、先程まで私の懷に無理やり突っ込んであったものだった。あの風の圧力から守る為に、私が身体を丸めて守ろうとした物。

「――沖田さんへの、大事なお土産です」

遂に、この時が来た。

「僕に？……見てもいいですか」

驚いたように沖田さんは言い、袋に手を伸ばしかける。だが、

「勿論良いですけど、見たら絶対に使って下さいね」

と、私が念を押すと、

「じゃあいいや。変な物だったら困るし」

と言って、彼は身を引いた。

「ちよつと……！普通、そこで止めますか？」

私は声を高めた。一年半経つても、つむじ曲がりには変わっていない。

「冗談ですよ。貰えるものは貰つておこうかな。使う約束はしませんがね」

軽く笑つた沖田さんは手早く袋を取り上げ、中身を取り出す。

「何ですか、この訳の分からない物は……。嫌がらせですか」

珍しく戸惑つた表情を浮かべる沖田さん。だが私が口を開く前に、彼の勘は冴え渡る。

「丸薬と粉薬……？透明な皮と銀の紙に包まれてる……」

薬を見つめ、沖田さんは自分自身に呟くように言う。

「そうです、全部お薬です。……最後にお別れしたとき、体調が優れなかったみたいでしたから。それを使えば、きっと元気になります」

「悪いけど僕は薬なんて信頼していないから、要りません。——でも、液体でなかっただけ、まだ良かった」

沖田さんは変若水のことを思い浮かべたのだろう。彼は薬を袋に戻して、床に置いてしまう。だけど、これは変若水とは違う、人の命を助ける目的で作られた治療薬。せつかく取りに行ったことでもあるし、沖田さんの身体の為にも必ず飲んでもらわねばならない。万が一、副作用が生じたとしても、直ぐに止めれば後遺症が残る可能性も低いからだから。

「病気を完全に治す機会を潰すんですか」

私は横たわったまま、じつと彼を見つめて言った。

「……誰に聞いたんですか」

彼は私が、沖田さんが結核だと何故知っているのかを尋ねていた。

「私、病気を患っている人にお医者への指示を受けて、薬を渡す仕事をしてたんです。だから、少しなら病気も見分けが付きます」

向こうの世界で私は、薬局に就職して働いていたのだ。さすがに職場へは沖田さんに渡す薬をもらいに行かなかったけれど。

私の答えに考え込んだ沖田さんは突然、はっとした顔をする。

「まさか今まで、この薬を取りに行く為だけに姿を消していた……

…、のではないですよね？」

私は、正直に言うのも恩着せがましいかなと迷ったが、結局、

「その通りです。こんなに傷付いてまで貴方の為だけに持って来たんですから、優しい沖田さんは私の努力を無駄にはせず飲んでくれますよね？」

と、脅すことにした。

沖田さんは私のふざけた調子を全く無視し、目だけで薬を眺め、黙り込んだ。だが、やがて、

「まるで悪鬼の囁きささやみたいだ。こんな、ほんのわずかな希望に、今の僕はすりつかずにはいられないのか………」
と、呟く。

「飲めば治る可能性が出てくるんです。だから、騙されたつもりで飲んでみてください。飲み方は、きちんと私の指示に従って下さい

ね」

私がそう言つと、沖田さんは黙したままで頷いた。

「そうだ、僕も貴女に渡すものがある」

ふいに、沖田さんは思い出したように言つて部屋から出て行つた。しばらくして、戻つて来る。その手には、見覚えのある刀。

「貴女が消えたところに落ちていたので、預かっていたんですよ。処分しなくて良かったみたいです」

話しながら沖田さんは私の両手に刀を置く。

「ありがとうございます……」

私が身に付けていた刀を他ならぬ彼が取つておいてくれたのが、嬉しかった。

22・思慮は災いの元

こちらの世界に戻ってきてからというもの、部屋でじっとしているには退屈なので、私は同室の千鶴ちゃんや顔を見せてくれる人達に、私がいなかった間にあつた出来事について詳しく聞いた。十四代將軍・徳川家茂公の上洛の際、新撰組が公のいる二条城を警護したこと。その夜、風間さんとその同胞である鬼たちが千鶴ちゃんをさらおうとしたこと。それから――家茂公が亡くなったことなどを。

私が持ってきた薬に対して半信半疑だった沖田さんは、当初ためらいながら服用を始めたが、次第に効用を実感したのか、今も素直に飲み続けている。その甲斐もあつて、副作用も無く沖田さんは少しずつ快復に向かう。未来の薬は、彼の身体に合つたらしい。この調子なら、彼は大丈夫。私は一先ず安心する^{ひとまず}ことが出来た。

自分も病人のくせに沖田さんは怪我をしている私が動くのを嫌つて、自分から私の部屋にやって来てくれる。

「沖田さん、二ヶ月この四種類のお薬を飲んだら、後はこの二種類を四ヶ月飲みましょう。それで、だいぶ良くなると思います」

と、私は沖田さんに念のため今後の指示を出しておいた。私も新選組に身を置いているからには、いつ死ぬとも限らない。だから沖田さんに、出来るうちに薬の詳細を話しておくべきだと思つた。

「それはどうも。だけど、そんな悲しそうな顔をしてるのは何故？」
沖田さんは、どうして私の心の奥底を覗くことが出来るのだらう。
いつ訪れるかもしれない私の死による、沖田さんとの別れを想像し

てしまうと、私は無性に悲しくなるのだった。

「そんなことないですよ」

私は否定して、笑顔を作った。

「もしかして、またいなくなるつもりじゃないですよね」

沖田さんが眉を寄せ、聞いてくる。

「そんなつもりは『全く』ございません」

その点だけは、力を込めて否定する。もう誤解は沢山だ。すると沖田さんは、

「こんなに人の生活に影響を与えておいて、今更急になくなるのは許さない」

と、言う。その言葉は、私がまだ側にいることを認めてくれているもので。私が目を丸くして彼を見つめると、また皮肉の爆弾が投下されるのだった。

次の日。昼間になってから目覚めた私は、誰もいない部屋でむくりと床から起き上がる。

「……いつつ」

動くと、癒えていない足の傷が引きつる。気にしないで立ち上がり、箆笥に近付いた。ゆっくりと一番下の引き出しを開け、奥から銀色の衣を取り出す。

（この間は、お世話になりました）
衣に手を合わせ終わると、惑いの時間が訪れる。私はその場にぼんやりして座った。

（この着物には、すごく助けられたんだけど……。どうしたものかな）

私は衣を見つめ、考え込んだ。実際、私が悩んでいるのは衣の「処分」だった。銀の着物はとても便利だが、万一他の誰かが持ち出して、知らないで桜に近付いた場合……。考えるだけでも恐ろしい。そういった事態を防ぐ為には、着物を跡形も無く消す他無かった。衣を燃やし、土に還すのだ。幸いにして、沖田さんの為の薬は多めにある。もう、あちらに戻る必要は無かった。

「でも、バチが当たるかも」

あれほど、この衣に私は恩を受けたのに。胸が痛んで、思わず呟く。
「何のバチですか。ん、その衣は……」

沖田さんが聞きつけて、部屋に入ってくる。相変わらずの突然の出現に私は驚いて、膝上に広げた銀の衣をぎゅっと引き寄せた。

「あっ」

私の叫びが虚ろに響く。私を中心にして、風が巻き起こっていた。身体が押し潰される予感と同時に、周りを囲む風の勢いによって身体が持ち上がった。

ココニ桜ノ樹ハ無イノニ、ナンデ風ガ起コルノ……？ 燃ヤソウナンテ、考エタカラ？

緊急事態なのに、どこかで冷静に答えを見つけている自分がいた。

「もう二度と、行かせない!!」

誰かが叫ぶ声が聞こえる。でも、その声の主をわたしは知らない。初めて聞く声だもの。それから、誰かがわたしの身体を強く引き寄せた。風の中から出られた一瞬に、大人の男の人の姿が目映る。その勢いのまま、わたしはその人に抱きしめられる格好になった。

「えっ、えっ？」

訳が分からないから、身体が熱くなる。初めて男の人に抱きしめられれば、恥ずかしいに決まってる!……もう、なんなの? 気が付いたら風の中にいて。知らない人に助けられたかと思ったら、今度は抱きしめられるなんて。

「はなして! あなたは誰? ここはどこ？」

男の人の腕の中で暴れると、すぐに解放された。まじまじと、その人はわたしを見る。私も改めて、その顔を見ることが出来た。かっこいい……。二十歳くらいかなあ。

「あゆみ、さん? ……背がだいぶ縮んだ? ……怪我も治ってる!」
初めて会ったはずなのに、何でわたしの名前を知ってるんだろっ。
っていうか、背が小さいだとう? なんて失礼なやつ。

「まさか、若返るだなんてことが……」
男の人は、勝手なことを呟いた。

23 . それでも貴方のそばならば

「あゆみちゃんが若返っただあ？」

と、驚きの声をあげた人がいる。わたしは千鶴お姉ちゃんの方を見た。

「あの人は原田さんっていうの」

千鶴お姉ちゃんはすぐに教えてくれる。

それで、これはどういうことなんだろう。知らない男の人達が広い部屋に集まって座り、わたしを眺めている。なんだか怖い。わたしは千鶴お姉ちゃんの裾を握り締めた。千鶴お姉ちゃんは、この中で一番やさしそうなもの。きっとわたしを助けてくれるにちがいない。

「年はいくつなんだよ？」

平助君というらしいお兄ちゃんが聞いてくる。

「九歳……」

答えると、何人かが額に片手をやった。

「いいか、よく聞け。さっきまでお前は今より十五くらい上の年だったんだよ。それがどうしたとか、いきなり子どもになっちゃった。そうなった訳が、一緒にいた総司にも分からねえようだ。とにかく、お前はここにいろやつらから色々話を聞いて、記憶を思い出せ。そうすりゃ、何か分かるかもしれないねえ」

土方さんという一番怖そうな人はそう言うのと、近藤さんという人を引っ張って部屋を出て行く。そんなこと言われても……。わたしは周りの人たちをこっそり見上げた。

数日経っても、わたしの消えたという記憶は戻らない。それでもわたしはここでの生活が楽しくなり始めていた。ここにいる人たちが面白くてやさしいことを知って、わたしはうれしかった。ここには朝子ちゃんはいないけど、学校に行って勉強をする必要がないからラクだし。

「あゆみちゃん、あんまり部屋と部屋の間をうろろろするなって言っただろ？ 大人しくしてないと、伊東っていうお化けに見つかって、お前食われるぞ」
新八つあんが言う。

どうやら伊東さんって人は、キャンプの皆から嫌われているみたい。だから私が小さくなった魔法を、皆は伊東さんには言いづららしい。ところで新八つあんは買ったお団子を持って、部屋まで遊びに来てくれていた。おいしそう。千鶴お姉ちゃんとわたしは思わず顔を見合わせる。

「育ち盛りは食え食え。千鶴も食え。いっぱい買ったからなにこやかな新八つあん。やさしいなあ。」

「いただきます……」
「あゆみちゃん、おいで」
お団子を食べようとすると、そうじが来た。お団子はあきらめて、もう背中を向けたそうじを追う。

「まってよ！そうじ」

「俺の団子より総司か……。あゆみちゃんは、いつだって総司が一番だな」

悲しそうな新八つあんの声が後ろから聞こえた。

「ごめんなさい！」

足は止めないで振り返り、大きな声で謝る。

「おー。いいってことよ」

姿は見えないが面白がっている新八つあんの声が返ってきて、わたしはほっとした。

だいぶ廊下を進むと、そうじが振り向いて、ささやく。

「内緒で外に遊びに行こう」

やっぱり、そうじは最高！

24・子どもの特権

「……………こらー！……………あゆみー！」

新八つあんの怒鳴り声が向こうで響く。あ、やっと気が付いたんだな。

「どこだ！出て来い！」

新八つあんは大声を出しながら、わたしを探している。でも怒られるのが分かっていて、わざわざ出て行くバカがいるものか。わたしは、トンシヨの物置部屋に隠れ込む。

寒いなあ、と思う。わたしがトンシヨに来たときには、すでに京には冬の気配があつた。火ばちの無いこの部屋は、とても耐え難い。だけど新八つあんに見つかるわけにはいかない。わたしはホコリ避けの布を近くから引き寄せると、それで身体をくるんだ。

「何？隠れんぼ？」

頭の上から声がして見上げれば、いつの間にかそうじがいた。

「どうして、わたしがここにいて分かったの？」

びつくりして聞けば、少し間を置いて「……………何となく」と、返ってくる。そんなふうに普通の音量で話していると、

「見〜つ〜け〜た〜ぞ〜」

と、後ろから怖い声。新八つあんだ！見つかつちゃった。ここまできたので、わたしは新八つあんに叱られる覚悟を決めた。だけど、

「まあまあ、子どものやったことだし」

と、そうじが気まぐれに、わたしが新八つぁんに追われてた理由も知らないくせにわたしをかばってくれる。め、めずらしい。まあ、ここはそうじに甘えちゃおうかな。

「ったく、なんだかんだいって総司はあゆみちゃんが一番大切なんだな。……しかし、あゆみちゃんがこんなに手が付けられない子だったとは」

疲れきった新八つぁんの声。そうだよ、これが『わたし』。前のわたしなんて、知らないもん。

「……それで、新八さんに何したの」

背中を丸めて帰っていく新八つぁんを眺めながら、そうじが聞いている。

「土方さん自作の句集を新八つぁんの部屋の机の上に広げておいただけだよ」

わたしは、いたずらっ子らしく、何でもないように答える。

「ぶつ。なるほど。皆に内緒にして執筆してる句集を探して、新八さんの部屋で見つけてしまった土方さんが火のようになって、新八さんに怒る様子が目に浮かぶ」

同じいたずら好きのそうじは、愉快そうに笑ってくれる。そんなそうじを見て、わたしも笑った。そうじってば、いつもこんな風な顔でいてくれたらいいのに。たまに、ぼんやりした表情をしていることがあるんだもの。でも、その理由をわたしは知りたくない気がする。だって……、だって本当に私の思う通りだったとしたら怖いから……。

＊＊

夜。ふつと目が覚めて眠れなくなったから、わたしはこっそり部屋を抜け出した。歩き回っているのが見つければ皆に怒られるから、足音を押さえて廊下に行く。いっぱい部屋を通り過ぎて、気がつけば近藤さんの部屋の前。灯りが漏れていたので、まだ近藤さんは起きているんだと思う。私はその場を通り抜けようとし、

「『大野君』がいなくなつて寂しいか？総司」

と、近藤さんの声を聞くことになった。わたしの胸がどきん、と鳴る。近藤さんのいう『大野君』とは『大人だった』わたしのことだと、わたしは何故かすぐに気が付いた。

「そんなこと無いですよ」

と、すぐにそうじの答えるのが聞こえて、わたしはほっとする。

「俺には見栄など張る必要は無かろう？」

「無いですって」

そう、無いんだよ。だって、わたしがここにいるんだもの。いつだって、そうじの近くに。大人のわたしはもういない。

「お前は大野君のことを好い……」

「どうしてそんなことを仰るんです」

そうじが少しムツとしたように遮った。

「俺には最初からお前の目は彼女を追いかけているようにしか見えなかったぞ。お前は素直じゃないから、隠そうとしていたみたいだが。……大野君がいなかった一年半、お前の心は穏やかだったか？」
そうじは黙ってしまった。やめて、そうじ。早く、早くしゃべって……。

そうじはぼつりと言う。

「僕が彼女にしてみらったことを思えば、あの子の為に何だってやってあげたいだけなんです」

ナニ、ソレ。

それって、『大人だったわたし』のために、『今のわたし』のそばにいてくれたってこと？色んなことをしてくれたってことなの？全部全部。毎日お話しにきてくれたのも、外に連れ出してくれたのも全部、大人のわたしへの……。

「そこにいるのは誰？」

泣きそうになっていると、きつい声と同時に襖が急に開けられ、わ

たしの前にそうじが顔を出す。わたしは急いで逃げ出した。

「あゆみちゃん！」

そうじはわたしを追ってきて、すぐにわたしの手を捕まえた。

「言つてよ、そうじ。皆が言うように。そうじには、わたしが一番だつて」

わたしは叫ぶ。なのに、そうじはわたしから顔を背けた。

「……ごめん」

小さな声で、そうじは言った。わたしは貧血のときみたいに世界がぐらりと揺れたように感じた。

わたしは力の抜けたそうじの手を振りはなして、また走り出す。めちやくちやに進んだけれど、途中で千鶴お姉ちゃんと自分の部屋が近いことに気が付いた。お姉ちゃんを起こさないように、静かに襖を開けると、お姉ちゃんは眠っていた。中に入ったわたしは引き出しに寄つて、銀色の衣を取り出した。この衣、そうじは大事そうにしまつてた。前のわたしの持ち物らしい。こんなもの、どこかに隠してしまえ。……ダメ。そんなことをしたら、そうじはわたしのことを嫌いになる。でも……。……どうするかは、後で決めればいい。取り合えず、持つて行こう。

わたしは衣をつかむと、また忍び足で部屋を出た。誰にも見つかりたくないから、いそいで庭を走る。すると、門のところに水色の羽織を着た人達がちらほら門の外へ出て行くのが見えた。ジュンサツかな、ラッキー……。そのまま、わたしは速度を上げる。

「なんだ?!」

と、驚いている隊士の人達をすり抜け、わたしはトンシヨの外に出て走り続ける。でも、逃げるのは思ったほど簡単じゃなかった。一人の隊士が、わたしをしつこく追ってきていた。

「待て!」

その声は左之さん。だけど、誰が相手だって捕まるわけにはいかない。わたしは迫る左之さんの手を避けながら駆ける。

だけど左之さんは、わたしのすぐ後ろに立った。とうとう捕まってしまうと、わたしは思った。でも、わたしに左之さんの手が触れることは無かった。

るくに前も見えていなかったわたしは暗闇で足を踏み外し、川に落ちていったから。

25・彼のいない世界

どぼん、という音をわたしの身体は響かせる。わたしは冷たく暗い水の中。川に落ちたんだと思うのと一緒に、口や鼻に入り込む水で苦しくてしかたがなくなつた。『おぼれる』って、こんなに怖くて苦しいんだ。意外に速い川の流れに逆らって、わたしは川べりの桜の、土から長くはみ出した根っこに何とかすがりついた。

「あゆみちゃん！今行くから、もう少し踏ん張れ！」

夜の暗さで姿は見えないけれど、左之さんが叫ぶ声がある。……あと少し頑張れば、左之さんが助けてくれる！でも、もう手が……。こうなったら右手で持つてる銀色の衣は手放して、流してしまうしかない。そうすれば右手が空いて、両手で根をつかめる。だけど、今となつては何故だか、この衣を見捨てることが出来ない。自分の命がかかっているのに……。だって、だって、この衣は前のわたしが着ていた物だから。そうじが好きだった、大人のわたしの物だから……。から……。

ただでさえ危ないときなのに、さらに強風が吹き始める。だめ、もう耐えられない。川と同じ方向に流れる風が、川を助けてわたしの身体をぐいぐい流そうとする。

わたしの手は根を離れ、水はわたしを完全に飲み込んだ。左之さんの声がぴたりと聞こえなくなつた。

＊＊

身体がふわりと川から持ち上がって、何か大きなものに抱えられた気がしたのは一瞬のことだった。再び、わたしは水の中に投げ出される。川底の固い石に身体が当たって、ぶつかった感じは死ぬかと思うほどだった。……ここはどこなんだろう。さっきと場所が違うんじゃない。ううん、今はそんなことどうでもいい。取り合えず、川辺に上がらないと。わたしが横たわっているのは、川の浅瀬だけど、でも水の深さが十センチだといえ、さっきまでの水への恐怖は変わらない。わたしは痛みをこらえながら、岸の方に這っていった。

乾いた土の香りを顔面に感じながら、ほつとする。横たわったままのわたしに、微風が寄せる。寒い！このままだと風邪を引いやいそう。でも、身体が動かない。誰か、通りかからないかなあ。助けて……。

「大丈夫かー！」

離れたところから、人の声がする。そちらに顔を向けると、夫婦らしいおじさんとおばさんがこちらに走ってきていた。

「溺れたのかな。痣がひどい状態だ。今、救急車を呼ぶから」
おじさんが携帯電話をポケットから取り出しながら、優しい言葉をかけてくれる。良い人達がちょうど通りかかってくれて良かった。わたし、助かったんだ。

安心できたのに、胸に空いた大きな穴が埋まらない。そうじのことが頭から離れない。涙が、止まらない。

「怖かったわよね、痛いよね。でももう少し我慢しようね」
おばさんが側について声をかけてくれる。それでも、胸の痛みは無くならなくて困ってしまう。

救急車が来るまで、わたしはそのまま倒れていた。空を見ていると雲の流れが速く、そのすき間から太陽が現われて温かい風が吹く。うつぶせのわたしの顔の前に、ピンク色の軽そうな何かが飛ばされてきた。

「桜の花びらだ……」

わたしが思わず呟くと、

「ああ、向こうに咲いてたな。大きな家の塀の中に……」

おじさんは、彼らが来た方向を見た。

その桜の木をぼんやり想像していると、

「ねえ、お嬢ちゃんは一人数なの？ここへは誰かと一緒に来たのかな？」

と、おばさんが聞いてくる。わたしは少し首を動かした。

「来てないよ……。わたしは一人ぼっち……」

そうじも皆も、本当は最初から『子どものわたし』のことなんてど

うでもよかったのかもしれない。わたし、これからどこへ行けばいいのかな。お父さんとお母さんのところに帰れるかな……。

―あゆみちゃん。

なに？どこからか、わたしを呼ぶ声がするような……。

―あゆみちゃん！

うん、気のせいなんかじゃない。これは、そうじの声だ。そうじがわたしを呼んでる！そうじが戻って来いって言ってる。……行かない。そうじが待ってるなら。またあの人に会えるなら。

わたしは、ふらふらしながら立ち上がった。おじさんたちがびっくりして、わたしを押さえようとする。

「動いちゃだめだ！大人しくしていなさい！」

「だいじょうぶ。ありがとう」

わたしはおじさん達の手をすり抜けた。また、そうじの声が聞こえる。それだけで力が沸いて来る。追い風も、走る私を後押しする。向こうだ。早く向こうに行かない。沖田さんのいる方に、彼の叫びが聞こえる方に。

「お嬢ちゃん！あんだ、背が……」

背？背がどうしたんだろう。そういえば、着物がやけに身体を締め付けて走りにくい。……水で濡れたからか。ん？違う。さっきより、着物の丈が短いぞ。あれ？私、今、何歳？……何か、全部思い出してきた。取り合えず、足出ちゃって恥ずかしい！図々しいけど、この銀色の着物、また羽織らせてもらおう。

走りながら、さつと衣を纏^{まと}う。そして、すぐに鬱蒼と茂る木々を抜けて、視界も開けた。おじさんの言っていた通り、大きな家が眼前に現われる。塀の向こうに見えるは、立派な桜の大樹。満開を迎えて、今にも散り始めそうな……。

「お邪魔します……」

無断で人家の庭に入り込む。

「沖田さん、ここから私を呼んでくれたんだ……」

私は桜の幹に触った。また、涙が零れる。

「私は欲深いから、我が俤だから……」

また、沖田さんに会いたい。でも、この衣に対して酷いことをした私には、もう道は開かれないだろう。どんなに沖田さんが私を呼んでくれたとしても。

——あゆみちゃん！

沖田さんの声が、幹の中から聞こえてくる。さっきからの呼び声は、

やっぱり空耳じゃなかったんだ。

—あゆみちゃん！

ごめんなさい、沖田さん。私はどんなに願っても、もうそちらには行けないの。行きたくても、行けないの……。

だけど。それでも、私は願う。どうか桜の神様、沖田さんに会わせて下さい。私にはさぞ、お怒りでしょう。でも、私は願わずにはいられないのです……。

すると、先程までのものとは明らかに強さが違う風が巻き上がる。これは、神様の慈悲？それとも……。いいえ、どちらでもいい。神様が示してくれたこの風に、私は飛び込んでいくだけなんだ。

26・繋がれた場所

自ら飛び込んだ強風の中で一瞬だけ、半目を開けてみる。そして目にしたそれを私が見間違えるはずもない。風の外から差し出された彼の手。絶対に、彼の手だと確信できた。私は、その手に自分の手を重ねた。

＊＊

「僕が殺したのだと思った……」

言っと、沖田さんは私の手を離した。そして彼は視線を地面に落とす。私は物を言おうとしたが、沖田さんの雰囲気口がきけなかった。

「左之さんに、貴女が川に流されたと聞いた後、どんなに探しても見つからなくて……」

彼は唇を噛む。

「大丈夫です。私は無事で今、ここにいます」

おそるおそる、やつれた彼の頬に手を伸ばすと、沖田さんはびくりと震えた。

「……僕はあの恐ろしい晩に、貴女を拒絶してしまった」

「私は気にしていません」

私は静かにはつきり答えた。沈黙が二人の間に落ちる。視線が交錯して、逸らされて、また交錯する。私の方は、沖田さんの気持ちを探ろうとしていた。沖田さんの方はどうなんだろう、と思う。もし私の思い込みではなく、彼が私と同じ願いを持っていてくれるなら、どんなに幸せだろう。

「沖田さん、貴方への私の気持ちを言葉にしても良いですか？」

自分の声が遠くから聞こえるような感覚がする。

「勿論。僕には先に言う資格が無いし、貴女の口からその言葉が聞けるなら嬉しい」

沖田さんは今日初めて少年のように笑う。

「私、貴方が好きです」

沖田さんは私の目をまっすぐ見て微笑みながら聞いていた。そして、

「僕も貴女が好きだ」

と、彼は言った。

番外編くー> 『お味噌汁』（前書き）

このお話は、本編の流れには関係ありません（というか、もしもストーリーになってるかも）。お待たせしているので、突発的に制作した小話です。どうぞお楽しみ下さい。

番外編＜一＞ 『お味噌汁』

どうかしら。すごく早く起きて頑張ったんだから、喜んでくれるかしら。期待と不安が混じった胸を押さえて私は広間へ、左之さんと共同で作った朝食を運ぶ。

＊＊

いただきます、の声を揃えて、幹部の皆と女子二人の朝餉タイムが始まる。私は副菜に箸をつけながら、こっそり周りをうかがった。己の膳のうち、手始めに食べる碗は各々違う。あ、平助君、お味噌汁から行ってる！

「うめえー！」

と、平助君の声が上がった。私は胸を高鳴らせ、平助君を見つめるが、

「やっぱ、朝の鍛錬の後は飯が美味しいよな！」

と、次に平助君が出した言葉にがつくりした。

「そら、そーだろ！身体動かした後の飯は最高よー！」
続いて発せられる新八つあんの声。……この、大鈍感共め。このお味噌汁の、絶妙なダシの取り具合と、使っている味噌の豊かな風味が分からののか！あーあ、お味噌屋さんでもダシの取り方をせっかく教わったのにな。あ、左之さんがこっちを見てる。

「平助に新八、これはなあ、……………」

左之さんが私の為にフオーをしてくれようとしたので、私は笑って首を振った。別に皆に私が頑張って作ったことを知って欲しいわけじゃなかった。そんなことを披露されたら、気恥ずかしい。不味くなくて並でも美味しいなら、それで良かった。激動の時代の中で、新選組の立場というものは常に不安定だ。幹部の皆も、心のどこかでは無意識にいつも緊張していると思う。だから、少しでも彼らに安らいでもらう時間を作りたくて、私は美味しくて栄養がある食事を準備しようと考えたわけだった。

懲りずに次回の当番でも工夫して精進しようと決心していると、

「美味しい」

沖田さんがお味噌汁を口に含んで、横から私に微笑んでくれる。それだけで、胸がほつかりと温かくなった。沖田さんは彼が非番の日に、私がダシと味噌選びで苦戦した買い物にも付き合ってくれていたし、今日私が食事で当番だったことも知っている。しかし、そんな経緯を分かっているからの気遣いでも、ここは素直に受け取っておこうと思った。

「そうですかね」

と返して、私も一緒にお味噌汁を啜った。

番外編＜二＞ 『乙女心』（前書き）

番外編です。時期は池田屋の少し後くらいかな。

「左之さん。私と賭けをしません？」

ちようど左之さんが私達の部屋をぶらりと訪れたときに、私は話を切り出してみる。私は幹部の中から人選して、事前に彼を賭けの相手に定めていた。

「面白えな。ここんとこ、退屈してたんだ。で、何の賭けだ」

にやりと笑って、ノリよく頷く左之さん。さつすが。こういう打てば響くところはすごいと思う。

「……どっちが、より華麗に新八つあんをだませるか、なんてどうです？」

さて、ここで読者の皆様には、だまされる側の心情について考えてみてほしい。自分がだまされたと相手が気付くとき、何らかの感情を生じるはずだ。その感情が後腐れなさそうな人物、といえば新八つあんだらう。だまされたことに対して、その場で怒りはするだろうが、すぐに忘れてくれそうだ。平助君もそう見えるが、彼は若くて一番だましやすそうで、ようは簡単すぎ、この賭けには向かない。さすがに局長の近藤さんを遊びでだます気にはなれないし、土方さんや沖田さんをだまそうものなら後が本気で怖い。斉藤さんについては……、彼については騙したら何が出てくるのか検討がつかない。案外、あの綺麗な眉を一瞬ひそめて、背中を向けて歩み去られる気がする。それも何だか、いやかなり切ない。というわけで、新八つあん――！

「分かった。判定者はどうする？」
と、左之さんが聞いてくる。

「千鶴ちゃん、お願い」

私は彼女の方を向いて頼む。今まで私と左之さんの会話を黙って聞いていた千鶴ちゃんが「ええっ」と、戸惑う。

「私でいいんですか？」

と、私達に尋ねる千鶴ちゃん。

「他に適任者が思い当たらないの。承知してもらえると嬉しいんだけど」

私の言葉に、結局千鶴ちゃんは同意してくれた。

「んで？賭けといえば、勝者にご褒美は鉄則だよな？」

またまた、さすがな左之さん。話が早い。というか、そのご褒美こそが、私が危険な賭けをあえてやろうとする理由なのだ。

「ありきたりですが、相手の言うことを何でも一つ聞く、ということ」

私が答えると、婉然と左之さんが私を眺めて笑う。

「いいのか？そんなこと言っちゃまって」

「……冗談きついですよ、左之さん」

私が冷たい目で見ると、左之さんもおかしそうに、

「わりの、わりの。冗談が通じる奴と話すのは楽しいな」

と、笑った。

……その後。新八つぁんは二人の人間によって騙され、怒り、嘆

き、落ち込んだ。でも、心の強い彼はすぐに持ち直した。鶏は三歩で忘れる、いや失礼。

賭けについてだが、勝敗は引き分け。私と左之さんはお互い、相手に何も負わなかった。

実際の賭けの内容は、新八つあんの名誉の為に割愛させていただきます。機会があれば、私は話してもいい、むしろ面白いから話したいのですが。あ、新八つあんが野生の勘で察知して部屋に来ました。私を睨んでいて身の危険を感じるので自重致します。

＊＊

翌朝になった。剣の鍛錬の後、気を落ち着かせるために部屋に戻った私は、しばらくして千鶴ちゃんのもとに向かう。いつものように私も彼女の手伝い―掃除・洗濯などをしなくっちゃ、と張り切って。そのとき。

うわあ、沖田さんだあ

廊下の向こう側から、彼の姿が見えた。用があるのか、彼はこちらの方角に向かってくる。心はときめいて、早鐘を打つものの。じゃあ、私は手前の部屋で曲がろう、と思う。

「おはようございます」

私は遠くから沖田さんに挨拶を済ませ、彼の返事も待たず、いそいそと近くの物置部屋に入って襖を閉める。うーん、いつ来ても物がいっぱい、埃っぽくて薄暗い部屋ですね。そうそう、この部屋から箒はきを持って行っておこう。後で取りに来る必要がないもんね。私は箒を掴むと、入ってきた襖とは向かいの、別の廊下に繋がる襖の方へ向かった。

すると、後ろの襖が、さっと誰かによって開けられた。

「僕を避けるなんて、いい度胸ですね。あゆみさん？」

笑顔の沖田さんだ。むしろ魔王。

「そんなことないですよ」

と、こちらも笑顔で答えつつ、後ずさりしたいのを必死で我慢。やっぱ逃げたのは不味かったか。逃げる者を追うのは、いじめっ子の性だもんね。私は「あ、ちょっと急いでいるので、……」などと思いついたように、もごもこ言って今度こそ後ずさっていく。すると、

「避けている。最近ずっと」

少し寂しそうな表情で、沖田さんが言う。その顔、反則です。胸が痛む！私が悪者なんですか？、ていうか、私が追うと逃げるくせに「そんなことないですってば。気にしないでください。ね？」

お願いだから早く行かせてくれええええええ。

「ほんとに気にしないで下さい。では……」

そして襖に手をかけた私だが、その襖を沖田さんの手が伸びてきて押さえた。私も背は百六十センチで女としては高いほうかもしれないが、沖田さんはそれよりも高い。沖田さんは私の横に立ち、私を見下ろす。その距離、数十センチ。

「これが逃げていないっていつのかな」

沖田さんが目を細めてこちらを見ている。怖くて彼の瞳から視線を逸らすことが出来ない。それでも私の片手は必死に襖を開けようと健闘してはいるものの。魔王の手が許してくれない。

「……恥ずかしいんですよ」

と、私は観念して呟く。

「ほんととは誰の側にも寄りたくないんです。人見知りなんです」

「―それは、特に僕だけを避ける理由にはなっていないと思うけど？」

と、沖田さんが言う。そうですね、その通りです。しょうがない、やっぱりごまかせないか。こうなったら正直に話そう。

「すみません、人見知りっていうのは嘘です。えっと……、化粧をしてない顔を人に見られるのが嫌なんです」

私は羞恥に俯いて、沖田さんの顔を見ないまま続ける。部屋の薄暗さで、自分の赤くなつた顔がどうか沖田さんに見えませんかように。

「こちらに来てから男装で化粧ができないじゃないですか。というか、そもそも手元に化粧道具も無いですけど。……私は千鶴ちゃんみたいに若くもないし、可愛くもないから、化粧しないで人前に立つのはすごく抵抗があるんです。ここのところ特に、化粧出来ない自分の顔が気になり始めて」

好きな人に、醜い自分を見られたくないんです、とは言わなかった。そう伝えたなら沖田さんは、そんな私の思いをきつと摘み取ってしまふ。この人はきつと、自分が何とも思っていない女の恋心なんて簡単に破り捨ててしまふだろう。

「ふーん。それでも、何で僕だけなんです？男の左之さんや新八さんとは、親密みたいに見えるけど」

うっ、それは誤解です。最近彼らのごく近くにいたのは、左之さんとの賭けの関連であつて。ええい、全部言っしかないのか。

「賭けをしてたんです。そして私が勝つたら、左之さんには化粧道具を買ってもらおうって決めてたんです。私は男装しているから、そんなに周りに分かるほど濃くは付けられないけど」
私は下を向いたまま話し終える。

「……………それで、左之さんには買ってもらえることになったんですか」

「いいえ。引き分けだったので」

答えると、ふいに襖から彼の手がどけられた。

「化粧道具くらいなら僕が買ってあげるのに。―その楽しそうな賭けとやらを僕とやって貴女が勝てれば、ね。……引き留めて悪かったですね。少しいらいらしてたところに貴女がちょうど来たから、八つ当たりしただけなんだ。もう行っていいですよ」

ええ、行きますとも。くそう、八つ当たりかい。正直に話すなんて完全に馬鹿じゃん、私。ていうか、賭けなんて怖いこと、沖田さん

となんて出来るわけないし。絶対にいびられる。

「では」

と、短く挨拶をして、私はまだ真つ赤な自分の顔を意識しながら、ばたばたと廊下をかけていった。『断じて、これは沖田さんのいじめから逃げているわけではないんだぞ！千鶴ちゃんのところへ急いでるんだっ』と、自分自身に心の中で言い聞かせながら。

＊＊

数日後、沖田さんは何故か新しい化粧道具を持って私達の部屋に現われた。

「店の前を通って偶然目に付いたので買ってきました。これで、堂々と僕と対決出来る。良かったですね」

と言いながら、私に道具一式を渡す沖田さん。「対決」って……。私は闘争相手ですか。そんな風に見てるんですね。……でもま、いいか。私は彼から初めてもらう物を見下ろした。理由はともあれ、嬉しいと思った。

27・風間来襲

昨日、私はこの世界に戻ってきた。今は部屋で千鶴ちゃんと二人きりになり、彼女から情報をもらっている。その話の内容は、大半が穏やかなものではなかった。

「私がない間に、伊東さんとその同志さんたち十数人が、新選組から抜けて孝明天皇の御陵衛士になっちゃったんだ……」
私が言うと、千鶴ちゃんは辛そうに眉をぎゅっと寄せ、「はい」と頷いた。私が向こうの世界に行っていたのは二・三時間程だったと思うのだが、こちらでは半年くらい経過していた。その間に新選組の状況は変化していたのだ。

「伊東さんはどうして離隊したの？」

と、さらに踏み込んだ質問をしてみると、

「そっそれは、えっと、どうしても御陵衛士になりたかったそうだと、千鶴ちゃんは詰まったように言葉を濁す。私は黙って千鶴ちゃんを見つめた。彼女の大きな瞳に宿る深い苦悩の影。それは、この間までは確かに無かったものだった。私は彼女の様子から、既に千鶴ちゃんは変若水のことを知っていると思った。

「変若み……」

私がぼそりと呟くと、びっくりと身体を震わせた千鶴ちゃんは、私の次の言葉を待っている。

「もう知っているんだね、変若水のこと」

確認するように問えば、

「あゆみさんも変若水のことをご存知だったんですね。……未来では、変若水って有名になっっているんですかと、逆に聞き返される。」

「や、そういうわけじゃないんだけど。私はたまたま新選組の関係者の血縁の人から、密かに伝わっていた話を聞く機会があったものだから」

もしもの時の為にと、以前から考えていた言い訳を口にして、私は千鶴ちゃんの追及から何とか逃れた。

伊藤さんたちの離隊のきっかけは、屯所奥で実験体として変若水を飲んだ一隊士が狂い、血を求めて夜中に就寝しようとした千鶴ちゃんを襲い、彼女の助けを求める声を聞いて集まった幹部たちによって粛清されたところを伊東さんに目撃されてしまったことだと、千鶴ちゃんは教えてくれた。伊東さんは皆に説明を求め、今まで知らされていなかった真実、つまり新選組が変若水でやってきたことをようやく伝えられた。結果伊東さんは変若水のことを口外しないかわりに、新選組の離脱を申し出、認められる。ところが話はこれで終わらない。新選組からいなくなったのは伊東さんたちだけではなかったのだ。斉藤さんと平助君も伊東さんに付いて御陵衛士になったようだ。

千鶴ちゃんとの話が一段落すると、雑用をしたり夕飯を食べたりで、その日も終わりに近付いてしまった。しかし、その夜。

「敵襲だー！」

叫び声と剣を打ち合う音が外から聞こえてきた。

「行かなきゃ」

私は立ち上がる。昨日、風の中で受けた軽い切り傷が身体のあちこちで意識されたけど、今はそれどころじゃない。

ふと見ると、千鶴ちゃんも腰を上げている。

「駄目だよ。千鶴ちゃんは出て行かない方が……」

と、私は声をかけた。屯所を襲ってきたのは恐らく鬼たちで、目的は千鶴ちゃんを連れて行くことだろう。千鶴ちゃんは男鬼ではなく希少な女鬼である上に、鬼の中でも濃い純血だ。純血同士で結ばれば強い鬼の子どもが産まれる為に、風間さんは千鶴ちゃんを得ようとしている。

「それはあゆみさんの方でしょう？ 私は行きます。彼らには隠れても隠れなくても、きっと同じだから」

千鶴ちゃんは微笑んでいた。……ああ、そうだ。この子はもう、固く決意していたんだ。それならもう、彼女を止めることは出来ない。「じゃあ、行こうか。走ろう」

我々はそちらに向かって全速力で走る。すぐ、風間さん達が新選組隊士と戦うのが見えて、一瞬私は恐れに立ち止まりそうになった。それでも、足を動かす。そんな私を止めたのは、しかし別のものだった。

「止まれ！」

と、叫び声がする。その声の必死さに驚いて、咄嗟に私達は立ち止まる。顔を向ければ、沖田さんが走ってきていた。彼はすぐに追いつく。

「何で出てきたんですか。危険だから早く部屋に戻って下さい」

沖田さんは私に噛みつくように言う。

「出来ません。しなくてはならないことがあるんです。ごめんなさい、分かって下さい。止めないで」

私は沖田さんの目を見て言い、風間さんの方に向かいかけた。ところろが、沖田さんに腕を掴まれ止められる。

「ここは戦場なんだ！戦えないくせに甘い考えで、のこのこ顔を出すな。――貴女は大馬鹿だ。池田屋に飛び込んできたときもそうだった」

厳しい表情で沖田さんは私に言う。沖田さんの私に対する怒りと心配が痛いほど伝わる。

「……だって、……私しか風間さんに帰ってと説得する立場の者がいないじゃないですか。皆、ただ戦うだけ。彼に考えを変えてもらうことが一番なのに」

私はたどたどしく胸の内を話した。

「まさか説得の通じる相手だと？ふ、とんだ見当違いだ」

沖田さんはきつく私の腕を握ったまま薄く笑って言う。

「でも、可能性は無ではないでしょう。ほんの少しでも可能性があ

るなら、私はしたいんです」

引かずに言い続けると、怒っていた沖田さんの目の色が急に冷えた。沖田さんから発せられる冷気に、身の毛がよだつ。

「それなら、力づくでも止める」

沖田さんの手にさらに力が込められ、あまりの痛さに私は顔をしかめる。そのとき近くで、どさり、という音が虚ろに響いた。見れば、風間さんの周りに立っていた隊士達が次々に崩れ落ちていた。そして風間さんの視線は、側にいた私たち二人に向かう。

「下がって下さい」

沖田さんは私に背を見せ、後ろ手で私達を追いやった。

「今度は貴様か」

風間さんが無表情に言いながら近付いてくる。緊迫した気が沖田さんと風間さんから感じられた。でも、私は戦いが始まるのを見過ごすわけにはいかなかった。

私は無理やり沖田さんの前に出る。

「風間さん、帰って下さい。そしてもう、千鶴ちゃんが悲しむことをしないで下さい。たとえ力づくで千鶴ちゃんを連れ去っても、彼女に言うことを聞かせることは出来ません。千鶴ちゃんの意志はとても強いから。だから、こんなことは止めて下さい」

「……下らぬ。女が、しかも人間の女が鬼の俺に指図しようとは笑わせる。何故貴様の言うことなど聞かねばならん。そこを退け。邪魔立てしなければ女故にお前は見過ごしてやる」

風間さんは気分を害したようだった。私を見下ろす目には、『私個人』だとか『女』だとかいうものへというよりも、『人間全て』への蔑み^{さげす}が込められている気がした。なんであるかと、一度だけではあきらめられない。再度嘆願しようとする私を、今度は沖田さんの方が許さなかった。

「分かったでしょう。話の通じる相手じゃないんだ」
沖田さんは私を横に押した。私の中で焦りがどくどくと心を圧迫していく。

やっぱり、私には人を動かす力は無いのだろうか。このままでは、沖田さんの命も危ない。どんな言葉なら風間さんに届くというのだろう。考えても考えても分からない。………すぐに理解してもらえずとも、何度でも語りかけなければ。そうすれば、やがて届くかもしれないのだから。私にはそれしか出来ない。

それに私は風間さんを信じたかった。私は池田屋で初めて会った時から、風間さんを信じていた。あの夜、私の質問に真摯に答えてくれたこの鬼の頭領を、私は信じ続けたかった。

私がまた口を開きかけたとき、

「人ではなく、鬼の言葉なら聞いてくれますか」

後ろから、そう言い出したのは千鶴ちゃんだった。

「まったく。君もそのまま隠れてくれればいいのに……」

沖田さんが呆れたように呟く。

「あゆみさん、ごめんなさい。本当は私が言うべきことを言ってもらってしまつて……。少し怖気づいてたんです。でも、やっと勇気が出ました」

千鶴ちゃんが私に微笑みかけてくる。その顔に私は一瞬見惚れてしまった。すると千鶴ちゃんは、今度は風間さんに向き直る。その間に、他の幹部たちも駆け寄ってきた。

「風間さん、あゆみさんの言葉はそのまま私の気持ちです。どうか私のことなど放っておいて下さい。そして、これ以上新選組の人達を傷つけないで下さい」

千鶴ちゃんの凜とした声がその場に響く。私たちは動かず、黙ったままの風間さんの反応を見守った。

「——心など、時間が経てば移ろうものだ。お前も無理にでも連れて行けば、やがて考えを変えるだろう。……だが、そのような顔を長く見続けるのは、俺も面倒に思えてきた。興が冷めたな」

そう放たれた言葉は、彼が私達に渡す最後のものという響きがあった。告げ終わると風間さんはこちらに背を向け、歩き出す。すぐに天霧さんという他の鬼も風間さんの退却に加わっていく。もう会うことは無いかもしれないと思うと、少し寂しい気もした。と、天霧さんが半ば振り返り私と目が合う。何だろうと思っただけれど、彼はそのまま行ってしまった。濃い闇に鬼たちの姿が消える。

皆で彼らが去った方を見てみると、

「あの風間がよく納得したな」と、原田さんが言い出した。

「いいや。千鶴とあゆみちゃん二人に、あの気迫きはくのこもった目で見られたら、誰だこたって堪えるだろうよ」

新八つあんが応じる。

「まったく、無理すんじゃないよ」

土方さんは千鶴ちゃんに説教を始めた。でも、どちらも何だか嬉しそう。良かったなあ、と思っていると、

「貴女も無茶しないで欲しいですね」

私の方には沖田さんのお叱りが待っていた。

風間さんと別れを交わした夜から、五ヶ月後のこと。千鶴ちゃんと私が一緒に広間へ行くと、皆は坂本竜馬が暗殺されたという話題をしていた。私も座って、話に耳を傾けていると、近藤さんと土方さんがやって来た。加えて、その二人の後ろから部屋に入ってきたのは……。

「斉藤！なんで、伊東派のお前がここにいるんだよ?!」
新八さんの大声が広間に響く。

「俺は局長たちの了承があつて、間者として伊東の側にいただけだ。新選組と手を切ったつもりはない」

斉藤さんが言うと、皆は驚いた後、それぞれ表情を柔らかくする。どれほど斉藤さんが必要とされているか、皆の気持ち伝わってくるようだ。斉藤さんが戻って来たことで、失っていた心強い空気が一つ新選組に帰ってきた。

「斉藤の話では、伊東は局長の近藤さんを殺そうと企んでいるらしい。……それから他にも、許せねえことをしようとしてやがる。新選組の存続自体を揺るがすことをな」

土方さんは話しながら、ちらりと私の方に視線を向けた。私の前では言いづらいことらしい。恐らく変若水に関わることだろう。皆が周りで静かに頷いているところからすると、皆も察したようだ。伊東さんは幕府を失墜させる為に、幕府が新選組に下した非人道的な変若水の研究の件を世間に公表しようとしている、のだったか。私

が変若水を知らないっていうのは、いい加減どうにかならないものかな。ため息をつきかけて我慢した。

「よって、新選組は早急に伊東を暗殺する」

また私から皆の方へ目を戻した土方さんの『暗殺』と断ずる声が、私の心に重い鉛のように押し掛かった。結局、こうなってしまうのか。これを私は黙って受け入れるしかないのだろうか。私には伊東さんの為にやってあげられることはないのかな……。いや、有る。やろうとしなきゃ、何もないまままで終わってしまう。

「お願いがあります。最後に一度だけ、私に伊東さんを説得させて下さい」

私は思い切って声を上げた。

「駄目だ」

土方さんの即答と、皆のあきれた視線。

「伊東さんの暗殺って、どのように遂行するのですか」

私は土方さんの言葉を無視して、今度は質問をした。

「あ？……伊東を宴に呼んで泥酔させ、帰りの夜道を襲うってとこだろうな」

土方さんは私の目を見て何かを感じ取ったのか、率直に答えてくれた。

「それなら、まず私に伊東さんと二人きりでお酒の酌をさせて下さい。それくらいなら、許して下さいませんか。心配なら、千鶴ちゃんも部屋の中か襖の外にいてもらいたいです。千鶴ちゃんならいても、伊東さんは警戒しないで胸の内を話してくれるでしょうから」

「その短い時間で、伊東の心変わりを試みるってのか」

しんとした部屋に、土方さんの声だけが響く。千鶴ちゃんは私が相談も無く勝手に決めたことに対し、驚いて目を丸くしている。

「難しいです。難しいですけど、しないまま後で悔やみたくないんです」

私は土方さんを真っ直ぐに見た。

「――説得に失敗しても、絶対に暗殺をけどらせるんじゃないぞ。けどらせたなら、お前も殺す」

それは私の血の匂いをまとった許可。

「分かっています。ありがとうございます」

私は了解した。伊東さんに待ち受ける暗殺のことを漏らして、計画に支障を来たしてはならないということだ。

「……………ここまで愚かだとは思わなかった。心底あきらめましたよ」
それまで部屋の一角で口を閉じていた沖田さんが鋭く言葉を放つ。

「無理ですよ、どう考えたって。風間は奇跡的に納得してくれたけど、あの腹黒い伊東には同じ手を通じるわけがない。あゆみさんに、

そんな特別な能力があるとは普段の言動からして、どうしても思えない」

沖田さんは、悔しいけど尤もな発言を続けた。そうだそうだと、皆も周りで頷いている。土方さんはそれを見て、渋い顔をしたが、

「もう俺は命令したんだ。近藤さん、いいな？」

と、近藤さんに局長の最終判断を求めてくれた。だが、近藤さんは考え込んでしまう。場がざわつき、幹部は口々に反対を唱えている。不安が私の心を何度も往復していく。

「私もあゆみさんに協力します。二人で一緒に伊東さんのお酌をしたいです」

広間に、すつと通るような声を上げたのは、驚いたことに千鶴ちゃんだった。千鶴ちゃんの方を向くと、私の意志を尊重してくれる温かい瞳とぶつかった。

朝子？―千鶴ちゃんの力強い表情を見た私は、急に朝子のことを思い出す。ここにも、本当に信じられる友がいる。朝子みたいな、けれども朝子ではない『千鶴ちゃん』という友が。他人のことを、自分のことのように思ってくれる人が。

私は百人力を得て、深く頭を下げた。

「皆さん、お願いします。精一杯やりますから」

「うむ、そこまで言うならやってみてもらおう」

未だ否定的な幹部たちの態度を断ち切るかのように、近藤さんがきっぱり言う。局長の重い決定に、皆は一様に口を閉じた。

29・暗殺へ <二>

「お前達二人には伊東の酌係りだ。伊東をぐてんぐてんに酔わせる大事な役目だから、抜かるんじゃないねえ」

と、土方さんが言う。千鶴ちゃんと私は「はい」と、しつかり返事をした。

―自分で決めたんだ。説得が駄目だったら、伊東さんは私の手で死へ誘^{いざな}う。そういう覚悟でやらなければならない。

「伊東を道で襲うのは、総司と一般隊士を加えて、計五人。伊東始末後は、その死体を使って御陵衛士をおびき出して殺す。衛士たちと一戦するのは左之助と新八だ。隊の者をそれぞれ率いて行け」
土方さんが計画を話す。その話がキリが良いところで。

「すみません。失礼ですけど土方さん、その人数では恐らく不十分です。伊東さんにはそれで大丈夫でしょうが、そして左之さんたちの実力を疑うわけではありませんが、御陵衛士には万一のことを考えてもつと慎重にならないと、取り逃がして『近藤さん』や新選組は報復を受ける恐れがあるかもしれません。御陵衛士の人達は思いがけず敏捷で、侮れない気がするんです。御陵衛士一人一人に個別に対策を立てる位まで、とことんやってもいいかもしれません」
私はちよつと勇気を出して口を開いた。

「ああん？」

土方さんが不快そうに呟く。またお前か。いちいち口出しするな。

素人が何言っただ、というところだろう。

「大野が言いたいの、慢心せず万全を期せということでしょう。今回のことは特に、手抜きがあつてはならない。俺も大野の意見に賛成です。御陵衛士の詳しい情報が必要なら俺に言つて下さい。他にも手伝えることがあるならやります。俺が左之たちと一緒に戦うのは、間者とはいえ元・伊東派故に、他の一般隊士の不信があるかもしれないから難しそうですが」

斉藤さんが静かに言う。味方してくれたんだと、感謝の思いで斉藤さんを盗み見ると、彼はいつもの無表情だった。

「僕も賛成。近藤さんに仇^{あだな}為しそんな奴らは、徹底的に排除する。伊東を殺したら、僕も左之さん達に合流するよ。きっと体力が余ってるからね」

近藤さん命の沖田さんも、加勢してくれる。

「おめえらの言いてえことは分かった。――そうだな、総司はそれで頼む。それから山崎たち監察は今日から奴らの本拠地、高台寺を見張れ。衛士たちの一挙一動漏らすな」

沖田さんは「了解」、山崎さんは「御意」と頷いた。

「平助君の対処はどうするんです？」

最後に千鶴ちゃんが恐る恐る質問する。土方さんは迷いをかすめ見せながらも「刃向かうなら斬れ」と言い、逆に近藤さんは「助けない。出来れば新選組に戻るよう言ってくれ」と新八つぁん達に頼んだ。私も出来る限りのことをしたいと思った。

*

会議が終わって各々部屋に戻ると、沖田さんが私達の部屋の前に来た。

「僕は伊東を斬りますよ。貴女があいつの改心に失敗したら、貴女が泣こうが喚こうが」

沖田さんは私の目を見て言う。私は彼の瞳から、

『そうしたら貴女は僕を恐れる？嫌いになる？―それでも、僕は止めないけれど』

と、問いかけの光を読み取った気がした。

「斬って下さい。御陵衛士壊滅を実現させて下さい。土方さんが、私を殺さないように」

私は笑って見せた。私も自分の瞳で語ってみる、

『私が沖田さんを嫌いになるわけじゃないじゃないですか。最初からそんな貴方を好きになっただからです』。

すると何事も無かったように、沖田さんもいつもの笑顔を取り戻した。……私の意思も、ちよっとは伝わっただろうか。

30・宵待ち月

その日、私は何の抵抗も無く、ぱちりと目を覚ました。思い出したくないような昨日までの記憶も、付随して頭に戻って来る。心臓がぎゅうと掴まれたような心地になった。身体の方は一瞬で熱が冷める。がちがちに再び緊張して固まる身体を私は半刻もてあましたけれど、『大丈夫、やり遂げてみせる』と誓い直して、ようやく私は布団から抜け出した。

襖を開けて、するりと板の間に出る。見上げれば、いつもと変わらない朝空だった。

勿忘草色は太陽に輝き、雲はいくつか千切れたように浮かんでいる。

—なんて美しいんだろう。

この世界の始まりは、いつもすごく綺麗だ。例えば、その日に新選組が長州系浪士を大勢斬ることになろうとも、それを予想させない程に。

だから私は毎度のことのようには驚いてしまふ。町の巡察同行で新選組隊士が斬り合うのを目の当たりにすると、『優しいこの人達がこんな残酷なことをするなんて』と震えてしまふ。

こういつふうになるのは、きっと私はこの世界を心の根底では受け入れきっていないからだと思う。

―でも、きっと“慣れていく”のだろう。

そうに違いない、と思った。もし私がこの世界に居続けることになるならば、きっと―

＊

気持ちを落ち付けきれないまま日は落ち、伊東さんは誘いに乗ってやって来た。私は近藤さんと土方さんと共に、近藤さんの自宅の入り口で伊東さんを出迎える。

「伊東さん。すまねえが近藤さんと俺は今、火急の用件が入っちゃって、これから少し部屋に籠もらなきゃならねえんだ。悪いがこいつらと先に飲んでもらってもいいか。そんなには待たせないつもりだ」

珍しくにこやかに伊東さんに向かえた土方さんは、心苦しそうにして伊東さんの意向を伺う。

「あら、じゃあ出直しましょうか？」

伊東さんは驚いて聞いてきた。

「いや。出来ればいて欲しい。時間はかかりませんから」
近藤さんが悠然と答えると、軽く微笑んだ伊東さんは構わないと答えた。

*

「それじゃ、俺たちは向こうの部屋にいるから用があればいつでも声をかけて下さい」

と、近藤さんは言つて、土方さんと一緒にその場を離れていく。

「近藤さんと土方さんは後ほど参るそうですから、すみませんが」
言つて私は伊東さんの酌を始めた。

「やっぱり新選組の局長や副長ともなると忙しいものよねえ、仕方ないわ。それにしても、こうして貴方とお話するのは久しぶりね、大野君。何だか懐かしいわ。貴方、急にいなくなつてしまったものだから、私すごく寂しかったのよ。近藤さんから幕命を受けて他所に派遣されたつて聞いたけれども」

幕命。そんなことになっていたのか。私は「ええまあ」と、曖昧に頷き、

「私もまた伊東さんとお会いできて大変嬉しいです。また以前のよ
うに、若輩者に先生のお話をお聞かせ下さい」
と、話を切り出す。

「また質問会？やだわ、貴方はいつも上手に私の意図を暴いてしま
うから」

伊東さんは少し笑った。だが伊東さんの杯に次々と酒を注ぎ足して
熱心に促せば、酔いが心地よく回り始めていた伊東さんは意外にす
んなり語り出す。

「そうねえ。『今まで最も力を持っていたもの』が近々、本当に崩
れるかもしれないわね」

「え、それはどういうことですか」

私は伊東さんの漏らした発言について考えを巡らしてみる。『今ま
で最も力を持っていたもの』とは何か。色々考えられるけれど、伊
東さんが指しているものとは率直に考えるならば江戸幕府のことで
はないか、と私は思った。

「すると、この国はどうなっていくのですか」
私は質問を重ねてみる。

「国を動かす者が変わり、仕組みも変わるでしょうね。だから貴方
も身の振り方を今から考えた方が良いわよ。このままでは危ういわ」
私が仮にも属するのは新選組。その新選組は幕府に仕えている。と
いうことは幕府が傾けば、新選組にも影響が及ぶと、いうことだろ
うか。

「どなたなのですか。今、力をつけているのは」
私が問うと、伊東さんは黙って唇を吊り上げた。

「まさか、伊東さんですか」
私は驚いて声高に騒いでしまう。すると、伊東さんは苦笑して言った。

「そんなわけがないでしょ。私なんぞがそんな力を持っているわけがないじゃない」

「では、どなたが……」

「時は巡り、カモ元の場所に還る。ということよ」

伊東さんは、はつきりとは何も教えてくれない。でも先程の考えから繋げるなら、次に権力を得るのは朝廷だ。『力が還る』――朝廷は昔、政治の中心地だった。

「伊東さんは今後、どうなさる御積りなのですか」

「ふふ。どうもこうもないわよ。ただ、自分の力を最大限に活用してくれるところに行くだけ」

伊東さんは満足そうに言って笑った。

時は無情に過ぎていく。私に与えられた時間はあまりにも短い。ぐずぐずしていたら、しびれを切らして土方さんたちが来てしまう。……もう時間はどれ程経った？かなり経っているはずだ。気のせいではない。

私は次、伊東さんに何を言えがいい？何と云えば、伊東さんと心が通じ合える？伊東さんと会ったら、こう言おうと思っていたことは全然役に立ちはない。伊東さんの言葉は掴みよのない水魚だった。彼の返答は予測もつかないところへ泳いでいく。

……これはまだ言えない、言うてはならない。これは最後の問いでも、ああもう私の陳腐な頭には他に何も浮かびはしない。伊東さんが不審に思うほど、たわいない会話すら続けることも出来ない。

今、もし言ったなら伊東さんはどう答えるだろうか。思いがけず、道が開けやしないだろうか。ちっぽけな淡い期待。そんな期待が通ずるわけがないのに。これを口にしてしまったら、もう終わりかもしれないのに。

私は重い口を開く。

「伊東さん、御陵衛士の皆さんと新選組は、また共に戦うことができますよね？たとえ今は別れてしまっても、いつかは……。だって目指すものは、きつと同じでしょう？以前、お互いに思い描いた志は一緒だったはずなんですから……」

縋るように私は言った。伊東さんに否定されたら、どうしようと思つた。自信の無さに震える声が弱くなつていくのを、自分の心を叱咤して抑えた。

私は伊東さんにそれを見つけて欲しかった。もし伊東さんに心当たりがあるのならば、もう一度埃を被^{ほこ}つて思い出して欲しかった。『志』を。或いは新選組が掲げる『誠』の心を。

「そう、ね」

伊東さんは驚いた顔で返事をして、

「そうよ。―また、いつか……」

言いながら伊東さんは、私から目を逸らした。声もどこか余所余所しい。

駄目なんだ。―私は、絶望しそうだった。

隣室には隊士が一人、潜んで私達の会話に耳を潜ませている。そして私が失敗したら、近藤さんたちを呼びに行くことになっていた。

今の言葉で伊東さんの考えを察して、もう隊士は近藤さんたちのところに行ってしまっただろう。じきに近藤さんたちが部屋に来てしまう。そうしたら、もう終わりだ。私はどうしたらいいのだろうか？ どうしたら……。

31・月照（前書き）

注意！このお話は流血表現があります。苦手な方はお止めください。

31・月照

黙りがちになってしまった私には、近付く足音がやけに耳についた。土方さんと近藤さんが部屋に入って来て、彼らの顔を見て凍り付いてしまう。

『もう終いだ』と、その目は語っていた。

*

あの子のことは、あまり把握していない。ただ、土方さんがらしくなく伊東さんに愛想が良くて、『仰ること全て御尤も』とばかりに相槌ばかり打ち、伊東さんが上機嫌で赤くなるほどお酒を飲んでいたことだけがぼんやり頭を掠める。

伊東さんは帰った。皆で彼を見送った。沖田さんたちは伊東さんの後を追って出発したばかりだ。

私は立ち尽くしていた。閉められた戸をいつまでも見つめていた。

こんなはずじゃなかった。一握りの希望はあったはずだった。それを無にしたのは私。私の無能のせい。

唇を噛んで私は飛び出そうとした。伊東さんの後を追いかけて、と思った。

「止めておけ」

と言って、誰かが家の前に出た私の腕を掴む。振り返ると、斉藤さんが立っていた。

「離して下さい！」

私は彼の手を振り払おうとして、強く腕を引いた。だけど、斉藤さんはより手に力を込めて離してくれない。

「何をしに行こうとしている？あんたの役目は、もう終わったはずだ」

齋藤さんの瞳が月明かりに鈍く光っている。その厳しい顔に、私は動けなくなった。

「行かせて下さい。伊東さんの最期を見届けたいだけです」

私は顎を引いて、斉藤さんを睨むように見据えた。斉藤さんは私の言葉に目を見開く。

斉藤さんが黙ったのは一瞬だった。

「ならば、俺も行く。……総司に頼まれた。あんたを頼む、と」

*

私達は走って伊東さんたちの姿を追った。

間に合って欲しいと思った。残酷な願いだった。伊東さんの死ぬ瞬間を見なければならなかった。でも見たくないのも、また本音だった。

た。

私達は間に合った。

暗い闇夜、月ばかりが仄かに路を照らす中。沖田さんの刀が、月光をきらりと反射して閃いた気がした。

伊東さんは抜刀していた。沖田さんに向かい合っていた。けれど、沖田さんの俊敏な突きには付いていけなかった。それは一秒よりも短い出来事だった。

伊東さんは倒れた。倒れた土に、黒く血が滲んでいく。

「相当酔っていたな。達人も形無しだ」

沖田さんの吐息のような言葉が風に消える。

私が駆け寄る前に、ざっと機械的に飛び出した他の隊士が慣れている動きで伊東さんの絶命を確認した。

私は遅れて伊東さんの傍に行った。こんなに気持ちの悪い遺体は初めてだった。それは伊東さんのものだった故だった。涙と吐き気が込み上げる。

「一君、あゆみさんを連れて帰ってくれる？僕達はまだ仕事があるんだ」

沖田さんの声がどこか遠くに聞こえた気がした。斉藤さんが私に近づく心配がする。私は首を振った。

「平助君が……残っています。平助君……は、助けないと」
私は震える声で言った。伊東さんは駄目だったけれど、平助君は――。平助君には生きていてほしかった。

笑わせる。あんなに周囲をめちやくちやに乱しておいて、伊東さんを救えなかったやつに何が出来よう。無言で見つめてくる皆の視線も、そう言っているのだろう。

「危険ですよ、あゆみさん。他の御陵衛士たちは伊東みたいに酔っちゃいない。巻き込んで貴女に怪我させるわけにはいかないんだ」
沖田さんの物言いもまなざしも、かつて見たことの無い程に優しかった。――駄々をこねているのは私だった。

「行かせて下さい。平助君の命を守るだけです。他は何もしません。危ないことには近寄りませんから」

「今の貴女の様子じゃ、なおさら連れて行けない。そんなに参っていて、何が出来るんです」

沖田さんの言うことは尤もだったが、私はなおも諦めるつもりはなかった。

沖田さんはため息を吐く。

「僕が代わりに平助を説得するつもりですから。あゆみさんは来ないで下さい」

びつくりした。まさか沖田さんからこんな言葉を聞くとは思わなかった。

沖田さんの瞳は真剣だった。だから私は彼に責任転嫁をしてしまった。

32・待つ間

斉藤さんと屯所に帰って部屋に戻ると、横にならずに沖田さん達を待つ。千鶴ちゃんも一緒に起きていた。そわそわと落ち着かないのは私で、千鶴ちゃんは気丈に振舞っている。千鶴ちゃんになだめられ、やっと少し余裕を取り戻すことが出来た始末。

「ありがとね、千鶴ちゃん。今日は何から何まで……」

「何を言っているんですか。これ位、大したことじゃありませんよ」千鶴ちゃんは笑って言うてくれる。そのやわらかい笑顔に安心して、私はぼつりぼつりと思いを吐き出した。

「伊東さん、遊びに行くといつもお菓子をくれたの。お茶も淹れてくれて。拒絶せずに話にも付き合ってくれて。私、多分御陵衛士になった人達を抜かしたら新選組で一番伊東さんに近かった」

「……ええ。そうですね」

「私、伊東さんの鋭い目付きが苦手だった。隙の無い立ち居振る舞いが怖かった。……それでも、どこかであの、強い意志に魅かれたのかもしれない。あの人を暗殺すると決まったとき、あの人を失いたくないと思った。あの人の死を考えただけで、何とも言えない喪失感が胸を支配して」

「はい」

「私、嬉しかったんだと思う。私っていう存在を受け入れてくれて、

一緒に話をしてくれたことが。私、心の中では伊東さんが少し好きだったのかもね」

「はい」

「だから、いいよね？ 今日だけは。伊東さんを救えなかったけれど。今日だけは伊東さんを悼んでもいいよね？」

「……………はい」

私は神経が高ぶっているのだろう。帰ってきてから涙が止まらないのに、どこかで冷静にそんな自分を眺めている自分がいた。

「千鶴ちゃんがいってくれて良かった。こんなに長い夜、一人じゃ耐え切れないよ……………」

私は千鶴ちゃんに感謝した。おずおずと、優しく抱きしめてくれる彼女の方がお姉さんのようだと思った。

「沖田さん達、大丈夫かな」

胸を渦巻く、もう一つの思い。

「大丈夫ですよ。皆さん、信じられないほど強いんですから。あゆみさんだって知っているでしょう？ ……平助君も無事に決まっていますよ。すごく包容力があるから、沖田さんたちの言葉もきくと彼の心に届いています」

「そうだね。そう、だよ……………」

きつと帰ってくる。皆、元気で。そう信じよう。

＊＊

音が聞こえた。出迎える声、それに答える声。

私と千鶴ちゃんは部屋を抜け出して駆けて行った。

玄関に沖田さんがいた。彼が生きているのを確認しただけで、私は一つ安心した。

「沖田さん！お帰りなさい！」
彼の元まで飛び込んでいく。

「怪我はっ？」
見れば、左肩に斬られた痕。まだ血が滲んでいる。

「大変！早く手当てを」
私は沖田さんの背を押した。

「あゆみさん」
首を向けた沖田さんの目が私を見ていた。何だろっ、と思った。ふと、横目に左之さんと新八つあんの帰着が見える。

「左之さん、新八つあんも！良かった！」

また一息。私の胸のつかえはどんどん消えていく。それなのに、どうして皆は暗い顔をしているの？

……まさか。

「……沖田さん、平助君は？」
まさか、そんなはずはない。彼に限って。……だって彼は、平助君は新選組の中でも飛び抜けて強い。

沖田さんは静かに私を見下ろしながら言った。

「平助は重傷を負った。……そしたら、天霧っていう鬼が現われた。可能性は低いが鬼の医術は人間よりも進んでいるから平助の治療を任せてくれ、と申し出てきたんだ。『そちらには風間の遊びを止めてくれた借りがあるから』って。僕達は一縷の望みに賭けた。……
…平助をあいづらに渡したんだ」

私は左之さんと新八つあんが唇を噛んで下を向いているのを、呆然としながら眺めた。

——平助君を天霧さんが連れて行った？何故。どうして。何の為に。

借りを返す為だけに……？

―平助君。無事なの？また絶対会えるよね？信じていていいよね。
早く元気な顔を見せて……………

＊＊

それから、この夜に起きた詳しいことを私は聞いた。新選組は高台寺を根城とした御陵衛士たちをことごとく殺したという。ところが御陵衛士のうち、阿部さんと富山さん、加納さんだけは取り逃がしてしまったようだった。

33・重罪

一日ですぐに溜まってしまふ洗濯をしていた。相変わらず、この世界の晴天は眩くて絶好の洗濯日和で。

平助君がいなくなつて三日。私はあの日から眠りが浅くなつていた。朝から晩まで数々の雑用をこなして、合間に巡察について行つて少しでも見聞を広める。そんなふうになるべく身体を疲れさせて、夜は倒れこむように布団で眠ろうとする。だけど、うとうとするばかりで眠つた気がしなかった。

見るのは悪夢ばかり。伊東さんの亡霊が私を殺す夢。平助君が私を呪いながら死ぬ夢。沖田さんたちが斬られて死んでしまふ夢。冷たい汗をかいて叫んで起き上がることもあつた。だんだん眠るのが怖くなった。隣の千鶴ちゃんに子どもみたいに肩を寄せさせてもらい、目を閉じるようになった。

*

『平助は僕達の話を受け入れてくれたよ』

沖田さんたちが油小路の夜の出来事を話してくれた。

『僕は平助とは命を奪い合いたくないって、取り合えず平助はこの場を離れてくれて言ったんだ』

ここで沖田さんの説明に左之さんが加わつた。

『あいつは最初迷つていたんだが、俺たちはもっと説得して遂に平

助は首を縦に振ってくれた。平助は走り出そうとして、気がかりそうに御陵衛士たちを振り返った。それから固まっちまったんだ。今の今まで仲間だった奴らの死体が転がってるのを見て、な。

―そこへ、俺たちと話した後の平助の逃走を裏切りと見た御陵衛士が斬りかかって、……………動けない平助は重傷を負った』

「お久しぶりです」

いきなり後ろから掛けられた声に、濡れた着物を干していた私はどきりとして首を後ろに回す。

「天霧さん」

今、一番会いたかった人が立っていた。

「平助君は……………」

今、一番聞きたかったことを口にする。

「生きています。生きていますが、貴女がたから見れば、もはや生きているとは言えないかもしれません」
「言いよどむように天霧さんは言った。」

心臓がばくばく五月蠅い。喉が乾いて何も喋れなくなった。天霧さんの伝えたいことがまだ分からないのに、聞き返せない。

私は眉を寄せ、拳を握り締めてから、話の先を目線で促した。

天霧さんは、そんな私を見てから話し出す。

「我々が彼を連れ帰ったとき、彼は死の一手前だった。出血が酷かった。だが、まだ望みはあった。実は、我が里には高度な医療技術がある。もしかすれば助かると思った」

天霧さんはそこで一度黙った。そしてすぐに続けた。

「だが、やはり無理だった。彼はもはや死へ足を踏み出そうとしていた。そんな彼の苦悶に満ちた顔を見下ろすうちに、私は許されざることの思いついた。私の袂にあった一つの小瓶に、私は手を伸ばした……………」

「……………まさか。まさか。天霧さんっ！変落水を、平助君に?!」
天霧さんは悔いていた。視線は足下に向け、ぎゅっと口を閉じていた。彼は「貴女は、やはり変落水を御存知だったのですね」とだけ、かすれるような声で呟いた。

どうして天霧さんを責められるだろう。

どうして天霧さんのしたことを憎めるだろう。あのとき部屋で待つことしか出来なかった私に、無理と分かっていたながら平助君に尽力してくれた天霧さんをどうして罵ることが許されよう。

「……平助君は元気ですか」
やっと思をついて、私は尋ねた。

「飲んで後、瞬く間に傷は塞がって、旅立ちました。……元気でしよう」

天霧さんは静かに答えた。彼の目線はまだ伏せられたままだった。

「ありがとうございます。天霧さん。平助君を助けようとしてくれて。それから、」

驚いてこちらを見ている天霧さんに、私はぎこちなく笑いかけた。

「変落水を与えてくれて。——こんなこと言えるなんて、本当におかしいですね。だけど私は嬉しい方が強いんです。何よりも今、平助君が生きていることが……」

「……………ありがとう」

辛そうに言つて、天霧さんは顔を背けた。

「……………私も分からないです。瀕死の平助君を目の前にして、もし近くに変落水があつたら。彼に人としての死を成就させてあげられる自信が無いです」

私は一人で言い続けた。

「だから私にはそんな謝られることはないです。だって私は、貴方は正しいことをしたつて、本当は思っているから……………」

沈黙が訪れる。私は束の間、蒼い空を見上げた。

「……………私は貴女に礼をしたかつた」

と、言う天霧さんに、私は視線を戻す。

天霧さんは続ける。

「風間は妻となる者を失つたが、頭梁に不似合いの厄介な遊びは止めた。貴女のおかげだった。だから、何か貴女の手助けが出来れば良いと思った。あの夜、貴女が藤堂を助けに行くと聞いた時、私も何か手を貸そうと決めた」

「いらしたのですか。あの晩、あそこに……」
驚いた。全く気付かなかった。そうか、あの油小路の晩に天霧さんは近くの闇に身を潜ませ、私と沖田さんたちのやり取りを見ていたのか。

ああ……。だから平助君の危機にいち早く対応してくれたのか。そうだったんだ……。

34・油小路夜話

『藤堂君は変若水で生き残ったことを恥じて、自分は死んだことにしたいと望んでいました。新選組の方々には、命尽きたと伝えて欲しいと言っていました。ただ貴女や雪村千鶴には、生きていると教えても良いと……。君達二人は新選組の因果に囚われた存在ではないから。つまり変落水で実験を行い、もはや切り離すことが出来ないほど深く関わってしまったているわけではない兩人には真実を伝えるても構わないということでした』

天霧さんの言葉が鮮明に耳に残っていて、まるで今聞いたばかりのような感覚だ。天霧さんと話したことを胸の中で噛み含めて考えて夜になってから私は千鶴ちゃんだけに真実を告げた。最初、千鶴ちゃんは『あんなに平助君を心配している新選組の皆さんに秘密にするなんて出来ません』と、強く首を振った。でも、私は知っていた。千鶴ちゃんも口を噤むだろう、と。

他の皆には『天霧さんから平助君は死んだと聞いた』と、重い嘘をついた。新八つあんは床に拳を打ちつけた。原田さんも拳を握り締めて、そうしたそうに見えたけれど留まっていた。土方さんはいつものように、むしろ一層深く悲しく眉間に皺を寄せていた。他の人―近藤さん、沖田さん、斉藤さん達は黙って遠くを見ていた。見えない涙がその頬を伝っているように、心は血を流しているように見えた。

ごめんね、皆、ごめんね。本当のこと、言わなくて。

『平助君の意思を優先する』だなんて、薄っぺらい感情で皆を傷つけた私は、きっと許されない。私の言うことを鵜呑みにして信じてくれるこの人達に、私は詫びることすら出来ない。

私は沖田さんに嘘をついた。私はもっと罪深くなった。もしかしたらもう、沖田さんにふさわしい女には二度となれないのかもしれないのかもしれない。

「平助の遺体はどこに」

近藤さんが一言だけ私に聞いた。

「損傷が激しくて、鬼の方々が既に埋葬したそうです」

「そうか……」

そこで、耐え難い会話はようやく幕を閉じた。

幹部を除いた新選組のうちでは、平助君はそれこそ『鬼』に連れ

去られたという噂も広まった。新選組が御陵衛士と激戦を繰り広げた油小路の夜、音もなくどこからか現われた見知らぬ黒尽くめの集団が瀕死の平助君を連れて掻き消えた、という話。

詳しい事情を知らない平隊士たちには、異形の鬼たちが不気味に映ったのだろう。

そんな鬼の噂が人から人へ語られていくのをときたま目にしながら、一つの季節がまた風の如く私の前を通り過ぎていった。

35・記憶

何物にも代えがたい時間が、私の前を足早に通り過ぎていく。幹部達と更に親しくなったのは、それでもこの頃のことだ。今までは少し遠慮があつたのかもしれない。私達の間にあつた立ちはだかる氷のようなそれが溶け始めると、私達はお互い本音を話すようになった。私が未来から来た経緯なども、皆真面目な顔で聞いてくれるようになった。し、ようやくだが変若水のことや彼らの目指すものや迷いなども伝えられた。

近藤さんに話をしに行った。私が姿を見つけたとき、近藤さんは縁側で御茶を飲んでいた。

「大野君」

私を見て近藤さんは微笑む。私はその笑顔を懐かしい、と感傷的に思う。この前に近藤さんに会ってから四日経っているせいかもしれない。

「雪村君が茶を淹れてくれてな、ありがたく飲んでいたところだよ。彼女は忙しいとかで、さっき行ってしまったが。全くあの子も君もよく働いてくれるよ」

そう話すと、近藤さんは一層深く笑う。

「全然苦じゃありませんから」

と私は首を振りつつ、頭ではどう話を切り出したら良いのかを考えていた。でも今言わずしていつ伝えられるか分からない。近藤さんはとても忙しいのだ。

ぴゅう、と目の前で風が吹いた。その音に、私達は何となく庭の方へ目をやった。

「――近藤さん、これから主力部隊から離れないで下さいね」

近藤さんが私の方に視線を戻す。私の唐突な発言を怪訝に思ったのだろう。

「…………心配してくれるのは有難いが。自分だけ安全なところにはいられんよ。例えば戦争で隊を率いるときなどは自分が先頭を切るぐらいでないと皆が付いてこない」

近藤さんは私の言いたいことを察していてくれた。でも私の心配を分かった上で、首を縦には振ってくれなかった。

「貴方を失ってしまったたら、新選組は成り立ちません」

近藤さんに納得して欲しくて、私は強く言う。すると、近藤さんは真面目な顔になって私を見た。その表情にどきんとする。

「君は第二のトシミみたいだな」

堅い表情をすぐに崩して、近藤さんが言った。

「そうですか？ やっぱり土方さんも近藤さんを心配なさってるんですね」

そう私が言うと、近藤さんは「そうやって言われると弱いな」と言っ
って苦笑する。

しばしの沈黙の後、近藤さんは、
「そうだな。……可能な限り、君の言うとおりにする」
と、言う。

「そうしていただけると嬉しいです。それに、私もお傍で近藤さんを守りますから」
私は力こぶを作って見せた。

「おいおい。女子に守られるなんて御免だ。逆だろう」
近藤さんは慌てて言った。……私は本気なだけだなあ。

＊＊

近藤さんと別れて、庭の片隅で左之さん・新八つあんを交えて日課の剣稽古を開始する。少しずつ腕は上がっていると思う。だけど、『境界線』は越えられていない。――飛躍的な進歩。私が欲しいのは、それだった。自分の身を守る強さ、新選組に付いて行く力、近藤さんの盾となれる器を、私は追い求めていた。だから、せめて浪士一人と渡り合える腕前になりたいと思う。なのに、左之さんたちに実践的な稽古をつけてもらうと恐怖心が邪魔をする。伊東さんたちの血を思い出すと、身体が急に固くなる。

こんなんじゃ、私はもう成長することが出来ない。……なんて気持ちにまたむくむくと頭をもたげてくる。

すると私の心を読んだかのように、

「……………もう止めたらどうだ」

と、左之さんが私に言ってきた。左之さんのいつになく真剣な様子に、新八つぁんは黙ってしまう。

「出来ませんっ」

左之さんが何を言おうとしているのか、私は何となく察しがつく。

「まあ、最後まで聞け。俺が言いたいのは……、お前が鍛えなくても総司がお前を守ってくれるだろ。男つてもんは好いた女を喜んで守るもんだぜ。だからお前はそこまで自分を追い詰める必要は無いってことだ」

「自分を守るっていう、消極的な目的の為にだけに特訓しているわけじゃないんです。そのお……、道を切り開く為にもやっているんです」

粹がっついていると言われそうで、ちよつと躊躇いつつ答えた。

左之さんは心底呆れた顔をした。

「……お前って時々、すごいことを言っただけのけるよな。……はあ、お前に負けてられないな。俺もここで戦いてえ」

その力強い言葉に、私は笑う。

「これ位、私のいた世界では普通ですよ。でも気持ちは有り難く受け取っておきます。これから一緒に戦いましょうね！」

そうだ、きっと大丈夫。皆で戦えば、絶対に良い方へ未来は開ける。

「おい。左之ばかり目立ってるんじゃないぞ。俺も同じ気持ちだからな！」

横から慌てたように新八つあんが言う。その様子に、左之さんと私は噴出した。

＊＊

鍛錬後に、廊下ではったり斉藤さんに会う。斉藤さんの顔色が、優れないように見えた。

「……第二のトシは斉藤さんですよ」

「は？」

私の言葉の意図が当然分からなかったようで、斉藤さんは首をかしげた。

「新選組が忙しくなると、大小の業務を自分で沢山抱え込むのは、土方さんと斉藤さん」

少しおどけるように言った。斉藤さんは眉をひそめる。怒らせたかな。

「……………そうかもな」

斉藤さんは、ふっと笑う。思わずガン見する。

わ、笑った！びっくり！レアだ！写真欲しい。ーそんなことを考えていたら、私の不穏な空気を捉えたのか斉藤さんは真顔に戻った。残念。

……………冗談抜きで斉藤さんは、とても頼りになる。彼には土方さんに次ぐ判断力がある。

「守りましようね。近藤さんを。あの人が新選組の要ですから。あの人の守りが大事ですよ？……………って、生っちょろい奴が何を言っているって思います？」

苦笑して、でも言ったことは本気で。だけど斉藤さんを見ると、

「あんたが言ったことは間違っではない。大将を守るというのは、本当は一番忘れてはいけないことだ。……………そういうふうに己の信じる道に踏み出していけるあんたを見ていると、俺も迷いが消える思いがする」

と、彼は言ってくれた。斉藤さんは私から目を逸らして、青い空を見上げる。どうしたんだろっ、と思った。

「……平和に、似ているな」

斉藤さんは『似ている』と言った。今は平和、ではないのだ。戦いの前の、束の間の安息にすぎない。

それでも、もし世の中が本当に平和になったら。

「……全部落ち着いたら、斉藤さんも結婚するのでしょうかね」

ふと思いついて何気なく言った。斎藤さんみたいに堅実で肝の据わった人は「是非婿に」っていう申し出が多くなりそうだし、じゃなくてもこんなに罪作りにも見た目が良い人を女性たちが放っておかないだろう、なんて思ったから。

「それで、あんたみたいな嫁を貰うのか？」

……彼の急な物言いに驚く。

「……いえ、私に似た滅茶苦茶なお嫁さんじゃなくて大丈夫です」
これは斉藤さん特有の天然的発言だよね？、と自分の心に言い聞かせてから言った。

「何故だ？女は皆あんたみたいなものではないのか」
そう返す斉藤さんの真意が分からなくて、私は彼の顔をじっと見た。

「か弱いくせに無鉄砲で、大切なものの為なら戦場に飛び出すこと
もためらわない。俺はあんたがそうだから、女とはそういうものだ
と思っていた」

「……いいえ。全ての女性が全てそういうわけじゃありません。近
藤さんには近藤さんの、土方さんには土方さんの、斉藤さんには斉
藤さんの在り方があるように、女性一人ひとりに違う生き方があり
ます」

「そうか。でも貰うなら、あんたみたいな嫁が欲しいと思う」
だーかーらー、そういう言葉は勘違いしそうなので止めてください。

「……斉藤さんなら、私以上のお嫁さんがいますよ」
脱力しながら私は答えた。

「それは光栄だ」

斉藤さんが淡く微笑んで、和やかな雰囲気、結局私もつられて笑った。

そう、物陰で沖田さんが私に黒く笑いかけているのに、今気がついたが見なかったふり。齋藤さんが笑いをこらえている、この野郎。斉藤さんにはかられたショックから私は立ち直れるだろうか……。

36・近藤襲撃

御陵衛士を三人逃したと聞いてから、言い知れない不安が濃くなり胸に渦巻いていた。

―でしゃばりだと思われるなら、それでも良い。なりふりなんて構ってはいられない。だから……。

「土方さん、近藤さんは御陵衛士の残党にきつと狙われます。だから、近藤さんの警護を内密で行いましょう」

内緒で土方さんの部屋を訪ねて、頭を下げる。土方さんは最初は驚いた顔をしたが、すぐにいつもの表情に戻った。

「確かにな。……お前の方が周りに気が回るようじゃ、俺も終いだな」

と言うと、土方さんは寂しそうに笑った。

＊＊

その後、事件は起きてしまった。新選組が伏見奉行所の警護について二日後のことだった。近藤さんが旧・幕府の上層部との軍議があり二条城から馬で帰る途中のことで、場所は―伏見街道。

近藤さんは屯所の守りをおろそかにして自分の警護を厚くするのに乗り気ではなかった為、隊士たちは交代で当の近藤さんには内緒で警護をしていた。今日は沖田さん・新八つあん・左之さんと私を含んだ六名が当番で、馬で行く近藤さんの前方を身を隠しながら進んでいた。沖田さんも鷹のような目で辺りを探りながら行く。私も沖田さんと同じようにきよろきよろしながら近くを歩いていた。

―彼らは銃を使って近藤さんを傷つけようとするんじゃないかな。銃で人を狙いやすい場所……。一体どこだろう。

考えながら歩いていると、急に沖田さんが走り出した。私は彼の向かう方角に目をやった。

―いた！

沖田さんに遅れて私も、家の二階から銃で近藤さんを狙う二人、阿部さんと富山さんを発見する。続いて、沖田さんのあからさまな走行によって皆が状況を察知した。

「あそこか！」

怒声上がる。

いち早く刺客に気がついた沖田さんが一人を斬殺したのは数十秒後。その気迫と、次々に駆け寄ってくる新選組隊士たちから逃げようとしたもう一人も、背中から沖田さんに斬り伏せられた。

「近藤さんに銃を向けるなんて、おこがましいにも程があるよ」
斬り終え、冷静さを取り戻した沖田さんが言った。

その場に駆けつけた左之さんが、

「俺たちは出番無しだな。まあ、いいけどよ」

と、呟いて、

「近藤さんは無事だしな」

と、同時に来た新八つぁんも言う。

―これで、近藤さんは御陵衛士の残党によって肩を銃で撃たれることは避けられた。

と、私は安堵したが……、

あつけない、とも思った。人が二人死ぬということが、これほど簡単に済んでしまうことが無性に寂しかった。巡り巡って自分もいつかこうやって誰かに殺されるかもしれないと思うと、背中にぞくりと震えが走る。

「そういえば、衛士の最後の一人、加納はどこにいるんだろう。まあ、奴一人なら今後も警戒していれば大丈夫だろう」

と、沖田さんが隊士に話しているのが遠くに聞こえた。

37・暗雲

御陵衛士残党を葬った後、私達は帰りの道中を辿っていた。ふいに一本の桜の樹の手前で、私の前を歩いていた沖田さんが足を止める。急だったので私も驚いて立ち止まった。そのとき私はのんきにも『ここにも桜なんてあったんだ』などと頭の片隅で思った。

「もう、いいですよ。今まで有難うございました。貴女に出来ることも、ここまでです」

突如、何故か他人行儀な口調で言いながら振り向いた沖田さんの顔を、私はただただ見つめる。彼が何を言いたいのか、私には分からなかった。

そんな私に、沖田さんが抱えてきていた風呂敷包みを差し出す。私
が手を伸ばしそれを無意識に受け取った後で、嫌な予感はいわじわ
と遅れてやってきた。これを開けたら、もう後戻りは出来ないよう
な、そんな気がした。

「開けて下さい」

有無を言わせない、いつもと違う沖田さんの固い声。

私の手は感覚が無くなって、意思とは別に布をめくる。

―そこにあつたのは、銀の衣。

「それを使って元の世界に帰って下さい、帰れる手段があるうちにこのままここにいたら、二度と向こうに戻れなくなるかもしれないよ？」

沖田さんは私にそんなことは言うてくれる必要なんてなかった。私の心は既に決まっていた。

「沖田さん……」

自分の気持ちを伝えようとして開きかけた口を、

「ここまで言わないと分からないのかなあ。―貴女はもう新選組には要らない。前々から、そういう話が幹部の中で出ていた。ああ、そうか。心配しなくても、近藤さんは僕が守りますよ。無意味な剣術鍛錬もこれきりにして、貴女は元の世界で元の幸せを取り戻せば

いい。こちらにいても意味が無いんだから」

と、沖田さんの言葉が遮った。

「……私は役に立ちますよ。私はちよつとですけど、この後のことも知ってて、それを皆さんにお伝えできて……」

―何。何。この不安感。沖田さんの眼差しには私への思いやりは宿っていないかった。言いようの無い恐怖が心臓を支配する。

沖田さんは私を見て薄く笑うと、

「未来は変わった。貴女が変えてくれた。最後に近藤さんを救ってくれた。近藤さんが無事で、新選組は磐石なまま。新選組がこの先に進む新しい道は、もう貴女には分からない」

と言った。

その沖田さんの言葉は、事実かもしれなかった。

「でもつ、」

なおも私は否定したかった。私だって新選組で雑用の一つや二つ、出来るはずだと言いたかった。

「聞こえなかったんですかね。――貴女は要らない」

一方的すぎる。こんなに突然な、態度の豹変は明らかにおかしかった。

「どうしたんですか？こんな急に。本当の理由を聞かせて下さい！」
――もし次に彼の口から告げられるのが更に酷いことだったら、私は……。

沖田さんは無感情な瞳で私の目を捕らえると、そのままで、

「他には何も無いですよ。ただ貴女を邪魔と最終的に判断しただけです。僕も、他の幹部も」

とだけ、言った。

38・別離

「じゃあな、今までありがとな」

「達者でな」

「さらばだ」

今まで黙って沖田さんとのやりとりを眺めていた幹部の皆が口々に、私に一方的な別れを告げて去っていく。

「待つ……………」

何、こんなの。こんな急に…………。何の冗談？

昨日まで、あんなに仲良く笑い合っていた人達が薄情にいなくなってしまう。

「ほら、行きなよ。あゆみさん」

ただ一人残った沖田さんが促してくる。

嫌だ。嫌だけど。でも…………。

― 沖田さんに必要とされない世界に、何の価値がある？

と、私の心が囁いた。

にわかに闇が現われる。衣の力だった。闇はブラックホールのように、衣を手にした私を吸い込み始める。

「嫌っ……！！」

思わず大声で叫んでいた。

―こんなの、こんなの、駄目。私、沖田さんにきちんとしたお別れさえも伝えてないのに。

「じゃあね。あゆみさん。楽しかったよ」

そんな沖田さんの声が聞こえたような気がした。

39・葛藤

辺りを見回すと、闇一色だった。願いが不明瞭なままで、吸い込まれたせいかもしれない。今までは「くに行きたい！」って強い願望をもって風の中に飛び込むのが常だったから……。

闇の世界は静かだった。いつものように風も吹き荒れていない。それが逆に不安を煽る。

暗くて、どちらに歩けば良いのか分からない。行き先も決められないまま、私はその場で立ち尽くしていた。

沖田さんに帰れと言われ、皆に別れを告げられた。もう、このこの屯所に戻るわけにはいかない。

じゃあ、両親や朝子がいる世界に戻るのか。

……うつん、本当は望んでいることがある。

とうに決めていたことがある。しがみついても沖田さんの傍に
いること、出来るならば新選組の助けとなること。だから元の世界に
は戻らない。

そう、だから帰りたいのは江戸時代なんだ。私が行きたいのは、沖
田さんのいる場所なんだ。

でも決心したところで私の気持ちに合わせて闇が変化するわけでも
ない。どうしたらいいというのだろう。

迷子のようにふらふら当ても無く歩き出すが、ちつとも先に進んで
いない気がする。

けれど、歩き続けた先で。

誰かが立っているような気がした。私に手を差し出している。

―私は、この手を知っている？ 思い出せないけれど、頼るしかない。

その手を握ると、その人は必死に何かを言っている気がした。闇で顔も喉も声も黒く塗りつぶされているように、何も聞こえないし明らかではないけれど。

『コンドウサンをタスケテ』。

何？ 近藤さんって、……………誰のこと？

……………ねえ、貴方は誰？

顔を覗き込もうとすると、突風が私達の間を吹き抜ける。

—痛い！

風は何十という鋭利なナイフのように、私の身体を切り刻み始めた。

意識が朦朧としていった。

40・墜落

ひよひよと可愛い鳥の鳴き声に、重たい瞼を持ち上げる。布団に寝ていることは理解したけれど身体が動かなくて、視界も霞んでいる。その理由が思い当たらなくて、逡巡した。

頭の中が疑問だらけになる。その答えを探しに立ち上がって……、あれ身体が動かない。どうして?!

べっしょ。べっしょ。ここはどこなんだろう?

見るところ、古風な民家のようだ。けれど、覚えの無い部屋。

仕方無しにそのままの状態で一時間ほど横たわっていると、誰かが部屋に入ってきた。恐る恐る、目を合わせる。

……あれ、見たことが有るような。誰だっけ？……………確か何
度も会っているのに思い出せない。

「私のことが分かるかね」
その人の問いかけに、私は「……………すみません」と答えた。

「松本だ。医者をしている」
その人は怒らずに教えてくれた。……………そうだ、松本先生だ。私は
ようやく思い出した。

「どうして……………」
私が現状をただす問いを口にすれば、

「それはこっちが聞きたい。大怪我した状態で、いきなり空から降
ってきたのはあんただ」

と、松本先生の切り返し。

「大怪我で、空から？」

―先程から一体何なんだろう。頭の中は霧がかかっているように、はつきりしない。

落ち着け。整理してみよう。覚えていることは、………ああ、伊東さんが亡くなったんだ。それが現実。あつ、平助君！………どこかに行ってしまった。………そして沖田さんが。

………沖田さんが私を拒絶して。

皆にさよならを言われて。私は………帰れなくて。それで………？闇に吸い込まれたような。

そう、その後の記憶が……無い。

「……今日って、何月何日なのでしょう」
私は松本先生に新たに質問した。

「四月二十四日だが」
すぐに先生は答えてくれる。

「四月二十四日……？」

眉を寄せ、記憶を辿った。確か、……皆と別れたのが十二月十八日だから、私が闇の中にいたのは約四ヶ月間。あの異空間で、私という存在はこれほど長く彷徨っていたということなのか。

「っ 沖田さんは?!」
何よりも大事な安否を尋ねた。

「無事だ。今は千駄ヶ谷にいる」

松本先生の答えに、私は少し安心する。

「斉藤さんは？新八つぁんは？左之さ……」

焦って矢継ぎ早に質問を重ねようとすると、

「まあ待て、一つずつだ。まず斉藤君は今でも新選組と行動を共にしているだろう。……だが、永倉君と原田君は……つい最近に離隊したそうだ」

そんな。まるで避けられない運命のように、二人は去ってしまったというのか。とても頼りになる、優しくて強い二人が。

「……………そう、ですか」

私は俯いてしまう。当分、口をきく元気も起きなくなった。

そんな私に松本先生は言った。

「もともと二人は離隊を考えて悩んでいたらしい。だが最後まで後

る髪を引かれていたのは、内密で離隊した一人にとても敬意を払っていた為だと漏らしていたという。――大野という名の」

ぱつと顔を上げた。

「それって……」

「二人を強く新選組に繋げていたのは君だ」
松本先生が力強く言う。

左之さん。新八つぁん。……ありがとう。出来る限り新選組にいてくれたんだね。

「原田君も永倉君も、立場は違えど新政府軍と戦い続けている」

そっとう人達なのだ。しっかり選択をして、後悔をしない彼らだからこそ私は今も信じている。

「ただ、近藤さんのことだが……」
言いにくそうに松本先生が話し出す。

—まさか。

「今、新政府軍に捕まってしまっている。隊が訓練で出払っていた屋敷を囲まれて、近藤さんが残って他の者を逃したらしい」

そんな松本先生の言葉が耳に入ってはきたが、私は先生の顔を見つめるばかりだった。

41. だけき

「助けに、行かなきゃ」

無理に立ち上がろうと身体を動かすと、

「痛っ……」

激痛が身体に走った。

「馬鹿者！そんな傷だらけの身体で歩けるはずがなかつた！」
松本先生が叱咤し、私の身体を布団にゆっくり横たわらせる。

「他の皆が助けに行けないほど近藤さんへの監視が厳しいのに、
どうして更に無力なあんたが近藤さんを救い出せるんだ？ 沖田君だ
って我慢しているというのに」

その言葉は的を得すぎていて、私は胸を強打される感じがした。唇
を噛み締める。

「まずは安静だ。完治するまで外へは出せん」
松本先生は、そう言つと部屋を出て行った。

次の日。血相を変えた松本先生が部屋に現われた。

気持ちの落ち着きを何とか取り戻し始めていた私は寝たままです、何事だろうと先生の顔を見上げた。

「――近藤さんが、斬首されたそうだ」

何で、松本先生は言ったのだろう。その言葉を理解しようとする頭に、必死に抵抗する。

――考えるな、考えるな自分。考えちゃだめ。考えたら……。

意思とは真逆に、思考は活動を止めない。近藤さんの死報が、私の全身に伝わっていく。

「ああ……」

知ってた。分かっていた。長州の間者を沢山殺した新選組の長として長州に憎まれた近藤さんが捕まれば、いつか殺されるかもしれない。だけど……

ウケイレタクナイ。

――近藤さん。彼の名を音にすれば、初対面のあの日から変わらない笑顔を思い出す。

あの日……、幹部たちに囲まれて噛み付いて、でも内心怯えていた私に自然に手を差し伸べてくれた、本当に優しい人。

どんなに困難に打たれて苦しんで疲れても、笑顔を向けてくれた人。

私が守ろうと思っていた。近藤さんがいることで現出する安穩の場所を壊されたくないと思っていた。

近藤さんの盾となってもいいと思っていた。大好きで、身内のように考えていた。あの人がいなくなるなんて考えたくないと思っていた。それなら、自分の命が消えたほうがいいと思っていた。

けれど、いない。あの温もりは二度と戻っては来ないのだ。

――沖田さん。

頭の中で、近藤さんの隣に立つのは沖田さんの姿。

近藤さんが亡くなって、沖田さんはどれほど苦しんでいるのだろう。心配で、いてもたってもいられない。

—ああ。沖田さんに、会いたい。

42・憧憬

沖田さんに会いたい気持ちは、日を重ねても弱まることはない。むしろ凝縮されるかのように、私の心の中で濃くなり深まっていく。そうして二週間が経った。傷もかなり癒え、これ以上このまま眠るばかりでいるなんて出来そうになかった。

土方さん率いる新選組は、北へと行軍したという。打ちひしがれ、いつ自殺を図ろうとするかも分からない沖田さんを土方さん達は結局どうすることも出来ず、とうとう身を切られるような思いで沖田さんを残して。

私は決意をした。

「……行こうと言うのか」

私の表情を見ていた松本先生が聞いてくる。

「はい」

迷い無く答えた。

「あんたの声でも今の打ちのめされた沖田君には届かないかもしれないぞ。それでも？」

先生は更に問いかけてくる。

「はい」

しっかり頷く。

「あんたは強いな。というより無鉄砲なのか？」

自問自答するように先生は呟いた。私はただ笑った。そんな私の顔を見て、先生はため息をつく。

「分かった。私は止めない。気が済むなら行って来い。言わなかったが沖田君は近藤さんが生きているときに何度も一人抜け出して助けに行こうとした為に軟禁され、今もいつ自害しようとするかわからないので、刃物を取り上げたまま閉じ込められているようだ」

松本先生が付け加えて教えてくれた。

「……しかし、そこまでするほどあんたが沖田君を好きとはな」
今度は理解できないというように、先生は首を振って言う。

好き。私の沖田さんへの感情は、今となってはそういったものではない気がしてくる。

「ただ眩しかった、それだけです。沖田さんに憧れて憧れて、眩しくて。好きだって言われたときも、幸せすぎてどこか信じられなくて。どうして自分を受け入れてくれたのか分からないときもあって。だから突き放されても、やっぱりって納得できてる自分がいて……」

だけど、どうしても魅かれてしまう。どんな形でもいいから、あの人の傍にいたいと願ってしまう。たとえば、もう沖田さんが私に笑いかけることが無いとしても。

「……行くんだな」

私の目の色を見て、今度ははっきりと先生は言った。

43・再会

とにかく歩いた。まだ電車もバスも誕生していない世界では、自分の足しか無かった。

沖田さんが江戸の千駄ヶ谷にすることが、ただただ幸運だった。私が養生していたのも、また江戸の中だったから、歩いていけない距離ではない。

私は時を惜しみながら、早く一人旅をした。身体の傷がいまだに引きつったけれど、脳裏には沖田さんの姿しか浮かばなかった。

日が傾く頃、私はやっと沖田さんがいる家に着いた。身分を明かし、彼のいる部屋に案内してもらった。

げっそりとやつれた沖田さんを見て、私は声をかけられもしなかった。

暗闇の中、彼はただぼんやりと影を見ていた。その様子を見ているこちらに沖田さんは気がつきもしない。あれほど人の気配に鋭敏な沖田さんが、これほど放心状態であるなど相当の事だ。

どうしよう、と思った。私は動けずにその場に立っていた。

そのとき、ふと思った。

――抱きしめても良いだろうか、と。

何も言わずに突然抱きしめたら、驚いて突き飛ばされるかもしれない。沖田さんは本当に私のことなんて嫌いになっいて、私の手など必要としていないかもしれない。

それでも抱きしめたい、と願う。こんな沖田さんを目の前にして放つてはおけない。

―私が彼の手を必要としたように。いいえ、例え彼に望まれていなくても私の手で包み込みたい。

私はゆっくり沖田さんに近付く。目の前に立つても、かがんで膝を付き頬に触れても沖田さんは反応を示さない。

けれど、力を込めて抱きしめたとき、ぴくりと動く気配を腕に感じた。

「あゆみ……さん？」

耳元で戸惑う沖田さんの声がする。

気がついてくれた。嬉しくて嗚咽が漏れる。

私は離れがたかったけれど、沖田さんを腕から解放した。沖田さんの透き通った瞳がこちらを見ている。

「どうして、ここにいますか。……ふ、それは僕の方が」
沖田さんは自嘲した。

近藤さんを守れなかったこと、見捨てたこと、一人で逝かせてしまったことが沖田さんの胸の中で渦巻いているのかもしれない。実の兄以上に慕い、何よりも大切に思っていた近藤さんを犠牲にして生き残ったことが沖田さんを苦しめている。

私は何も言えなかった。沖田さんは私の自己満足な言葉なんて必要としていないだろう。

「僕は残る近藤さんを見捨てて逃げたんだ。そして命が助かったのに、あれから後悔ばかりだ。どうして僕はあるとき近藤さんを置いて行けたのだろう。いくら近藤さんが、近藤さんを連れずに逃げるのを渋る僕を叱咤したからといって。あんなに僕に怒るあの人を初めて見たのだとしても……。僕を嗤^{わら}って下さい、あゆみさん。罵ってくれ、近藤さんの代わりに……………」

沖田さんは両手で頭を抱えた。

それでもやっぱり私は何も言えない。

けれど、もう一度沖田さんを抱きしめた。沖田さんの身体が驚いたように固くなった。

「…………許されるなら近藤さんの代わりに貴方を抱きしめます」

泣き崩れる沖田さんの重みが私の肩に寄りかかってくる。

「生きて。沖田さん、生きて下さい」

ねえ、お願いだから……。

44・月雲

肌寒い夜だった。私は居間を出て、温かい御茶を沖田さんに持つて行く。

灯りをもしていない部屋に、沖田さんはいた。三分の一ほど欠けた月が、沖田さんの横顔を照らしている。流れの速い雲が月を一瞬隠しては逃げていく。

薄暗いところに佇む沖田さんの姿に驚いた。また沖田さんが遠くに感じられたから。

私は声が出なかった。

「……考えるんだ」

こちらを見ないまま口を開く沖田さん。

私が来たことには気付いているようで、ほっとする。

「近藤さんが投降して僕は周りが見えなくなっていて、それゆえ新選組の他の皆だけ北へ行かせてしまったことを」

沖田さんは静かに続けた。

私と彼が再会した日から気丈に振舞っていた沖田さん。今日になってやっと、沖田さんの胸に渦巻いている感情を、私はようやく耳にしている。

「蝦夷まで海を渡るのは新政府の目が厳しいと言う。新選組の幹部だった僕が一人で行けば、正体がばれて捕まるかもしれない。それに、ここに貴女を置いていくのも気がかりだ。……僕はそんなことを理由に、土方さん達のところへ行くのをためらっている。僕は実は臆病者だったって、初めて知った」

「私も怖いです。この儚く得たひとときが消えてしまうのも。……ねえ、沖田さんは知っていますか。私はそのままの姿で何度も時代を行き来して、その間貴方は少しずつ歳をとって。もう貴方は私の歳に追いついているかもしれないことを。」

静寂の後に、沖田さんは再び口を開いた。

「……最後に貴女と別れたあとき。貴女を元の居場所に帰すなら、

あれが最後だと思った。貴女があそこにいたら、近い戦で貴女が自ら矢面に立つことは明らかだった。僕は自分の心を押さえつけて決断した。皆にも貴女の幸せの為に協力してもらった。貴女はいなくなり、僕の光は再び近藤さんだけになった。気持ちは荒んでも、まだ耐えられた。自分で決めたことだから。けれど、近藤さんが捕まって、……死んだ。僕は……、今まで自分がどう息をしていたかも分からなくなった。あの日、貴女がやって来てくれるまでは」

それまで私は沖田さんに何も言えないまま黙りこんでいた。気持ち言葉をしようとしても出来なかった。

―でも、これだけは伝えなければいけない。

私は意を決した。

「私も一緒です、沖田さん。私は新選組が大切だなんて言うていながら、こうして隊を放っておいて貴方のそばに居続けている。沖田さんと新選組を秤にかけて、結局貴方を選んでしまいました」

「……うん、そうですね」

静かに呟く沖田さんの表情が、単に雲間から現われた月光の為せる技だったかもしれないが、かすかにやわらいだように見えた。

45・後話

はっと目が覚める。今まで見ていた夢が混ざり合って、すぐに頭が追いつかない。けれど思い出せば、不快な心臓音の高鳴りが消えるようになったのは、それでもここしばらくからのこと。

江戸で私と沖田さんは松本先生を頼って暮らし始めていた。ようは隠れ家である。

沖田さんは早朝に出かけてしまっていた。今日の松本先生のお手伝いは特に忙しいらしい。でも昨日、帰りはそんなに遅くならないと言っていた。

「起こしてくれればいいのに……。朝食作れなかった。絶対食べないで行った」

自分の朝寝坊なのに沖田さんに腹を立てる。

ぶつぶつと文句を呟きながら、顔を洗いに庭の井戸へ出た。汲み上げた水を手の平で掬えば、その冷たさが心地良い。

濡れた顔を手拭いで押さえると、青い空の眩しさを感じる。新選組の羽織の色だ。誇らしいと同時に泣きたくなる、彼らの背中の色だ。

その青を最後まで引き継いだのは土方さんだったが―この間、私は松本先生から土方さんの戦死を聞いた。そのときは目の前が真っ暗になった。千鶴ちゃんの安否は明らかになっていない。けれど、多分彼女も愛する人の傍で……………

「…………沖田さん、今日は初鯉を絶対に買って帰るって昨日はしゃいでたな。よおし、他にもいっぱいごちそう作って驚かせよう」

また泣いてしまいそうで、楽しいことに気を逸らす。私は仕事を始めた。

*

昼頃になって家の前を掃いていると、ふと向こうの遠い道先に人影が二つ見えた。

見間違えようもなかった。

何か考える前に私は駆け出していた。あちらも、一人は既にこちらへ走り出している。もう一人はそのままゆっくり歩いていたが、こちらに進む足を止めはしなかった。

「千鶴ちゃん！」

「あゆみさん！」

勢いよく私達は抱き合っていた。千鶴ちゃんの後ろの方で土方さんが苦笑しているのが目に入る。

「二人とも……ご無事で」

「お前もな」

土方さんの笑顔がやわらかい。

「取り合えず、上がってください」

私は二人を家の中に通す。そして御茶を出しながら彼らから、私達が別れた後の話を聞いた。斉藤さんは途中で離隊して会津の人達と、新政府軍との激戦地の会津に残ったこと。それから、千鶴ちゃんが土方さんの助けを借りて、変若水を飲ませた人間のしもべを増やして世界を手中に収めようとする悪事に走った養父の綱道さんを葬ったこと。戦いながら北へ北へと向かった新選組が、蝦夷でも沢山戦死者を出したこと。けれど、とうとう五稜郭で新政府軍に白旗を揚げたこと。流れた土方さんの偽死報を利用して身を隠しながら本島

へ二人で帰って来たこと。……詳しく話をせがんだので、気がつく
と何時間も経ってしまったようだ。

一つの話が終わって、何となく沈黙が訪れる。

「千鶴が、お前は戻ってきているんじゃないか、それなら会いたい、
と言っんでな。急に悪かった」

土方さんが静かに言った。

「あら、土方さんだって乗り気だったじゃないですか」
千鶴ちゃんが聞き捨てなら無いというように言う。

「……結局、大野のいるところには自然と足が向かつちまうんだよ。
俺ですらそうなんだから、他のやつらはなおさらだろう」

と、観念した土方さんがそっぽを向きつつも言ってくれる。その言
葉が私には泣きたいほどに嬉しかった。

私達は、かつての新選組の仲間はまだ繋がっているのだと思った。

だから、きつとまた会える。――左之さんにも新八つぁんにも斉藤さんにも、それから平助君にも。

「……ところで、」

言いにくそうに土方さんが言う。その目は先程から話の途中で幾度も玄関へ向かっていた。

……ああ、土方さんは彼の帰りを待っているんだ。

「あつ、沖田さんは暮れ前には戻るそうです。お二人共、泊まって下さいね」

心が浮き立つ。ご飯、沢山用意しておいて良かった。今日はきつとにぎやかになる。

― 沖田さん、早く帰って来て。皆が貴方の帰りを待っているよ……

そのとき、玄関で「ただいま」という声が聞こえた。

― 完
-

> 参考文献 <

松浦玲著『新選組』（岩波新書、二〇〇三年九月）

45・後話（後書き）

長かった連載がやっと終わりました。今まで応援ありがとうございました。ありがとうございました！荒来

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3486/>

年上の君に

2011年11月12日21時01分発行